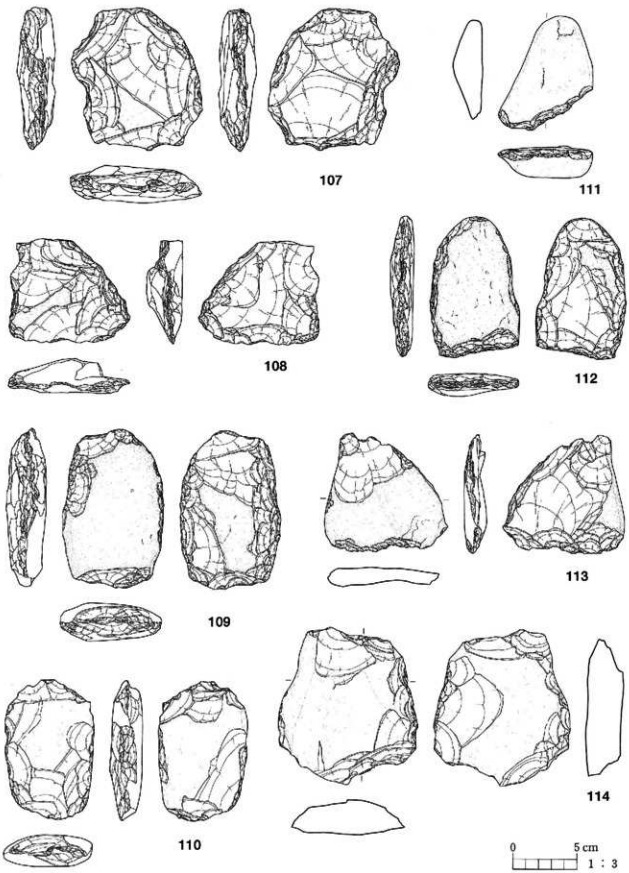
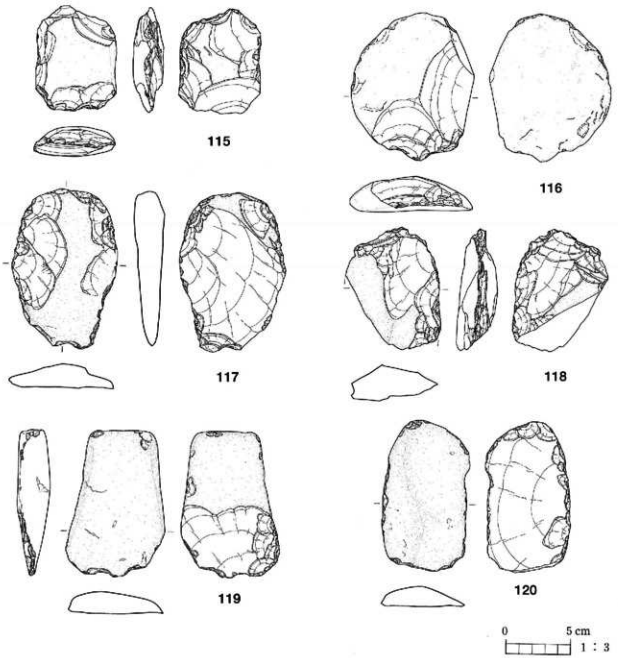


第28図　Ⅶ層出土石器 3



第29図　Ⅶ層出土石器 4

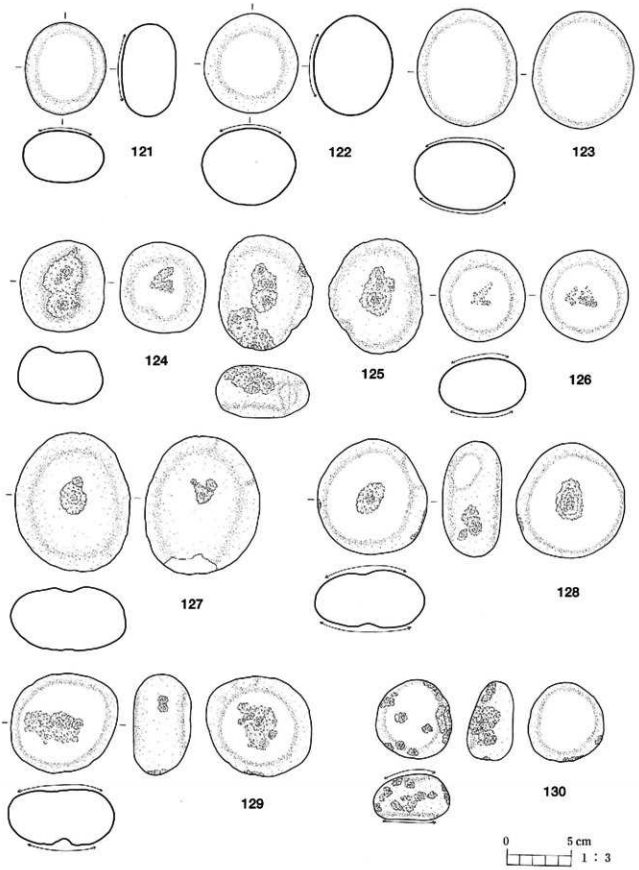
⑤打製石斧（第27図　103～106）

打製石斧は 4 点を図化した。石材は117が砂岩製のほか，いずれも頁岩を利用している。103は両側縁部方向からの整形剥離が行われた後，頭部および刃部方向からの整形が行われている。裏面には礫面が残存している。

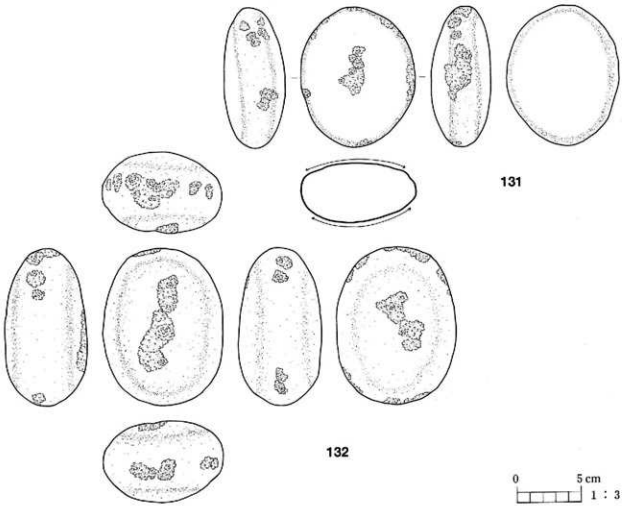
104は整形が丁寧に行われている。刃部から胴部途中を欠損している。105･106は打製石斧の頭部として分類した。比較的大型のものである。

⑥礫器（第28　図107～114・第29図　115～120）

107～114は礫器として分類した。石材はいずれも頁岩を利用している。打製石斧の一部や欠損後



第30図　Ⅵ層出土石器 5



第31図　Ⅶ層出土石器 6

斧の一部や欠損後に再加工を施したものが含まれている可能性がある。側縁部からの整形剥離や連続する細かい剥離によって刃部が形成されているものがあるが，礫面（自然面）を残すものが多い。

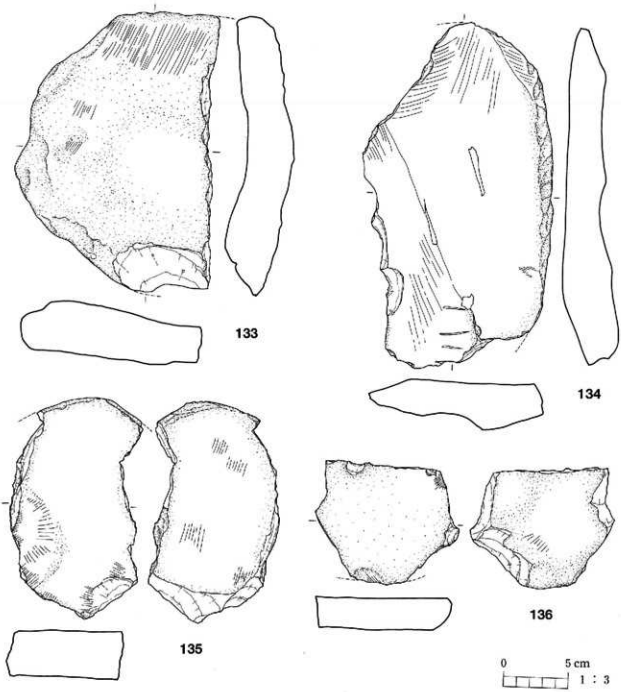
⑦磨石・磨敲石・敲石（第30図　121～130・第31図 131・132）

121～132は磨敲石類として分類した。これら磨敲石類には，いわゆる凹石も含まれる。形状は，平面形が円形あるいは亜円形，断面形が楕円を呈する安山岩・砂岩・花崗岩が利用されている。

121～123は磨石である。石材は121，122が砂岩，123が花崗岩で，断面形状が楕円形の円礫利用している。121・122;は片面，123は両面に磨面が観察される。

126·128～131は磨敲石である。いずれも両面に磨面が認められ，表裏面の中央部にのみ敲打痕があるもの（126），表裏面と側面の一部に敲打痕があるもの（128・129），表面から側面にかけてあばた状に敲打痕をもつものなどがある。

124・125・127・132は敲石である。124・125・127は表裏面の中央部，132は表裏面の中央部および側面の一部にに敲打痕がある。



第32図　Ⅶ層出土石器 7

⑧石皿（第32図　133～136）

133～136は石皿である。いずれの石皿も使用面がくぼむほどの凹面の形成は認められないが，部分的に擦痕を観察できる。使用面の中央付近にはわずかに光沢のある磨面をもつ。133～135は輝石安山岩を素材とする石皿である。136は砂岩製の石皿で欠損している。

第8表　Ⅶ層出土土器観察表1

図No.	図面番号	器種	部位	類別	出土区	層	遺物番号	色調 外面	色調 内面	胎土 石	胎土 長	胎土 カク	胎土 その他	文様・器面調整等
16	4	深鉢	口縁部	Ⅰ	N－26	Ⅶa	182	暗赤褐	暗褐		○		金雲・黄白砂	横位の貝殻刺突文
	5	〃	胴部	〃	M－23	Ⅶb	1725・1726	暗赤褐	暗褐	○			雲・白砂	横位の貝殻刺突文
	6	〃	胴部	〃	N－25	Ⅶa	231	褐灰	暗褐	○		○		横位の貝殻刺突文
	7	〃	底部	〃	N－25	Ⅶa	143・436	にぶい褐	にぶい褐		○		金雲・黒粒	胴部に横位貝刺・底部に短沈線
17	8	〃	口縁～底部	Ⅱ	N－24・25・27	Ⅶb	106・401・402他	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○		白砂・赤褐粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺－縦位貝刺－条痕文
	9	〃	口縁部	〃	M－27	Ⅶb	1555	にぶい褐	黒	○	○	○	黄砂	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋縦位貝刺文
	10	〃	口縁部	〃	M－24	Ⅶb	1710	橙	橙	○	○	○		2段横位貝刺＋縦位貝刺文
	11	〃	口縁付近	〃	M－27	Ⅶb	1533	黄灰	にぶい黄		○		金雲・黄白砂	横位貝刺＋縦位貝刺＋条痕文
	12	〃	口縁部	Ⅲ	M－23・N－24	Ⅶb	1784・1700	にぶい赤褐	褐灰		○	○	雲・黄白砂・黒粒	口唇刻・口縁下横位貝刺－縦位貝刺－条痕文
	13	〃	口縁部	〃	M－26	Ⅶb	1600	にぶい褐	褐	○	○	○		口唇刻・口縁下4段横位貝刺＋縦位貝刺文
	14	〃	口縁部	〃	N－24	Ⅶab	388・412	黒褐	黒褐			○	金雲	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋縦位貝刺文
18	15	〃	口縁～胴部	〃	M－27	Ⅶb	1532・1587	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○	雲・黄橙砂	口縁下3段横位貝刺＋縦位貝刺＋条痕文
	16	〃	口縁部	〃	N－27	Ⅶb	503	暗褐	黒	○	○	○	黄橙砂	口唇刻・口縁下縦位貝刺文＋条痕文
	17	〃	口縁部	〃	N－24	Ⅶb	100	灰褐	暗赤褐	○		○	雲・黄白砂	口唇刻・口縁下4段横位貝刺＋縦位貝刺文
	18	〃	口縁部	〃	M－24	Ⅶb	1689	褐	黒褐	○			雲・黄橙砂	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋縦位貝刺文
	19	〃	口縁部	〃	N－25	Ⅶb	415・428	にぶい褐	にぶい褐		○		金雲多	口縁下3段横位貝刺＋縦位貝刺文
	20	〃	口縁付近	〃	M－27	Ⅶb	1570	にぶい赤褐	黒褐		○		金雲多・黄白砂	縦位の貝殻刺突文
	21	〃	口縁付近	〃	N－26	Ⅶb	573	褐	褐					口唇刻・口縁下横位・縦位貝刺＋条痕文
	22	〃	口縁部	Ⅳ	N－25	Ⅶa	167・458	橙	黒褐	○	○		黄白・黒砂粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋爪形文
	23	〃	口縁部	〃	M－25	Ⅶb	1651	橙	黒褐	○	○		茶粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋爪形文
19	24	〃	口縁～胴部	Ⅴ	N－24	Ⅶb	354	にぶい褐	にぶい褐					口縁下2段横位貝刺－斜位貝刺＋条痕文
	25	〃	口縁部	〃	N－25	Ⅶa	204	にぶい赤褐	暗赤褐					口唇刻・口縁下2段横位貝刺－斜位貝刺－条痕文
	26	〃	口縁部	〃	N－24・26	Ⅶb	309・1603	にぶい褐	にぶい褐	○			金雲・黄橙砂	口唇刻・口縁下2段横位貝刺－斜位貝刺－条痕文
	27	〃	口縁～胴部	Ⅵ	M－27	Ⅶb	1585	にぶい赤褐	褐灰	○	○		雲	口唇刻・口縁下2段横位貝刺＋竹管状刺突文
	28	〃	口縁部	〃	M－24・26・27	Ⅶa	59・1027・1530他	黒褐	黒褐		○		金雲	口唇刻・口縁下2段横位貝刺＋竹管状刺突文
	29	〃	口縁部	〃	N－25	Ⅶb	1663	にぶい褐	褐		○		金雲多・黒砂粒	口唇刻・口縁下2段横位貝刺＋竹管状刺突文
	30	〃	口縁～胴部	〃	M－25	Ⅶb	1514	灰褐	黒褐				金雲	口唇刻・口縁下2段横位貝刺＋竹管状刺突文
	31	〃	口縁部	〃	N－24	Ⅶab	311・121	にぶい赤褐	褐		○		金雲	口縁下2段竹管状刺突文＋条痕文
	32	〃	口縁部	〃	M－27・N－24	Ⅶb	1536・1670	暗赤褐	黒褐	○	○		金雲・黄白砂	口唇刻・口縁下4段横位貝刺＋ナデ
	33	〃	口縁～胴部	〃	N－24	Ⅶb	1720	橙	にぶい褐		○		金雲・黄白砂	口唇刻・口縁下爪形状連続刺突文
20	34	〃	口縁～底部	Ⅶ	N－26	Ⅶb	585	にぶい褐	にぶい褐	○			金雲・白砂	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	35	〃	口縁～胴部	〃	N－24	Ⅶb	310・394	にぶい褐	にぶい褐		○		金雲	口唇刻・口縁下4段横位貝刺＋押引文
	36	〃	口縁～胴部	〃	N－24	Ⅶb	354	にぶい褐	にぶい黄橙	○			金雲・黄白砂・黒粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋押引文
	37	〃	口縁～胴部	〃	N－25	Ⅶa	145	橙	褐	○			雲・黄白砂・黒粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋押引文
	38	〃	口縁～胴部	〃	M－26	Ⅶb	1600	にぶい褐	にぶい褐		○		金雲多・黄白砂	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋押引文
	39	〃	口縁部	〃	N－25	Ⅶb	1558・1559	にぶい褐	灰褐	○			雲・白砂・茶粒	口唇刻・口縁下横位貝刺＋押引文
	40	〃	口縁部	〃	N－25	Ⅶa	215・218	にぶい褐	にぶい褐	○			金雲・茶粒・黒砂	口縁下4段横位貝刺＋条痕文
	41	〃	口縁部	〃	N－25	Ⅶb	466	にぶい褐	にぶい黄褐		○		金雲・黄白砂	押引文
21	42	〃	口縁部	〃	N－24	Ⅶ	315	にぶい橙	黒褐	○	○		雲・茶粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	43	〃	口縁部	〃	M－26	Ⅶb	1602	褐	褐		○		金雲多	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	44	〃	口縁部	〃	N－23	Ⅶ	－	橙	にぶい橙	○	○		茶粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	45	〃	口縁部	〃	M－28	Ⅶb	1510・1513	褐	にぶい褐				黄白砂・赤褐・黒粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	46	〃	口縁部	〃	M－25	Ⅶb	135	にぶい褐	にぶい褐		○		金雲多・黄白砂	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	47	〃	口縁部	〃	N－24	Ⅶb	403	黒褐	黒				金雲多	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	48	〃	口縁部	〃	M－27	Ⅶb	1181	にぶい褐	灰黄褐		○		金雲多	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	49	〃	口縁部	〃	M－27	Ⅶb	1587	にぶい褐	にぶい褐		○		金雲・黄白砂	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	50	〃	口縁部	〃	N－24	Ⅶb	395	にぶい赤褐	黒褐		○		金雲多・黄橙砂	口唇刻・口縁下6段横位貝刺＋条痕文
	51	〃	口縁部	〃	N－24	Ⅶb	309	橙	橙		○		雲・茶粒・黒粒	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文
	52	〃	口縁部	〃	N－25	Ⅶb	421	橙	にぶい黄褐	○	○		雲	口唇刻・口縁下3段横位貝刺＋条痕文＋ナデ
	53	〃	口縁部	〃	N－25	Ⅶb	435	にぶい赤褐	暗赤褐	○			金雲・茶粒	口縁下4段横位貝刺
	54	〃	口縁部	〃	N－26	Ⅶb	622	にぶい赤褐	黒褐				金雲	口縁下3段横位貝刺＋条痕文＋ナデ
22	55	〃	胴部	Ⅰ～Ⅶ	M－24	Ⅶb	1688・1777	にぶい褐	にぶい褐			○	金雲	押し引き文／ナデ
	56	〃	胴部	Ⅶ	N－24	Ⅶ	390	明褐	黒	○			雲・黒粒	貝殻条痕文／ナデ
	57	〃	胴部	Ⅰ～Ⅶ	N－24	Ⅶa	68	明褐	灰褐	○	○		雲・茶粒	押し引き文／ナデ
	58	〃	胴部	Ⅰ～Ⅶ	N－24	Ⅶb	1674	赤褐	褐灰	○			雲・白砂	押し引き文／ナデ
	59	〃	胴部	Ⅰ～Ⅶ	M－23	Ⅶ	1801	にぶい橙	にぶい褐				金雲多	押し引き文／ナデ
	60	〃	口縁～胴部	Ⅰ～Ⅶ	M－27・N－28	Ⅶb	352・1539・1554	灰褐	にぶい褐				金雲・黄橙砂	横位貝刺＋縦位貝刺＋条痕文
	61	〃	胴部	Ⅰ～Ⅶ	M－23	Ⅶb	1756	にぶい褐	にぶい褐	○			雲	押し引き文／ナデ
	62	〃	胴部	Ⅰ～Ⅶ	M－23		1131	にぶい褐	にぶい褐	○	○			貝殻条痕文／ナデ
	63	〃	胴部	Ⅰ～Ⅶ	M－23	Ⅶ	1902	灰褐	灰褐	○	○		金雲	貝殻条痕文／ナデ
	64	〃	胴部	Ⅰ～Ⅶ	M－24	Ⅶb	1690	にぶい黄褐	にぶい黄褐			○	茶粒	貝殻条痕文／ナデ
	65	〃	胴部	Ⅰ～Ⅶ	N－24	Ⅶa	305	灰褐	褐		○		金雲	貝殻条痕文／ナデ
	66	〃	胴部	Ⅰ～Ⅵ	N－24	Ⅶa	63・301・302	にぶい褐	にぶい褐		○		金雲	貝殻条痕文／ナデ
	67	〃	胴部	Ⅰ～Ⅵ	N－25	Ⅶa	133	にぶい赤褐	黒褐		○		金雲多・黄白砂	貝殻条痕文／ナデ
23	68	〃	底部	Ⅰ～Ⅵ	N－25	Ⅶa	452・1665	明褐	黒褐	○			雲・黄色砂・黒粒	底部に縦位の短沈線
	69	〃	底部	Ⅷ	N－25	Ⅶa	442	褐灰	黒褐		○		金雲・白砂	縦位の貝殻条痕文
	70	〃	底部	Ⅰ～Ⅵ	N－22・24	Ⅶab	266・376	にぶい褐	にぶい褐		○		金雲・黄白・黒砂	胴部に貝殻条痕文＋底部に縦位の短沈線
	71	〃	底部	Ⅰ～Ⅶ	M－23	Ⅶb	1727	赤褐	にぶい赤褐	○	○		金雲	底部に縦位の短沈線
	72	〃	底部	Ⅰ～Ⅶ	M－22・N－24	Ⅶ	77・1809	にぶい褐	褐灰	○	○	○	雲	底部に横位の貝殻刺突文
	73	〃	底部	Ⅰ～Ⅶ	M－24	Ⅶb	1687	灰褐	褐灰		○		金雲	底部に縦位の短沈線
	74	〃	底部	Ⅰ～Ⅶ	N－24	Ⅶa	81	にぶい橙	灰褐		○		金雲多・黒砂	胴部に貝殻条痕文＋底部に縦位の短沈線
	75	〃	底部	Ⅰ～Ⅶ	N－25	Ⅶa	230	にぶい褐	にぶい褐	○			黄白砂・黒・茶粒	底部に縦位の短沈線
	76	〃	底部	Ⅰ～Ⅶ	N－24	Ⅶb	404	橙	にぶい橙	○	○		雲・黄色砂・茶粒	胴部に貝殻条痕文＋底部に縦位の短沈線
	77	〃	底部	Ⅰ～Ⅶ	N－24	Ⅶb	385	にぶい褐	にぶい褐	○			黒砂粒・茶粒	貝殻条痕文／ナデ

第９表　Ⅶ層出土土器観察表２

図No.	図面番号	器種	部位	類別	出土区	層	遺物番号	色調		胎土				文様・器面調整等
								外面	内面	石	長	カク	その他	
24	78	〃	口縁付近	Ⅲ?	N－24・25	Ⅶb	380・416	にぶい赤褐	灰褐色		○		金雲	横位と縦位の貝殻刺突文
	79	〃	口縁付近	Ⅲ?	N－24	Ⅶb	400	にぶい赤褐	褐灰	○			金雲多	縦位の貝殻刺突文
	80	〃	胴部	Ⅰ~Ⅶ	N－25	Ⅶa	426	にぶい褐	褐				金雲多・黄褐砂	貝殻条痕文
	81	〃	胴部	Ⅷ	N－27	Ⅶa	504	褐	灰褐	○	○		金雲多	条痕文
	82	〃	胴部	Ⅱ~Ⅶ	N－24	Ⅶa	65	にぶい赤褐	灰褐		○		金雲多・白砂	縦位の条痕文／ナデ
	83	〃	胴部	Ⅱ~Ⅷ	N－25	Ⅶa	189	にぶい褐	にぶい褐		○		金雲多・白砂	貝殻条痕文／ナデ
	84	〃	胴部	Ⅱ~Ⅷ	M－24	Ⅶb	1698	褐灰	黒褐		○		金雲多・黄白砂	貝殻条痕文／ナデ
	85	〃	胴部	Ⅷ	M－27	Ⅶb	1574	にぶい赤褐	黒褐	○		○	雲	貝殻条痕文／ナデ
25	86	〃	口縁～底部	Ⅸ	M－23	Ⅶb	[illegible]	にぶい褐	にぶい黄褐		○		金雲多	口縁部貝殻押圧＋貝殻刺突
	87	〃	口縁部	Ⅸ	N－24	Ⅶb	323	褐	黒褐		○		金雲多	縦位の貝殻刺突文
	88	〃	胴部	Ⅸ	N－27	Ⅶa	504	にぶい褐	にぶい褐	○		○	黄白砂	貝殻刺突文／ナデ
	89	〃	胴部	Ⅸ	M－29	Ⅶb	1500	にぶい褐	褐灰				金雲多・黄白砂	クシ状施文具
	90	〃	胴部	Ⅸ	N－22	Ⅶa	268	褐灰	黒褐	○			雲・黄白砂	貝殻背面
	91	〃	口縁～胴部	Ⅹ	4Ｔ	Ⅴ	150	にぶい褐	にぶい褐	○	○		金雲	口唇刻・口縁下沈線区画＋撚糸文
	92	〃	胴部	Ⅹ	M－23	Ⅶ	1798	にぶい褐	褐灰	○	○	○	金雲・黄白砂	横位沈線
	93	〃	口縁～胴部	ⅩⅠ	－	－	－	明黄褐	黄褐	○	○		金雲	貝殻条痕文

第10表　Ⅶ層出土石器観察表

図No.	遺物番号	遺物番号	器種	出土区	層	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
26	94	－	打製石鏃	M－34	Ⅵ	Ob	(25)	(15)	3	(1.4)
	95	－	磨製石器	M・N－25	Ⅵ	Sh	57	32	10	23.0
	96	1709	石匙	N－24	Ⅵ	An	(25)	90	7	(15.0)
27	97	1694	磨製石斧	M－24	Ⅵa	Sh	129	49	24	200.0
	98	1598	磨製石斧	M－26	Ⅵ	Sh	(130)	64	19	(280.0)
	99	1207	磨製石斧	2Ｔ	Ⅵ	Sh	(63)	49	19	61.0
	100	485	磨製石斧	N－24	Ⅶa	Sh	(69)	70	17	(100.0)
	101	1604	磨製石斧	M－26	Ⅵ	Sh	(68)	70	25	(110.0)
	102	1607	磨製石斧	M－26	Ⅵ	Sh	(111)	57	17	(100.0)
	103	1760	打製石斧	M－23	Ⅵb	Sh	138	60	23	250.0
	104	－	打製石斧	M－25	Ⅵ	Sh	(144)	68	11	(200.0)
	105	160	打製石斧	4Ｔ	Ⅵ	Sh	(117)	92	38	(500.0)
	106	469	打製石斧	N－25	Ⅶa	Sh	(78)	84	22	(190.0)
28	107	470	礫器	N－25	Ⅶa	Sh	111	68	13	350.0
	108	1452	礫器	N－39	Ⅶa	Sh	82	92	26	200.0
	109	109	礫器	N－24	Ⅶa	Sh	90	74	25	160.0
	110	324	礫器	N－24	Ⅶb	Sh	107	68	18	160.0
	111	1682	礫器	M－24	Ⅵa	Sh	124	77	30	380.0
	112	205	礫器	N－25	Ⅶa	Sh	110	68	25	250.0
	113	219	礫器	N－25	Ⅶa	Sh	93	94	16	150.0
	114	1552	礫器	M－27	Ⅵ	Sh	124	107	28	490.0
29	115	165	礫器	N－25	Ⅶa	Sh	83	63	23	140.0
	116	602	礫器	N－26	Ⅶb	Sh	117	94	28	350.0
	117	－	礫器	M－29	Ⅵ	Sa	123	80	18	250.0
	118	1603	礫器	M－26	Ⅵ	Sh	(96)	70	28	(180.0)
	119	1594	礫器	M－27	Ⅵ	Sh	114	73	17	280.0
	120	1649	礫器	M－25	Ⅵ	Sh	116	62	16	170.0
29	121	1736	磨石	M－23	Ⅵa	Sa	73	63	41	270.0
	122	610	磨石	N－26	Ⅵb	Sa	78	72	60	465.0
	123	228	磨石	N－25	Ⅶa	Pa	92	78	53	532.0
	124	－	敲石	N－26	Ⅶb	Pa	71	65	43	296.0
	125	339	敲石	N－24	Ⅶ	Pa	90	72	41	336.0
	126	1623	敲石	M－26	Ⅵa	Pg	109	88	50	669.0
	127	175	敲石	N－26	Ⅶa	Pa	79	82	44	391.0
	128	465	磨敲石	N－25	Ⅶa	Sa	72	67	44	291.0
30	129	－	磨敲石	N－26	Ⅶb	Sa	90	84	46	488.0
	130	1799	磨敲石	M－20	Ⅵa	Pa	62	64	36	173.0
31	131	－	磨敲石	M・N－25	Ⅵ	Pa	110	88	47	614.0
	132	1639	敲石	N－25	Ⅵ	Pa	124	92	64	941.0
32	133	1533	石皿	M－27	Ⅵ	Pa	(298)	206	55	3600.0
	134	1593	石皿	M－29	Ⅵ	Pa	(368)	198	50	3700.0
	135	－	石皿	M・N－25	Ⅵ	Pa	234	(133)	51	2500.0
	136	1758	石皿	M－23	Ⅵa	Sa	(120)	(149)	34	955.0

第2節　Ⅳa層の調査（縄文時代中期～晩期）

暗黄褐色土層のⅣa層から出土した遺物は，縄文時代中期から古墳時代にかけての土器，あるいはこれらの土器に共伴すると思われる石器などである。時代や時期の異なる遺物が同一層から出土しているため，第2節に縄文時代中期から晩期の土器およびⅣa層出土の石器，第3節に古墳時代の遺物という形で記載を分けている。なお，縄文時代晩期の遺構としてⅣb層上面で土坑を3基検出した。

1　検出遺構

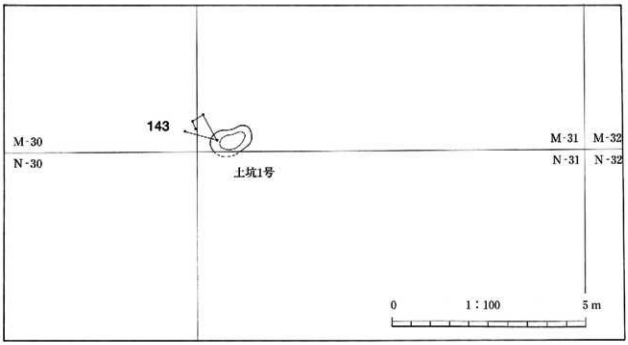
（1）土坑1号（第33図・第34図）

M－28区のⅣb層上面で検出したものである。長径1.12m，検出面からの深さは14cmである。土坑の検出面およびその周辺から組織痕土器，埋土内から打製石鏃が6点出土している。

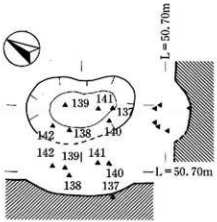
143は胴部下半から底部にかけて蓆目の圧痕が施された組織痕土器である。口径40.8cm，器高15.3ｃｍを測る。内面は丁寧に研磨されており，ススや炭化物の付着は認められない。137～142は打製石鏃である。二等辺三角形を呈し基部に浅い抉りのある凹基鏃である。137･141～142は安山岩（サヌカイト），138・139は頁岩，140はチャート製である。

（2）土坑2・3号（第37図）

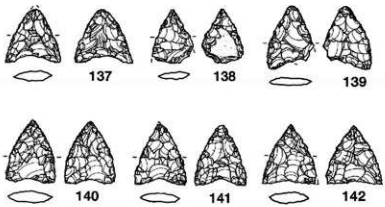
2号はM－31区のⅣb層上面で検出したもので，長径2.76m，短径1.82m，検出面からの深さは42cmを測る。3号はM－27区のⅣb層上面で検出したものである。長径3.16m，短径1.96m，検出面からの深さは40cmを測る。いずれの土坑も遺物の出土は認められなかった。



第33図　Ⅳb層上面検出土坑位置図

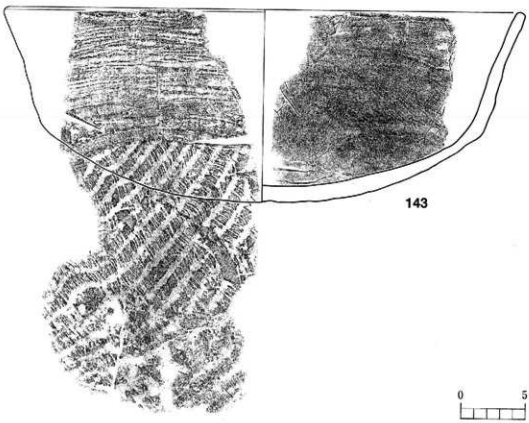


第34図　土坑１号



第35図　土坑１号出土遺物

0　2.5cm
3：4

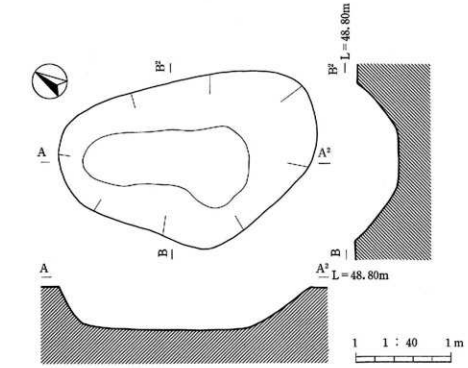


0　5cm
1：3

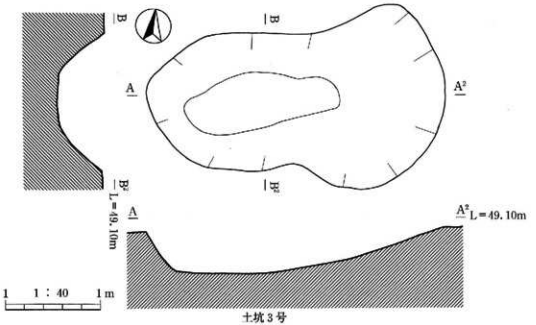
第36図　組織痕土器

第11表　遺構観察表（土坑）

挿図番号	遺構名	検出区	検出面	時　期	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	共伴遺物
34	土坑１号	M－31	Ⅳb層上面	縄文晩期	1.10	0.6	0.18	打製石鏃６点
37	土坑２号	M－28	Ⅳb層上面	縄文晩期	3.15	1.4	0.49	－
	土坑３号	M－27	Ⅳb層上面	縄文晩期	2.75	1.8	0.50	－



土坑2号



土坑3号

第37図　土坑2・3号

第12表　土坑1号出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号	遺物名	検出区	遺構	時期	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)
35	137	打製石鏃	M－28	土坑1号	縄文晩期	1.10	0.6	0.18
	138	打製石鏃	M－28	土坑1号	縄文晩期	3.15	1.4	0.49
	139	打製石鏃	M－28	土坑1号	縄文晩期	2.75	1.8	0.50
	140	打製石鏃	M－28	土坑1号	縄文晩期	1.10	0.6	0.18
	141	打製石鏃	M－28	土坑1号	縄文晩期	3.15	1.4	0.49
	142	打製石鏃	M－28	土坑1号	縄文晩期	2.75	1.8	0.50

2　出土遺物

（1）土器

①縄文時代中期土器（第38図 144～146）

144～146は縄文時代中期の土器と思われる。

144は口縁部片で口縁端は丸くなる。断面カマボコ状の突帯が3条貼り付けられる。突帯状にはヘラ状工具による刻み目が連続して施される。内面に条痕がみられる。

145は口縁付近の破片である。刻み目のある一条の突帯と円形の突帯文が貼り付けられる。

146は胴部片である。貝殻による連点が施される。

②縄文時代後期～晩期土器（第38図 147～151）

147は底部である。縄文時代後期の土器と思われる。底部立ち上がり付近に条痕，底面に網代圧痕がみられる。148は波状を呈し，肥厚する口縁部片である。内外面ともヘラミガキが施され光沢がある。149は深鉢形土器である。復元口径21cm，器高14.7cmを測る。底部は平底で胴部は直線的に立ち上がり，胴部でわずかに屈曲して口縁部に至る。口唇端は平坦となり外傾する。胴部の屈曲部には微隆の突帯が1条めぐる。

150は口縁部が波状を呈する鉢形土器で，口縁部に半円形のくぼみがみられる。意図的に施されたと思われるが不明瞭である。器面調整は外面ヘラミガキ，内面ナデが施される。

151は口縁付近から胴部にかけての破片である。胴部で屈曲し，内湾する頸部を介して口縁部に至る。口縁にはやや太めの凹線がみられる。調整は外面が条痕とナデ，内面に条痕が施される。

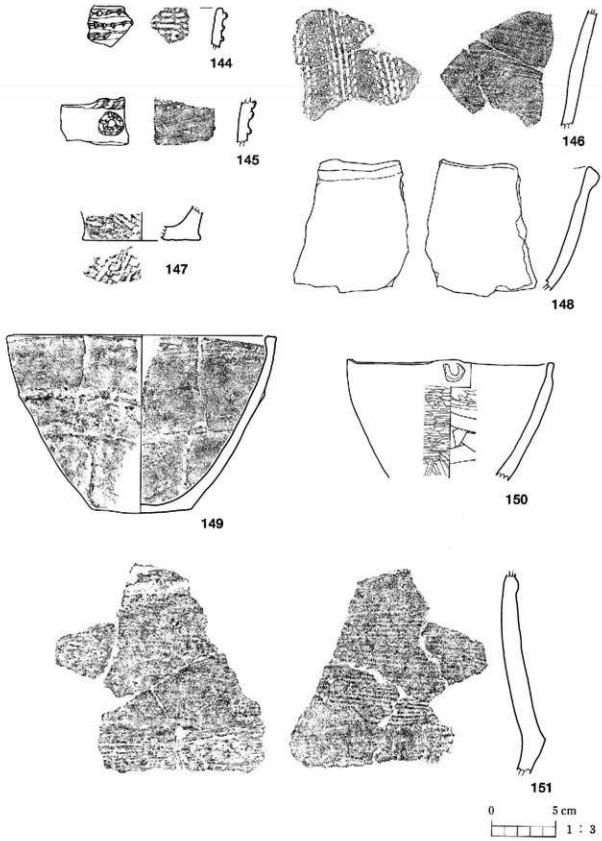
③粗製深鉢・浅鉢形土器（第39図 152～158・第40図 159～166）

152・153は胴部で屈曲して立ち上がり口縁部付近がやや直立する器形で，器面調整は内外面とも条痕が施される。156は口縁部が外傾しながら立ち上がるもので内外面とも明瞭な貝殻条痕がみられる。調整は外面が貝殻条痕，内面が条痕後ナデである。157は口縁部に接して突帯がめぐるもので口縁部下には円形の補修孔が穿たれている。調整は突帯直下から胴部途中までと一定の間隔をおいた胴部下位に条痕文が施される。施文具を強く押し当てたためか段が形成されている。160は外反する口縁部で外面には斜位、内面には横位の条痕が施される。161はやや肥厚する口縁部である。調整は外面が条痕，内面は条痕後ナデである。163は粗製の浅鉢としたものである。底部を欠損しており内面には横方向の調整痕が残るが，平滑に仕上げられていることから組織痕土器の可能性がある。

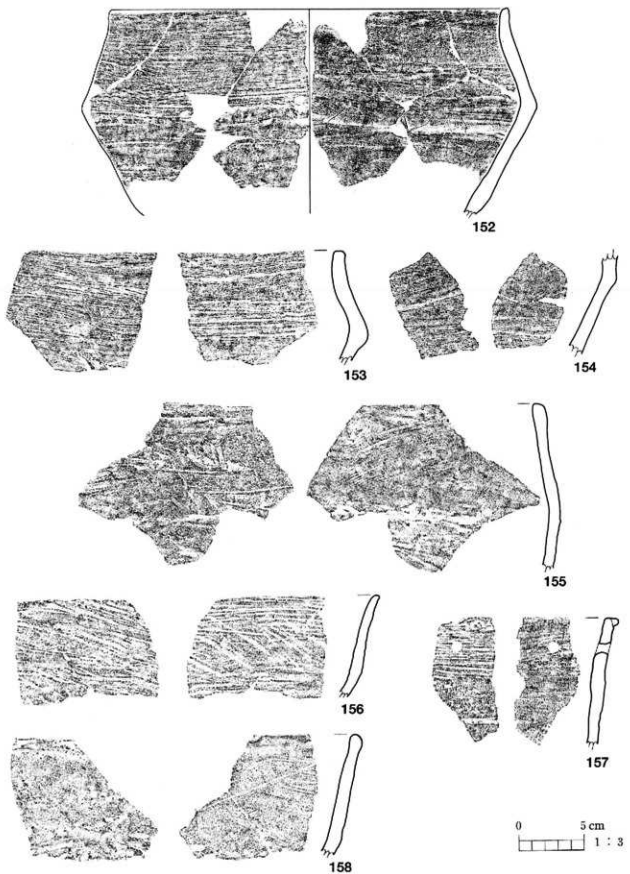
165・166は口縁部直下にやや太めの沈線が1条めぐり，沈線下がやや肥厚するものである。いずれも口縁部内面にも沈線がめぐる。

④孔列文土器（第40図 167）

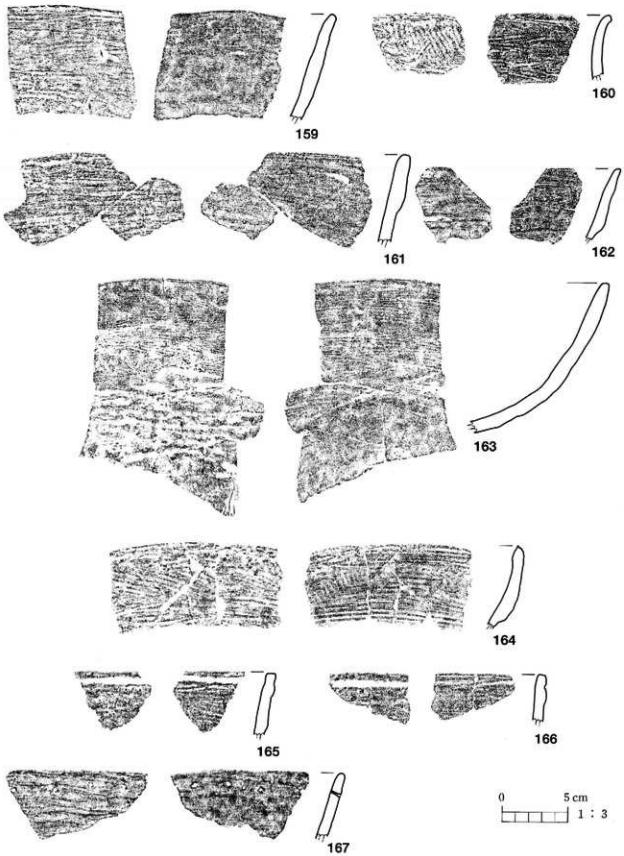
167は孔列文土器である。穿孔された孔の径は外面側が大きく，内面側が小さい。器面調整は内外面ともヘラミガキが施される。



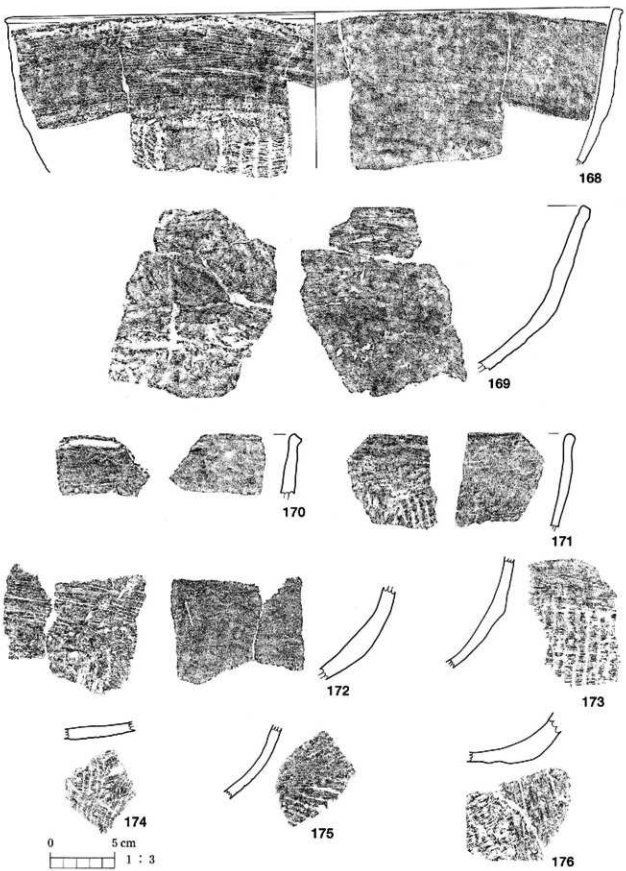
第38図　Ⅳ層出土土器1



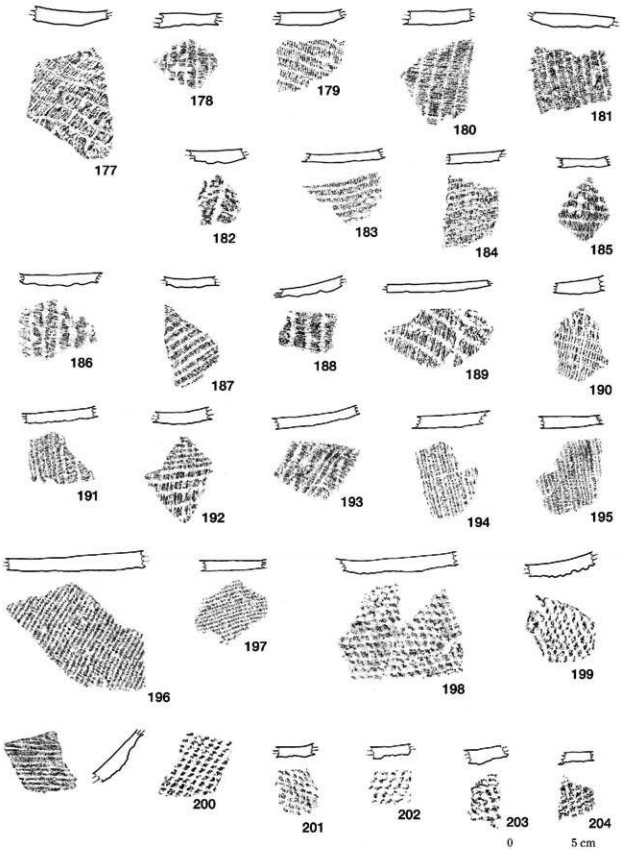
第39図　Ⅳ層出土土器 2



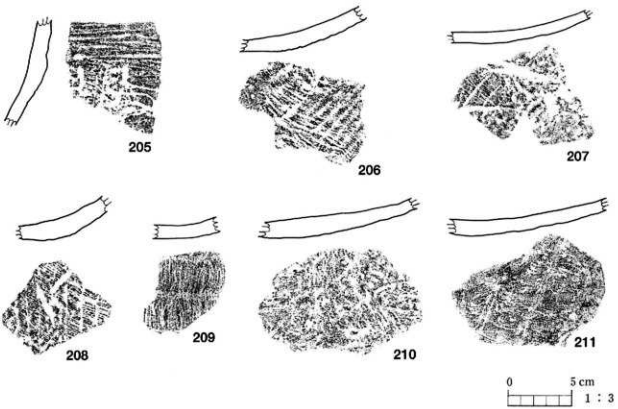
第40図　Ⅳ層出土土器3



第41図　Ⅳ層出土土器 4



第42図　Ⅳ層出土土器5



第43図　Ⅳ層出土土器6

⑤組織痕土器（第41図～43図 168～211）

168～211は組織痕を有する土器群である。組織痕は胴部下半から底部にかけて網目痕・席目痕・編布痕などが認められるものである。

外面は貝殻や木口状の工具によって調整されるが，内面はこれらの工具によって調整が行われた後，研磨が行われている。工具痕が残らないほど内面の研磨が丁寧に行われているものと，工具痕が明瞭に残るものがある。底部の破片については粘土積みよって製作されて土器のように接合面で割れた破片が少ないためか全体の器形を把握できる資料が少ない。底部形状は丸底か丸底に近い平底になるもので，胴部上半に対して底部の器壁は薄手である。また，底部の接地面付近の組織痕は摩滅により観察が困難なものが認められた。

本遺跡から出土した組織痕土器の破片についてはモデリング作業を行い，縦糸の間隔や1cm当たりの横糸の本数，糸の撚りの方向などの観察を行った。摩滅などによりすべてに破片について把握できていないが，縦糸の間隔は狭いものが2mm，広いもので29mm，その他はほとんどが8～12mm前後のものである。1cm当たりの横糸の本数は密なもので3本，疎なもので11本と幅広いが，6～8本のものが最も多い。糸の撚りの方向は「Zより」・「Sより」ともほぼ同じ割合であった。

⑥突帯文土器・精製浅鉢・その他の土器（第44図 212～224）

212～217は口縁部に刻み目のない突帯がめぐるものである。213は胴部で屈曲し直立気味に立ち上がる器形で口唇部は丸くおさまる。口縁部には断面台形状の突帯が貼り付けられる。215は口縁部直下に断面三角形状の突帯が貼り付けられるもので胴部で屈曲する器形と思われる。216は幅広の薄い粘土が貼り付けられるもので器面調整は外面が条痕後ナデ，内面はヘラミガキが施される。217は213と同様な突帯が貼り付けられるが器面調整は丁寧なナデである。

218～222は刻目突帯文の施されるものである。218は浅鉢形を呈するもので口縁部に指頭状の刻み目のある突帯が貼り付けられる。219は胴部で屈曲し，やや内傾して立ち上がる器形で，深形土器と思われる。口縁部と胴部に棒状による刻み目の施された突帯がめぐる。口縁部の突帯は口唇部と接している。220は突帯上に棒状工具によって刻み目が施される。221は口縁部と一体化した突帯がめぐり，指頭によって円形を呈する刻み目が施される。突帯下位には補修孔がみられる。222は胴部で屈曲し，口縁部が強く内傾して立ち上がる器形で口縁端部は直立気味に丸くおさまる。口縁部に突帯を持たず，指頭痕が認められる。器壁は薄手である。223は外反する口縁部で口唇端部は平坦となり外傾する。口縁部と胴部の屈曲部に沈線が施され，補修孔がある。224は浅鉢形土器と思われる。胴部と頸部で屈曲する器形で調整は内外面ともにヘラミガキである。

225～227は底部である。いずれも上げ底状を呈する。225の器面調整は内外面ともに貝殻条痕後ナデている。226も225と同様であるが丁寧なナデである。227はのヘラ状の工具によるナデが行われている。

228～237，239～240は精製の浅鉢形土器，238は高台のつく椀形土器である。228は口縁部が短く外反し胴部で屈曲して底部へと向かう器形で口縁部は平坦となる。頸部から胴部上半が文様帯となり，口縁部の屈曲部に１条，胴部上半に浮線文状の波状文が上下２方向に施され，文様帯中央に楕円形文がつく。器面調整はヘラミガキである。229は口縁部で２条の沈線が施される口縁部に小さい補修孔がある。230は精製浅鉢である。欠損部分の文様は不明であるが頸部付近から胴部上半にかけて工字文条の沈線，胴部屈曲部に沈線が施される。器面調整は丁寧なヘラミガキである。

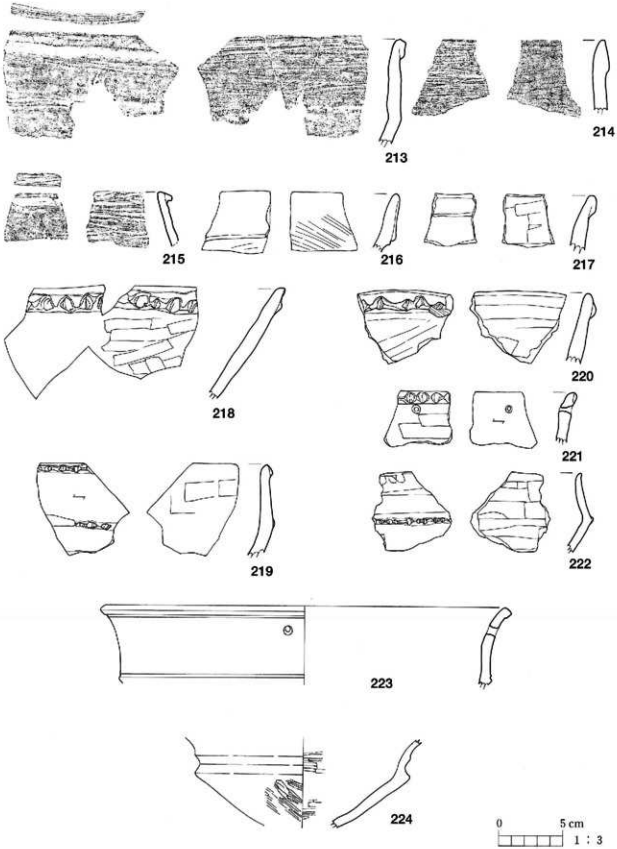
231・232は胴部で屈曲し内傾しながら口縁部に向け外反気味に立ち上がる器形で口唇部は丸くおさまる。器面調整はヘラミガキである。233は胴部片で調整はヘラミガキである。

235は波状口縁を呈すると想われる。口縁部がやや肥厚し口縁部内面には沈線が施される。調整はヘラミガキである。

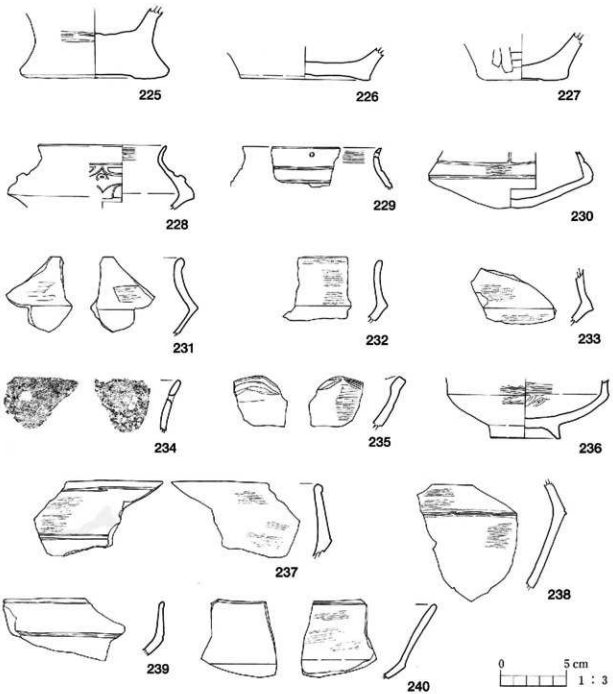
236は椀形を呈する土器で胴部下半で屈曲し直立する器形と思われる。高台状の底部を有する。調整はヘラミガキである。

237は胴部で屈曲し，口縁部は直立する器形で，口唇端部は丸くおさまる。口縁部と胴部屈曲部に１条ずつヘラ状工具による沈線が施される。外面はヘラミガキが施され黒色を呈する。いわゆる黒色研磨土器である。外面の胴部屈曲部から口縁部にかけては赤色顔料が波状に塗布される。238と同一個体の可能性が高い。

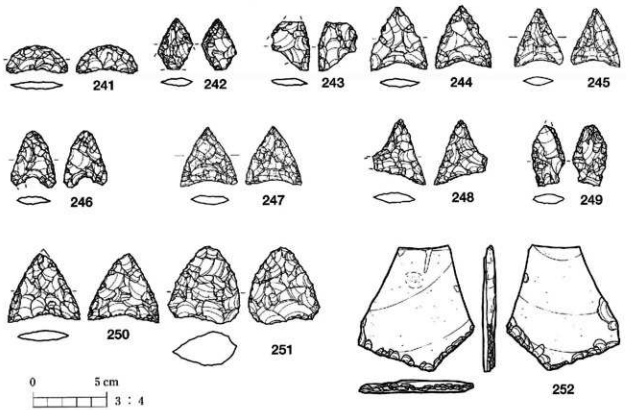
240は胴部で屈曲し口縁部が外反する器形である。口縁部内面に沈線が１条施される。調整はヘラミガキであるが表面はやや粗いつくりである。



第44図　Ⅳ層出土土器 7



第45図　Ⅳ層出土土器 8



第46図　Ⅳ層出土石器1

（2）石　器

Ⅳa層から出土した石器は，打製石鏃・スクレイパー・磨製石斧・小型磨製石斧・打製石斧などである。縄文時代晩期～古墳時代の土器を主体に包含する層からの出土である。ここでは，石器の帰属する時期を明確に区分できないため，一括して掲載した。

①打製石鏃・未製品（第46図　241～251）

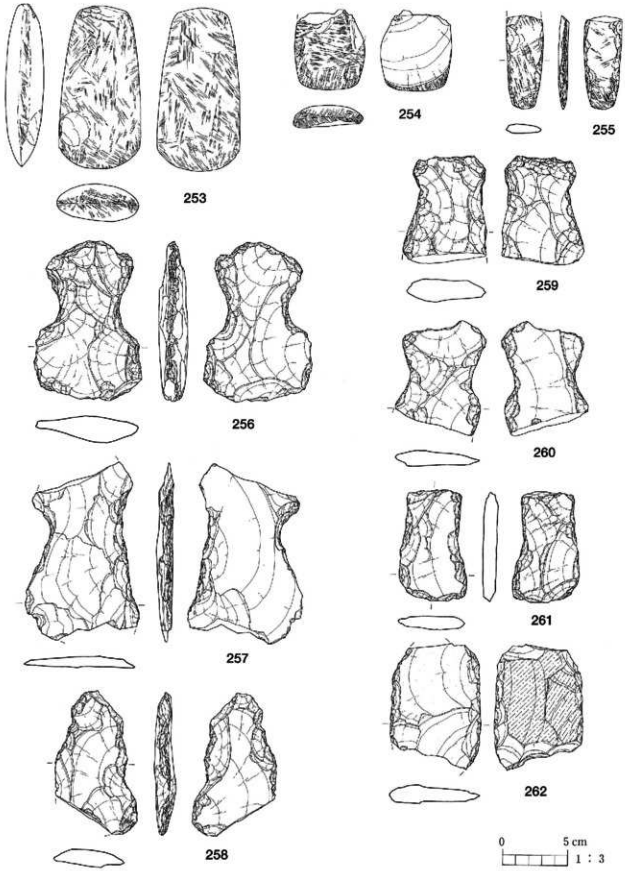
打製石鏃は，11点を図化した。石材は241・243～248・250が安山岩（サヌカイト），242・249が黒曜石を利用している。241は三日月形を呈する特殊なものであるが打製石鏃として分類した。246は抉りが深く，基部が丸みを帯びる円脚鏃である。242～245・247～250については基本的に二等辺三角形を呈し，基部にごく浅い抉りをもつ凹基無茎鏃である。243・249は先端部と脚部，244は脚部を欠損している。251は素材の厚みを残すことから打製石鏃の未製品と思われる。

②スクレイパー（第46図　252）

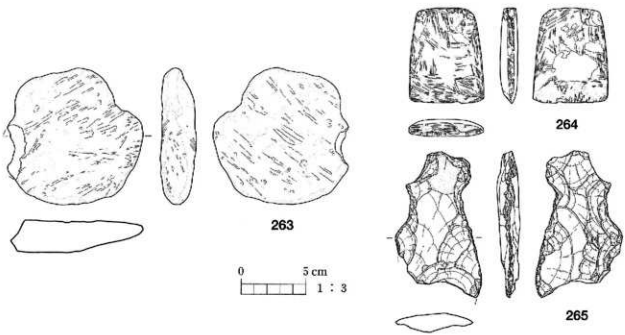
252は玉髄製のスクレイパーで，縦長剥片を素材とする，刃部は幅広のV字形を呈し，両面からの剥離によって作り出されている。

③磨製石斧（第47図　253～254）

磨製石斧は，2点を図化した。いずれも頁岩を利用している。253は完形品で，いわゆる定角式石斧である。刃部は両刃で蛤刃状を呈する。表面に整形剥離痕が一部残存しているが全体的に入念に研磨されており，表面と側面の境には稜を形成する。254は磨製石斧の刃部片で，蛤刃を呈する。側



第47図　Ⅳ層出土石器 2



第48図　Ⅳ層出土石器３ほか

面の一部に剥離痕が残存し253と同様，全体が入念に研磨されている。基部を欠損する。

④小型磨製石斧（第477図　255）

255は頁岩を利用したもので，小型磨製石斧として分類した。基部が欠損しており，表裏面とも両側縁からの整形剥離痕が残存する。

⑤打製石斧（第47図　256～262）

256～262は打製石斧で，土掘り具としての用途が考えられるものである。いずれも頁岩製である。256は分銅形，261・262は短冊形，257～260が撥形を呈する。

257・258・260・261は幅広の剥片を素材とし，主要剥離面が残存している。器厚は比較的薄手である。257～260・261は刃部を欠損している。

⑥軽石製品（第48図　264）

264は軽石製品として分類した。明瞭な加工痕は認められないものの，表裏面にわずかながら擦痕が認められる。

⑦その他（第48図　265～266）

出土層が不明の石器を一括して掲載した。265は蛇紋岩製の磨製石斧である。最大長7.5ｃｍである。表裏面と側面の境に明瞭な稜を形成する。刃部は両刃で直刃となり，使用痕が観察できる。全体的に入念な研磨が行われているが，一部に整形剥離痕が残る。

266は頁岩製の打製石斧で撥形を呈する。刃部と基部の一部を欠損する。

第13表　Ⅳ層出土土器観察表1

図No	図面番号	器種	部位	出土区	層	遺物番号	色調 外面	色調 内面	焼成	文様・器面調整等
38	144	深鉢	口縁部	D－14・15	Ⅳa	－	褐	明灰黄	良好	刻み目のある突帯
	145	深鉢	口縁部付近	D－14・15	Ⅳa	－	にぶい黄褐	暗灰黄	良好	刻み目のある突帯
	146	深鉢	胴部	D－14・15	Ⅳa	－	褐	褐	良好	斜走
	147	深鉢	底部	M－37	Ⅲa	1125	明赤褐	明赤褐	良好	貝殻条痕文・網代底
	148	深鉢	口縁～胴部	N－40	Ⅲa	942	褐	褐	良好	ヘラミガキ
	149	精製深鉢	口縁～底部	N－39	Ⅲ	1442	褐灰	黒褐	良好	ナデ
	150	精製深鉢	口縁～胴部	－	－	－	褐	にぶい褐	良好	ヘラミガキ・ナデ
	151	粗製深鉢	口縁～胴部	M－39	Ⅲa	829・830・854・886	明赤褐	にぶい褐	普通	貝殻条痕文
39	152	粗製深鉢	口縁～胴部	N－39・40	Ⅲa	366・368・383・386・393・1213	浅黄	浅黄	良好	貝殻条痕文
	153	粗製深鉢	口縁～胴部	N－40	Ⅲa	1214	黄灰	にぶい黄	良好	貝殻条痕文
	154	粗製深鉢	胴部	N－38	Ⅲa	236	にぶい黄橙	浅黄	良好	貝殻条痕文
	155	粗製深鉢	口縁～胴部	N－39	Ⅲa	1460	褐灰	にぶい黄橙	普通	貝殻条痕文
	156	粗製深鉢	口縁～胴部	M－41	Ⅲa	665・1040・1041	黒褐	黄褐	良好	貝殻条痕文
	157	粗製深鉢	口縁～胴部	N－40	Ⅲa	903	黒	褐	良好	貝殻条痕文・補修孔
	158	粗製深鉢	口縁～胴部	M－41	Ⅲa	669・1029	黄褐	にぶい黄橙	普通	貝殻条痕文
40	159	粗製深鉢	口縁～胴部	N－40	Ⅲa	924	黒	灰黄褐	良好	貝殻条痕文
	160	粗製深鉢	口縁部	1T	カクラン	－	にぶい黄褐	灰黄褐	良好	貝殻条痕文
	161	粗製深鉢	口縁部	M－41	Ⅲa	668・1003	にぶい褐	にぶい橙	普通	貝殻条痕文
	162	粗製深鉢	口縁部	M－40	Ⅲa	705	灰黄褐	黒褐	良好	貝殻条痕文
	163	粗製深鉢	口縁～胴部	N－40	Ⅲa	380・1228・1229・1231・1232	浅黄橙	浅黄	良好	貝殻条痕文
	164	粗製浅鉢	口縁部	M－30・31	Ⅲa	1167・1168	黒褐	黒褐	良好	貝殻条痕文
	165	粗製浅鉢	口縁部	N－39	Ⅲa	1392	黒	明褐	良好	貝殻条痕文
	166	粗製浅鉢	口縁部	M－39	Ⅲa	862	オリーブ黒	にぶい黄褐	良好	貝殻条痕文
	167	孔列文土器	口縁部	－	－	－	黒	灰黄褐	普通	貝殻条痕文
41	168	組織痕土器	口縁～胴部	N－39・41	Ⅲa	1004・1454	浅黄	褐灰	良好	貝殻条痕文
	169	組織痕土器	口縁～胴部	N－39	Ⅲa	222・223・224・272	黒褐	黒褐	良好	貝殻条痕文
	170	組織痕土器	口縁部	－	－	－	暗灰黄	暗灰黄	良好	貝殻条痕文
	171	組織痕土器	口縁～胴部	M－41	Ⅲa	1018	黒褐	暗褐	良好	貝殻条痕文
	172	組織痕土器	胴部	M－40・41	Ⅲa	692・1059	灰褐	にぶい赤褐	普通	貝殻条痕文
	173	組織痕土器	胴部	M－35	Ⅲa	1022	オリーブ褐	にぶい褐	良好	貝殻条痕文
	174	組織痕土器	底部	－	－	－	にぶい黄褐	暗灰黄	良好	－
	175	組織痕土器	胴部	M－35	Ⅲa	1121	にぶい黄橙	暗灰黄	普通	－
	176	組織痕土器	底部	M－31	Ⅲ	－	にぶい褐	にぶい黄褐	普通	－
	177	組織痕土器	底部	M－40	Ⅲa	706	にぶい黄橙	黒褐	良好	－
	178	組織痕土器	底部	K	Ⅲa	236	にぶい褐	暗灰黄	普通	－
	179	組織痕土器	底部	－拡	－	－	にぶい黄橙	明褐	良好	－
	180	組織痕土器	底部	M－41	Ⅲa	654	にぶい黄橙	黄褐	良好	－
	181	組織痕土器	底部	M－34	Ⅲa	968	橙	明黄褐	良好	－
	182	組織痕土器	底部	N－34・35	－	－	にぶい黄褐	黒褐	良好	－
	183	組織痕土器	底部	M－39	Ⅲa	1070	にぶい褐	暗灰黄	良好	－
	184	組織痕土器	底部	M－35	Ⅲa	104	橙	にぶい黄	普通	－
	185	組織痕土器	底部	M－37	Ⅲa	184	にぶい黄橙	オリーブ褐	普通	－
	186	組織痕土器	底部	－	－	－	にぶい橙	黒	普通	－
	187	組織痕土器	底部	M－40	Ⅲa	540	黄褐	黒	良好	－
	188	組織痕土器	底部	－	－	－	橙	灰オリーブ	良好	－
42	189	組織痕土器	底部	M－30・31	Ⅳ	560・562	橙	暗灰黄	普通	－
	190	組織痕土器	底部	M－39	Ⅲa	1182	暗オリーブ褐	オリーブ黒	普通	－
	191	組織痕土器	底部	N－39	Ⅲa	436	橙	にぶい黄	普通	－
	192	組織痕土器	底部	6T	Ⅵ	1224	にぶい黄褐	にぶい褐	普通	－
	193	組織痕土器	底部	M－33	Ⅲa	1092	橙	暗灰黄	普通	－
	194	組織痕土器	底部	－	－	－	にぶい黄	にぶい黄	良好	－
	195	組織痕土器	底部	N－40	Ⅲa	1215	にぶい橙	暗灰黄	普通	－
	196	組織痕土器	底部	－拡	－	－	にぶい黄橙	浅黄	良好	－
	197	組織痕土器	底部	M－39	Ⅱ	－	にぶい黄橙	オリーブ黒	良好	－
	198	組織痕土器	底部	I	I	1157	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	網目痕
	199	組織痕土器	底部	M－30	Ⅲa	1165	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	網目痕
	200	組織痕土器	底部	M－30	Ⅲa	1168	にぶい黄橙	黒	普通	網目痕
	201	組織痕土器	底部	M－30	Ⅲa	1160	明褐	明褐	普通	網目痕
	202	組織痕土器	底部	M－31	Ⅲa	1161	オリーブ褐	にぶい黄橙	普通	網目痕
	203	組織痕土器	底部	M－31	I	－	にぶい黄褐	にぶい黄橙	普通	網目痕
	204	組織痕土器	底部	N－33	Ⅲa	880	にぶい褐	黒褐	普通	網目痕

第14表　Ⅳ層出土土器観察表２

図No.	図面番号	器種	部位	出土区	層	遺物番号	色調 外面	色調 内面	焼成	文様・器面調整等
43	205	組織痕土器	胴部	M－34	Ⅲ	－	オリーブ黒	にぶい黄橙	良好	
	206	組織痕土器	底部	M－30・39	Ⅲ	840・44・2	黒褐色	にぶい赤褐	良好	
	207	組織痕土器	底部	N－39	Ⅲ	452・1202	にぶい黄橙	オリーブ黒	良好	葉脈痕
	208	組織痕土器	底部	N－31～38	カクラン	－	にぶい黄橙	黒褐	良好	
	209	組織痕土器	底部	M－34	Ⅲ	311	にぶい黄橙	黄褐	普通	
	210	組織痕土器	底部	M－39	Ⅲa	321	にぶい黄褐	オリーブ褐	普通	
	211	組織痕土器	底部	M－34	Ⅲa	932	にぶい黄橙	暗灰黄	普通	
44	213	粗製深鉢	口縁～胴部	N－40	Ⅲa	795・953	にぶい黄橙	灰黄	普通	貝殻条痕文
	214	粗製深鉢	口縁部	N－39	Ⅲa	770	オリーブ黒	にぶい黄橙	普通	貝殻条痕文
	215	粗製深鉢	口縁部	N－14	－	－	赤褐	橙	良好	貝殻条痕文
	216	粗製深鉢	口縁部	N－40	－	1221	灰	灰	良好	貝殻条痕文＋ナデ
	217	粗製深鉢	口縁部	M－34・35	Ⅲ	－	褐灰	灰黄褐	普通	ナデ
	218	浅鉢?	口縁部	M－35	カクラン	－	にぶい褐	にぶい褐	普通	刻目突帯・ナデ
	219	浅鉢?	口縁～胴部	M－36	－	1049	黄灰	浅黄	普通	刻目突帯・ナデ
	220	深鉢	口縁部	M－35	カクラン	－	にぶい橙	にぶい橙	普通	刻目突帯・ナデ
	221	浅鉢?	口縁部	M－34	－	997	黄灰	にぶい黄橙	普通	刻目突帯・補修孔
	222	浅鉢	口縁～胴部	N－34・35	カクラン	－	暗赤褐	にぶい赤褐	良好	刻目突帯・ナデ
	223	深鉢	口縁～胴部	M－41	Ⅲa	591・1045	褐	暗灰黄	良好	沈線・ヘラミガキ・補修孔
	224	浅鉢	口縁付近～底部	N－40	Ⅵ?	1419	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	ヘラミガキ
45	225	深鉢	底部	N－38	－	1447	浅黄橙	黄灰	普通	貝殻条痕後ナデ
	226	深鉢	底部	M－33		1090	にぶい橙	浅黄	普通	
	227	深鉢	底部	M－39	－	727	灰黄褐	浅黄橙	やや良	ナデ
	228	浅鉢	口縁～胴部	N－39	－	668	橙	暗灰黄	やや良	ヘラミガキ
	229	浅鉢	口縁部	－	－	－	橙	橙	普通	沈線・補修孔
	230	浅鉢	胴部～底部	－	－	－	浅黄	灰黄	普通	沈線・ヘラミガキ
	231	浅鉢	口縁～胴部	N－38	Ⅲa	238	橙	にぶい橙	良好	ヘラミガキ・ナデ
	232	浅鉢	口縁部	M－34		934	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	ナデ
	233	浅鉢	胴部	－	－	－	赤	にぶい黄橙	やや良	ヘラミガキ
	234	浅鉢	口縁部	M－34・35	Ⅲ	－	褐	にぶい橙	普通	ナデ
	235	浅鉢	口縁部	－	－	－	褐	褐	良好	ヘラミガキ
	236	鉢形土器	口縁付近～底部	N－39	－	1447	にぶい黄	黒褐	やや良	ヘラミガキ
	237	浅鉢	口縁～胴部	N－40	－	349・353・370	黒褐	灰黄褐	普通	沈線・ヘラミガキ・赤色顔料
	238	浅鉢	胴部	N－40	－	370	黒褐	黒褐	普通	沈線・ヘラミガキ・赤色顔料
	239	浅鉢	口縁部	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	沈線・ナデ
	240	精製浅鉢	口縁～胴部	M－41	Ⅲa	1032	黒	黄褐	普通	ヘラミガキ

第15表　Ⅳ層出土石器（縄文晩期～古墳）観察表

図No.	遺物番号	注記番号	器種	出土区	層	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)
46	241	519	打製石鏃	N－39	Ⅲ	An	10	21	2	0.5
	242	－	打製石鏃	O－14・15	Ⅳa	Ob	18	(13)	3	(0.5)
	243	845	打製石鏃	M－39	Ⅲa	An	(17)	(13)	3	(0.6)
	244	719	打製石鏃	M－38	Ⅲ	An	22	19	3	1.0
	245	1242	打製石鏃	K－39	Ⅲ	An	21	18	3	0.8
	246	1298	打製石鏃	N－38	Ⅲ	An	(20)	15	3	(0.6)
	247	986	打製石鏃	M－41	Ⅲa	An	21	19	3	1.0
	248	－	打製石鏃	O－14・15	Ⅳa	An	23	(18)	4	(0.8)
	249	－	打製石鏃	O－14・15	Ⅳa	Ob	(22)	12	4	(1.0)
	250	566A	打製石鏃	M－31	Ⅳ	An	(24)	25	4	(1.7)
	251	444	打製石鏃未製品	N－40	Ⅳ	Ch	27	25	11	3.2
	252	947	スクレイパー	M－34	Ⅲ	Cc	40	44	4	5.1
47	253	957	磨製石斧	N－40	Ⅲa	Sa	128	63	30	350.0
	254	952	磨製石斧	M－34	Ⅲ	Sh	(64)	64	19	(80.0)
	255	1397	磨製石斧	M－27	Ⅲ	Sh	(73)	(29)	7	(20.0)
	256	304	打製石斧	M－39	Ⅲa	Sh	124	81	21	220.0
	257	26	打製石斧	5 T	Ⅲ	Sh	(131)	86	12	(140.0)
	258	232	打製石斧	N－39	Ⅲa	Sh	102	60	13	100.0
	259	661	打製石斧	M－41	Ⅲa	Sh	85	64	18	130.0
	260	921	打製石斧	N－40	Ⅲa	Sh	112	111	30	80.0
	261	1190	打製石斧	M－40	Ⅲa	Sh	88	52	10	70.0
	262	－	打製石斧	M－34	Ⅲ	Sh	(96)	69	15	(140.0)
48	263	135	軽石製品	5 BT	Ⅲb	軽石	108	105	25	160.0
	264	－	磨製石斧	N－35・36	撹乱	Ja	75	58	14	120.0
	265	1448	打製石斧	N－27	Ⅲ	Sh	103	60	14	120.0

第3節　Ⅳa層の調査（古墳時代）

本遺跡では，第Ⅲ章の第3節でもふれたように，調査区内において地層の堆積や残存状況に違いがみられることから古墳時代の遺構はⅣ層からⅥ層上面にかけて検出されている。

1　検出遺構

古墳時代の遺構は，竪穴住居跡22軒，溝状遺構4条などを確認した。なお，竪穴住居跡については調査時に遺構認定を実施し，15号を除外しているため，本節では1～14号，16～23号について記載している。

本遺跡で検出した住居跡の特徴は，基本的に平面形は方形を呈し，竪穴の中央に炉跡と思われる焼土域や掘り込みを伴う焼土域があること，主に竪穴の南壁面に接した円形や楕円形を呈する土坑を伴うこと，あるいは竪穴の周囲や竪穴と切り合うように柱穴を伴うことなどが挙げられる。

遺構内から出土した遺物は，甕形土器・壺形土器・高坏形土器・坏形土器・鉢形土器・甑形土器・手づくね土器などの土器，坏・坏蓋・提瓶・平瓶などの須恵器，打製石斧・磨石・敲石・石皿（台石）・砥石・礫器などの石器，鉄剣。鉄鏃・鉄製鎌・刀子・鉄製鈴の鉄製品などがある。

（1）竪穴住居跡

①竪穴住居跡1号（第50図～第54図）

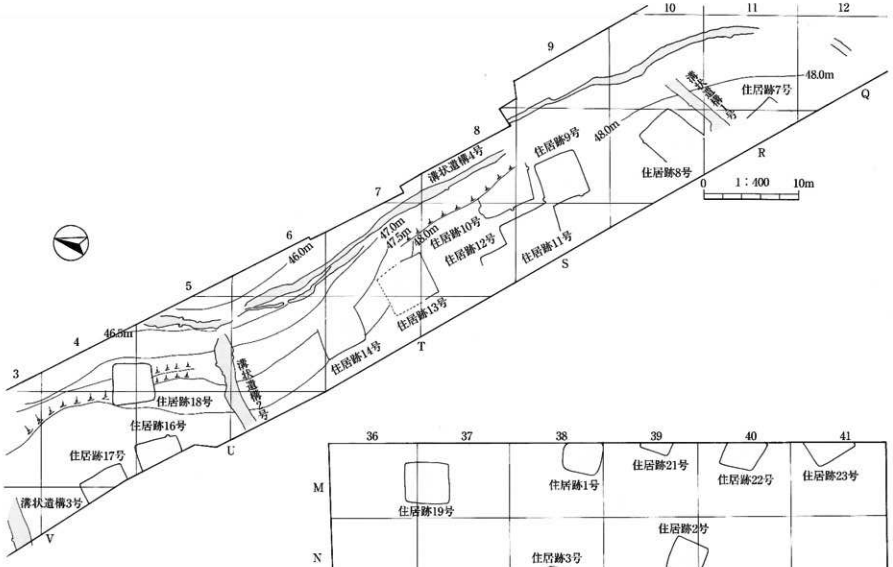
1号は，M－38区で検出したもので，平面形は4ｍ×3.6ｍの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは25ｃｍを測る。竪穴の中央部には52cm×42cmの楕円形の掘り込みと不整形な焼土域，南壁面に接して60cm×44cmのごく浅い土坑を伴う。明確な柱穴は検出されていない。

遺物は中央の焼土域と南側の土坑内にわずかに集中して出土している。床付近から出土したものを中心に6点を図化した。266はくの字状に外反する甕形土器の口縁部である。器面調整は外面がヘラケズリとナデ，内面はハケとナデである。267は内湾するタイプの甕形土器で棒状工具による刻み目のついた突帯をもつ。器面調整は外面がヘラケズリ後ナデ，口縁部内面はナデである。268は壺形土器である。頸部付近から口縁部までを欠き，底部は丸底となる。269は高坏形土器の脚部である。いわゆるエンタシス状で充実する。調整はヘラミガキである。271は手づくね土器である。

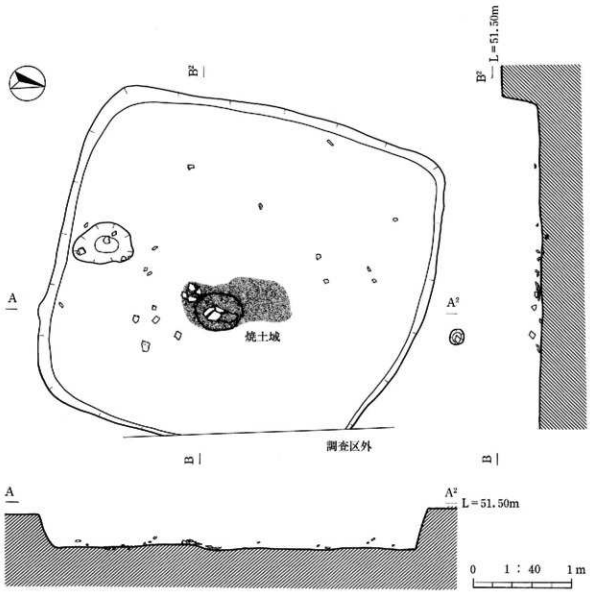
②竪穴住居跡2号（第55～第58図）

2号は，N－39～40区のⅣ層面で検出したもので，平面形は3.9ｍ×3.8ｍの隅丸方形を呈し，西側がやや張り出す形状である。検出面からの深さは41cmを測る。竪穴内には中央に焼土域と主柱柱と思われる柱穴2基，南壁面に接して土坑1基を伴う。P1は径22cm，深さ24cm，P2が径32cm，深さ32cmである。土坑は80×64cmの楕円形で深さ18cmを測る。

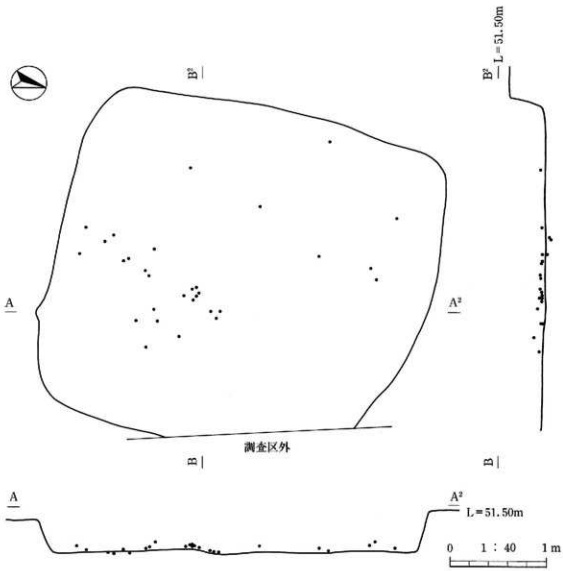
272は甕形土器で口縁部が内湾するタイプである。胴部には断面が三角形で刻み目のある突帯が1条めぐる。外面の突帯から下位にはススが付着する。273は甕形土器の脚部である。外反しながらひらく器形で端部は平坦となる。内面天井部も平坦である。274は壺形土器の完形品である。口径17.4cm，器高43.5cmを測る。口縁部は頸部から緩やかに外反し，屈曲して直立する形状でいわゆる二重口縁を呈する。頸部には斜位の刻み目のある突帯が一条めぐる。突帯は収束した部分で縦に垂下し，刻み目の方向が逆方向へと変化している。底部は丸底となる。外面は平滑なナデ，内面



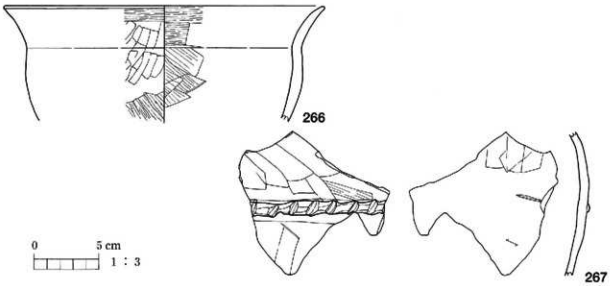
第49図　Ⅳ～Ⅵ層上面検出遺構位置図



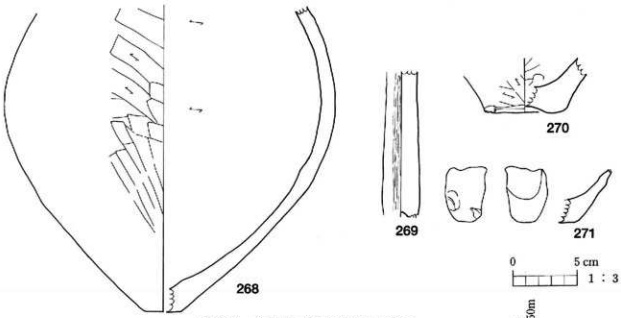
第50図　竪穴住居跡1号遺物出土状況



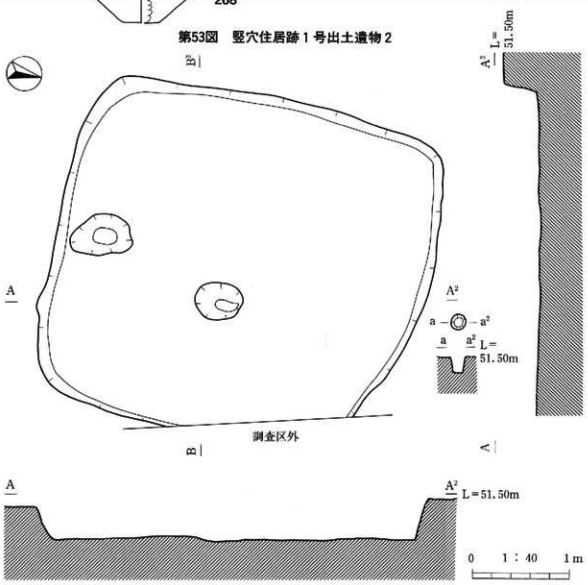
第51図　竪穴住居跡１号遺物分布図



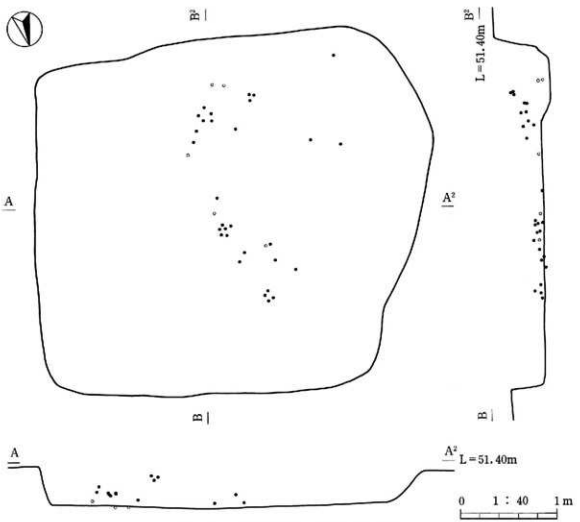
第52図　竪穴住居跡１号出土遺物１



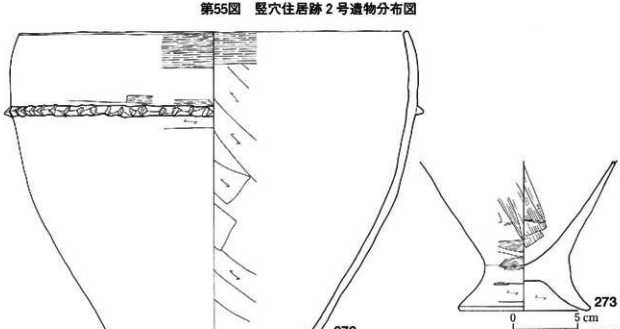
第53図　竪穴住居跡１号出土遺物２



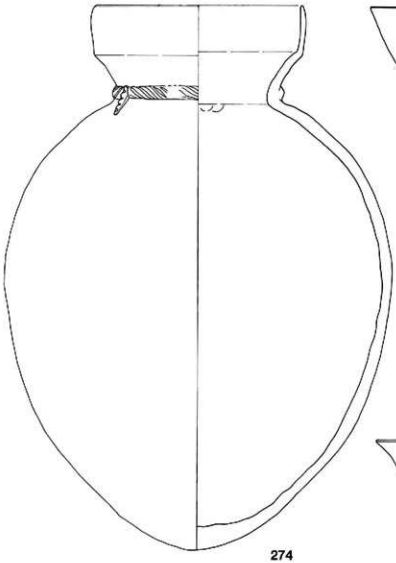
第54図　竪穴住居跡１号完掘状況

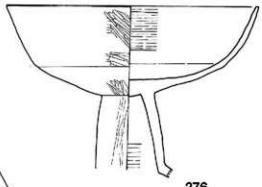


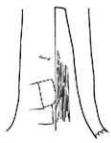
第55図　竪穴住居跡２号遺物分布図

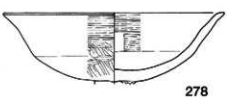


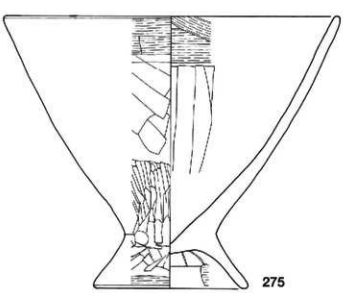
第56図　竪穴住居跡２号出土遺物１

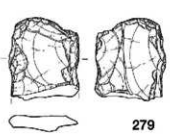


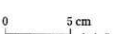




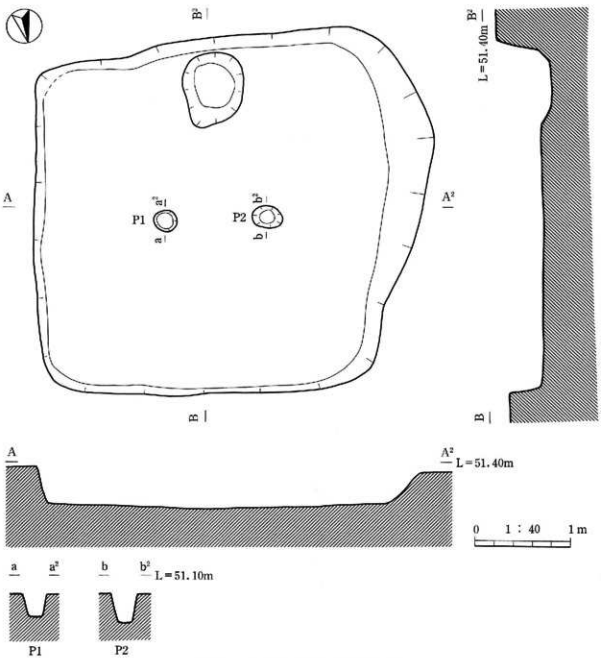




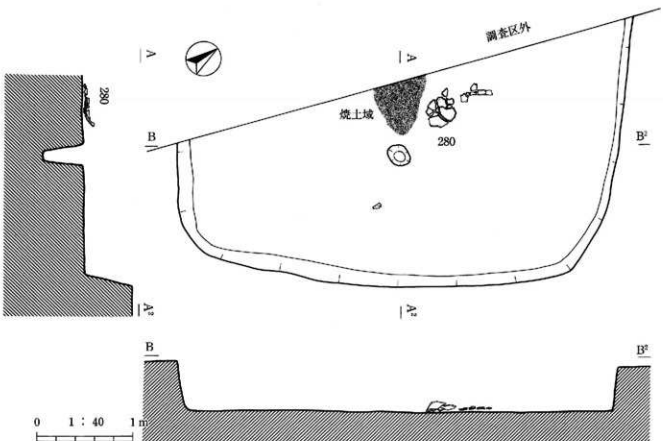




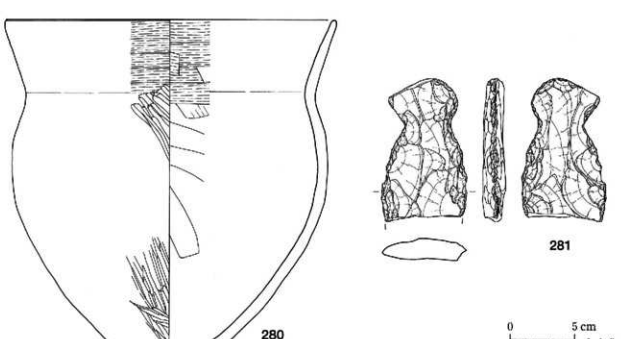
第57図　竪穴住居跡２号出土遺物２



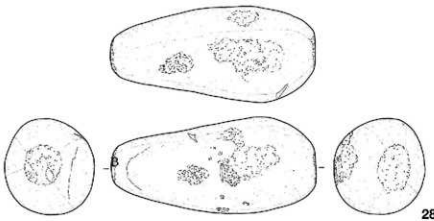
第58図　竪穴住居跡２号完掘状況



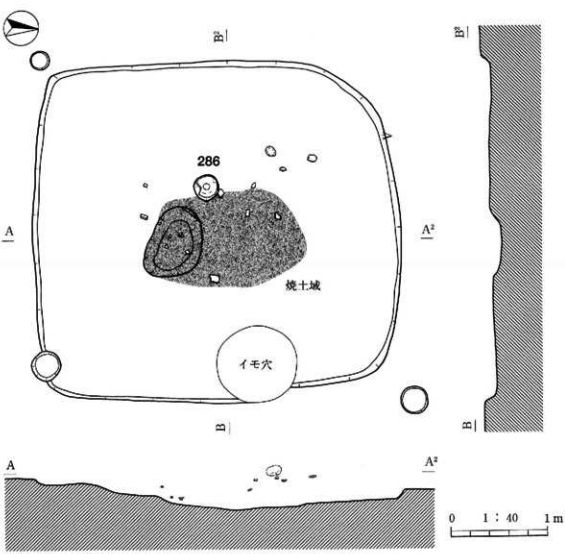
第59図　竪穴住居跡３号遺物出土状況



第60図　竪穴住居跡３号出土遺物１

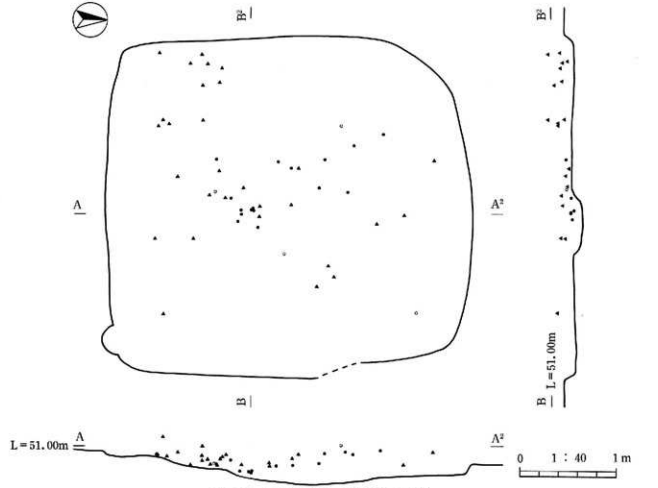


第61図　竪穴住居跡３号出土遺物２

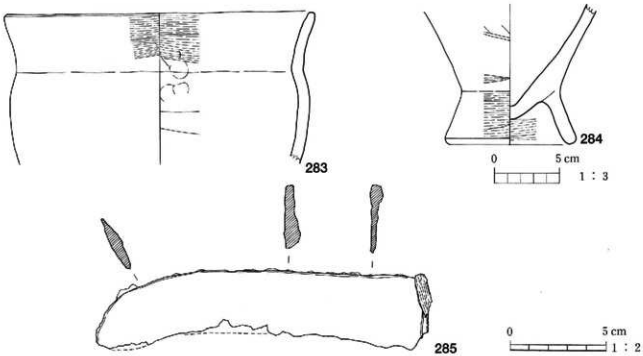


SD1

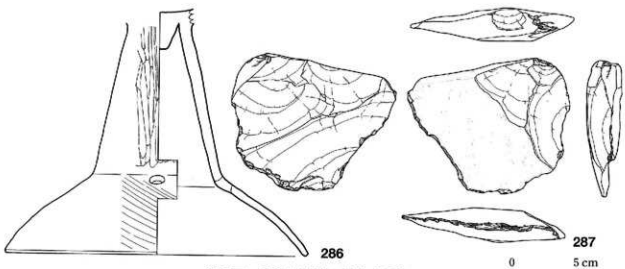
第62図　竪穴住居跡４号遺物出土状況



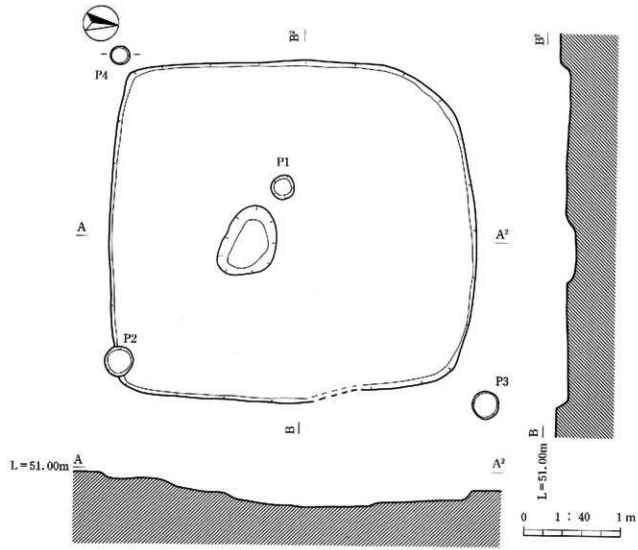
第63図　竪穴住居跡４号遺物分布図



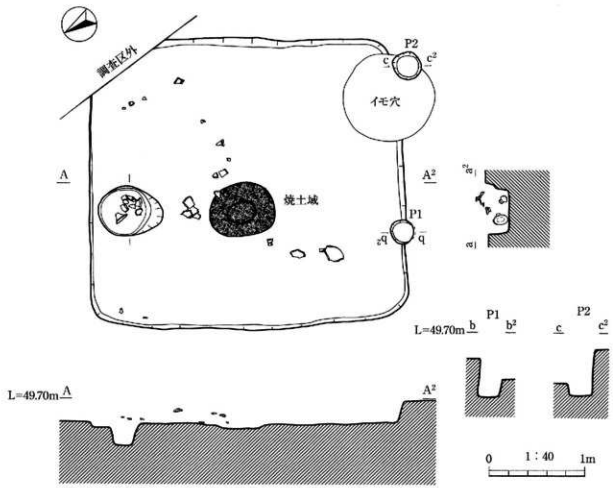
第64図　竪穴住居跡４号出土遺物１



第65図　竪穴住居跡４号出土遺物２



第66図　竪穴住居跡４号完掘状況



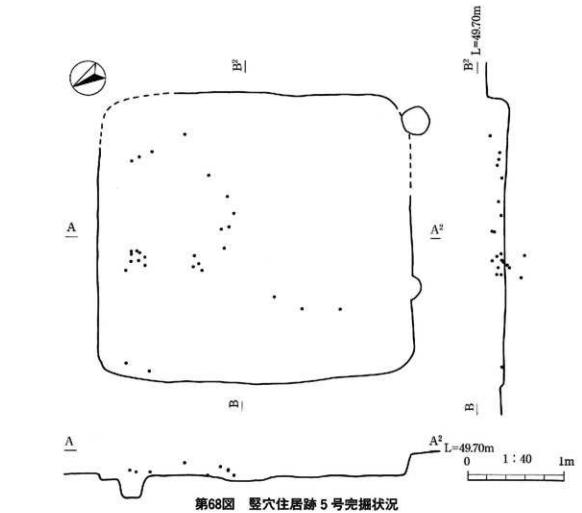
第67図　竪穴住居跡５号遺物出土状況

の頸部付近には指頭痕が残る。床着の状態でまとまって出土しているが，出土位置を明確にできなかった。275は甕形土器である。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものである。外面にススが付着する。口径25.9cm，器高21.5cmである。胴部下半から底部途中までの外面にヘラナデ，口縁部内外面と底部内外面にナデがみられる。276～278は高坏形土器である。276は坏部が途中で緩やかに屈折したあと直線的に立ち上がるもので，脚部は中空となる。278は途中で緩やかに屈曲しやや外反して立ち上がる。279は打製石斧の基部である。刃部は欠損する。

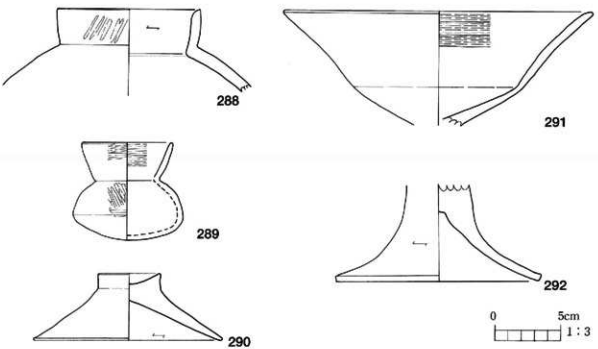
③竪穴住居跡３号（第59図～第61図）

３号は，N－38区で検出したもので，推定で一辺が約4.6mの隅丸方形を呈すると思われる。検出面からの深さは48cmを測る。竪穴は中央に焼土域，柱穴１基を伴う。Ｐ１は径25cm，深さ44cmである。

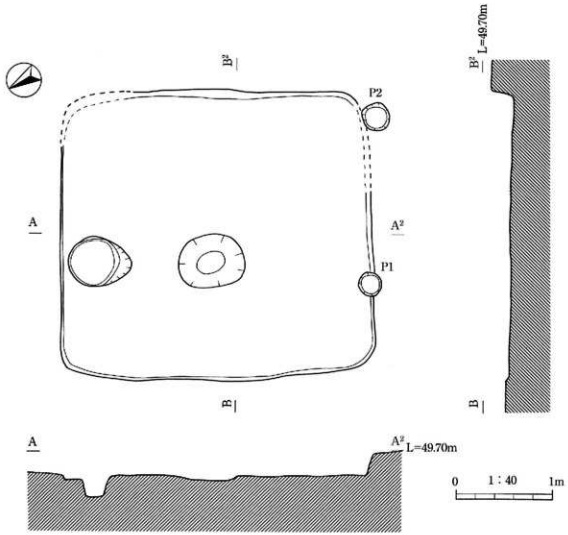
遺構内遺物は３点を図化した。280は甕形土器で，焼土域の近くに床着の状態で出土したものである。口縁部は胴部から緩やかに外反して立ち上がり，口唇部端が丸くおさまる。胴部はやや丸み



第68図　竪穴住居跡５号完掘状況



第69図　竪穴住居跡５号出土遺物



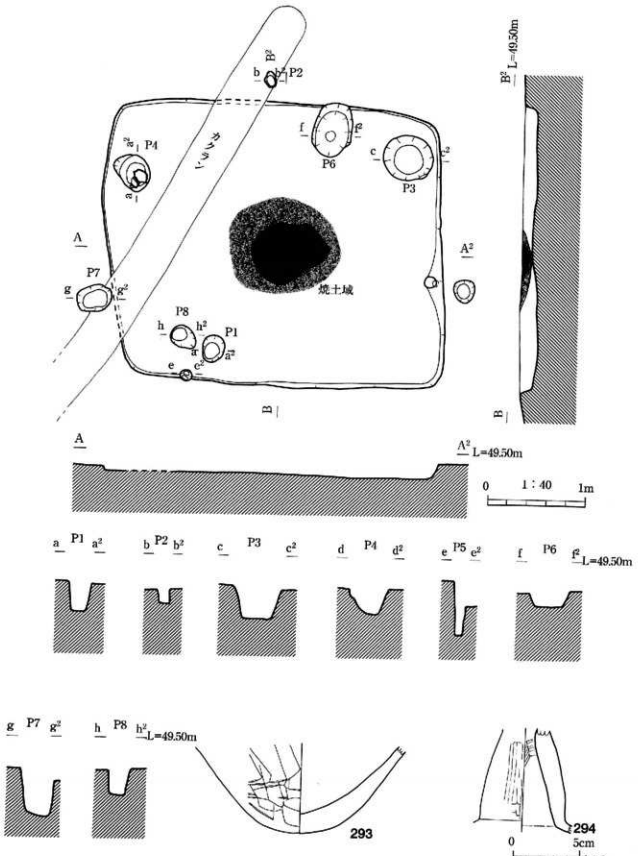
第70図　竪穴住居跡５号完掘状況

を帯びている。胴部から胴部にかけてヘラナデ，口縁部内外面にはナデがみられ，底部の内外面にススが付着している。281は頁岩製の打製石斧で刃部を欠損する。282は砂岩製の敲石である。表裏面と長軸の両端に敲打痕がみられる。

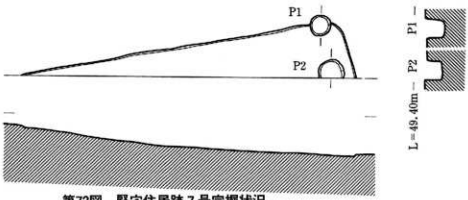
④竪穴住居跡４号（第62図～第66図）

４号は，M－31区で検出したもので，平面形は3.8m×3.7mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは32cmを測る。竪穴からは中央に掘り込みを伴う楕円形の焼土域と柱穴１基を検出した。北西を除く竪穴の角部にもそれぞれ１基ずつ，計３基の柱穴を伴う。掘り込みは76×56cmで深さ23cm，Ｐ１は径25cm・深さ52cm，Ｐ２は径30cm・深さ40cm，Ｐ３は径21cm・深さ15cmを測る。

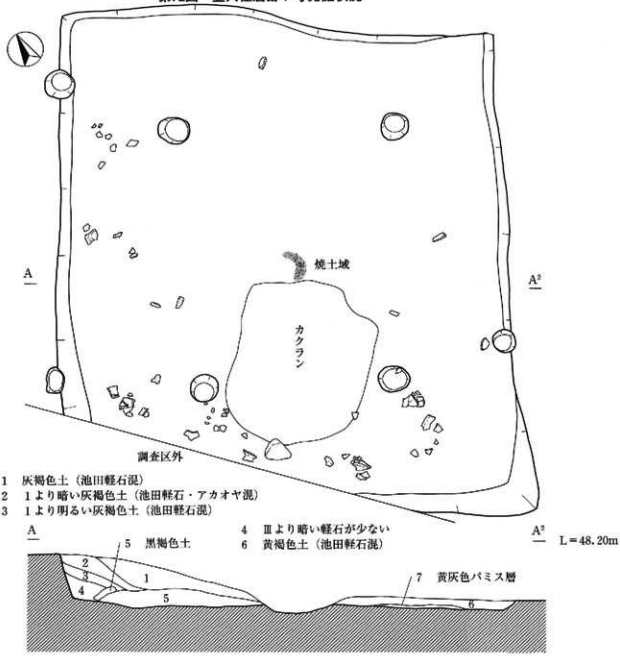
遺物は５点を図化した。283は口縁部が緩やかに外反して立ち上がる甕形土器である。284は脚部で，内面天井部は下方に大きくふくらむ。286は高坏形土器で坏部を欠く。脚部に４か所に円孔がある。調整はヘラナデである。285は鉄製の鎌である。平面形は緩やかな弧を描き，先端部でやや湾曲する。刃部は一部欠損している。基部は柄を挟み込むために折り曲げられ，柄と思われる木



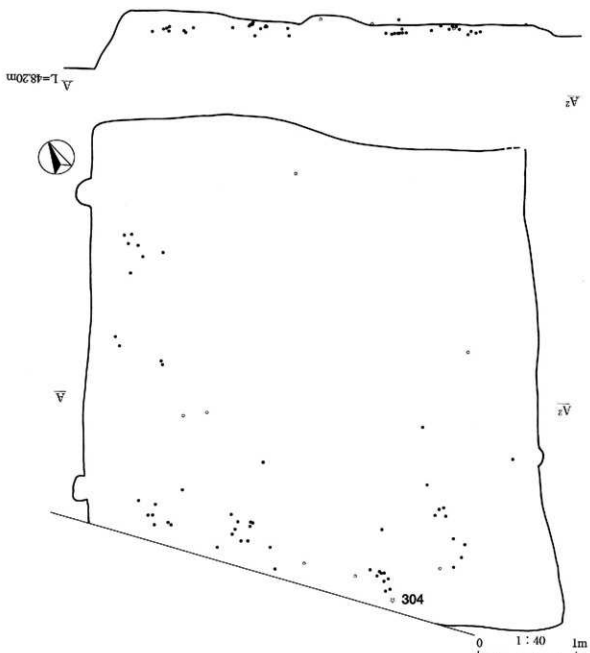
第71図　竪穴住居跡6号遺物出土状況・出土遺物



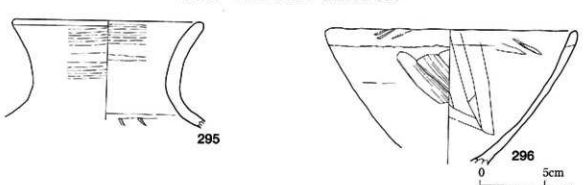
第72図　竪穴住居跡７号完掘状況



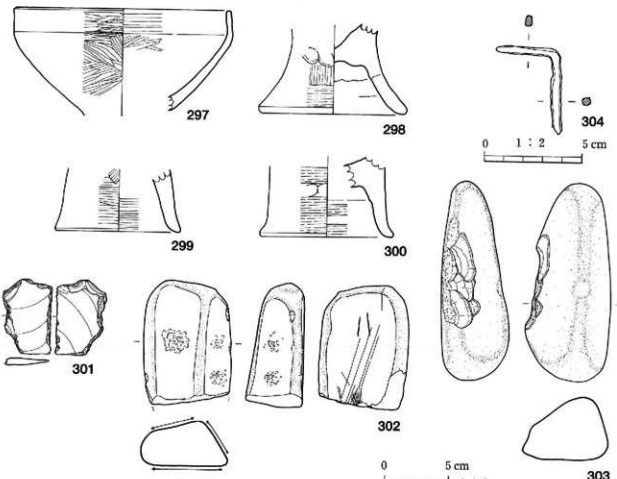
第73図　竪穴住居跡８号遺物出土状況



第74図　竪穴住居跡 8 号遺物分布図



第75図　竪穴住居跡 8 号出土遺物 1



第76図　竪穴住居跡８号出土遺物２

質が一部残存する。287は楔形石器と思われるものである。

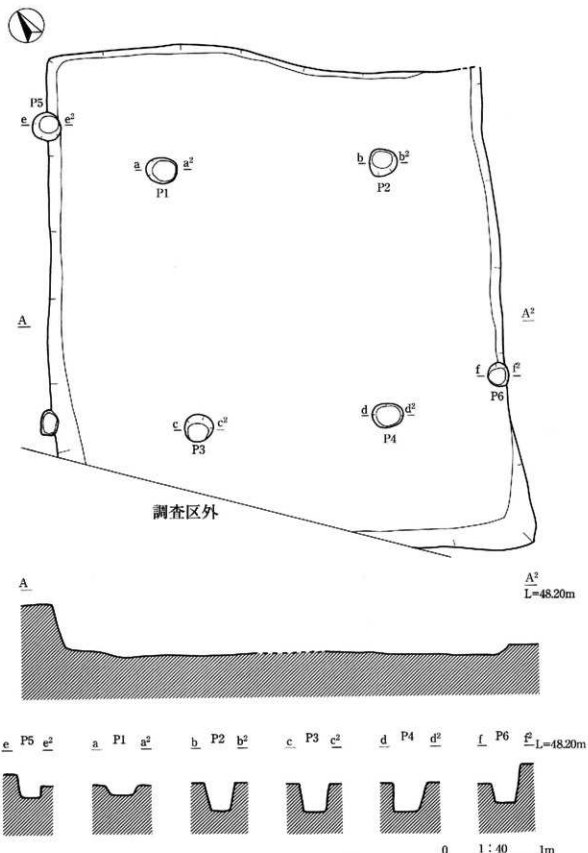
⑤竪穴住居跡５号（第67図～第70図）

５号はＬ～Ｍ－22～23区で検出したもので平面形は3.3m×3.1mの隅丸方形を呈する。竪穴の検出面からの深さは25cmを測る。竪穴の中央には67×58cmの掘り込みのある焼土域，北側壁面中央には土坑１基を伴う。柱穴は南壁に接して２基検出された。

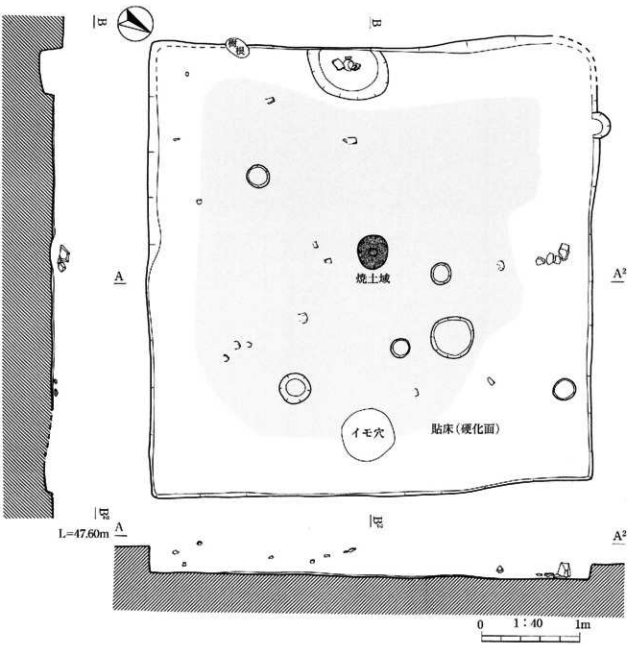
遺物は５点を図化した。288は壺形土器で内外面ともはナデである。口縁部の一部にヘラミガキがみられる。291は高坏形土器の坏部である。途中で屈折し外反して立ち上がる。289・292は住居の土坑内から出土したものである。289は坩形土器である。口縁部は外にひらき，底部は丸底となる。292は高坏形土器の脚部である。290は壺形土器で，外面はハケ後ナデ，内面に丁寧なナデがみられる。復元径14.7cmである。

⑥竪穴住居跡６号（第71図）

６号は，Ｍ－21区で検出したもので平面形は3.0m×3.45mの隅丸方形を呈する。竪穴の検出面



第77図　竪穴住居跡 8 号完掘状況



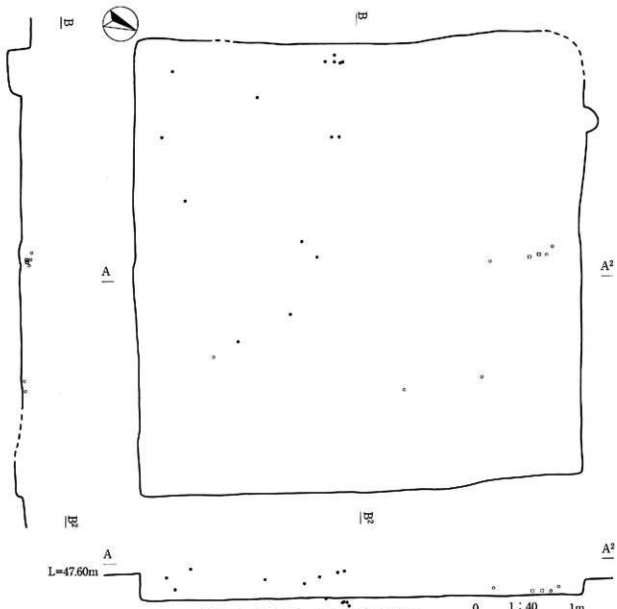
第78図　竪穴住居跡９号遺物出土状況

からの深さは25cmである。竪穴の中央には1.3m×1.0mの範囲に略円形を呈する明瞭な焼土域がある。柱穴は主として壁面に沿って５基検出され，竪穴の周囲にも５基が確認されている。

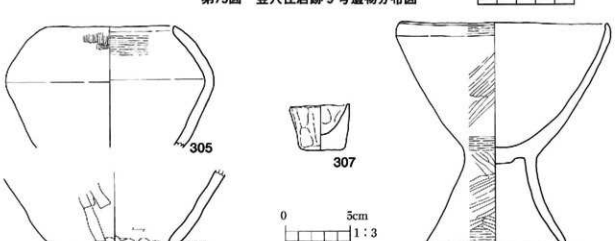
遺物は２点を図化した。293は壺形土器の底部で丸底を呈する。外面はヘラケズリがみられる。294は高坏形土器の脚部で外面にヘラミガキ，内面はヘラの痕跡がある。

⑦竪穴住居跡７号（第72図）

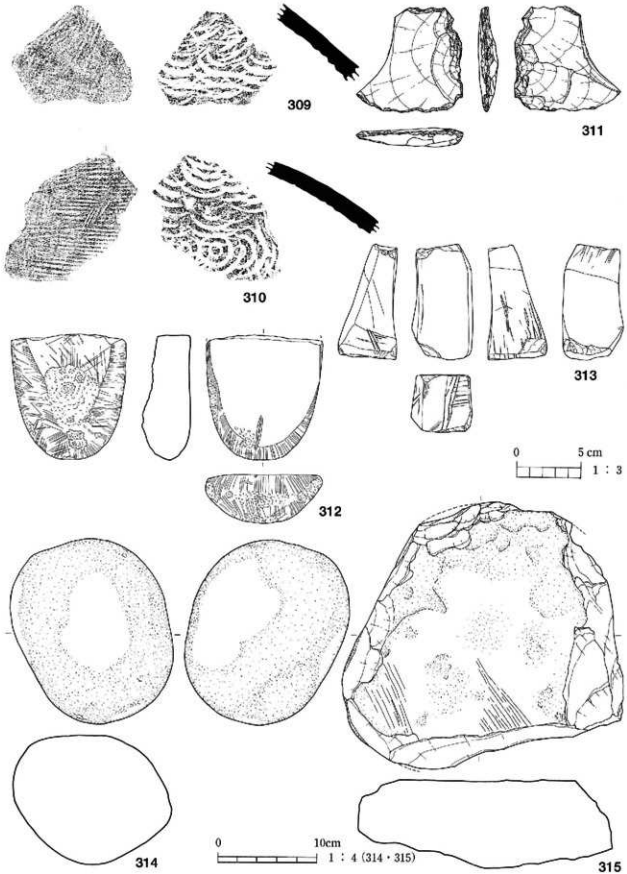
７号は，R－11区のⅥ層面で検出したもので，平面形はおそらく隅丸方形を呈するものと思われる。竪穴の検出面からの深さは６cmと極めて浅い。竪穴の東隅に柱穴状のピットが２基検出された。



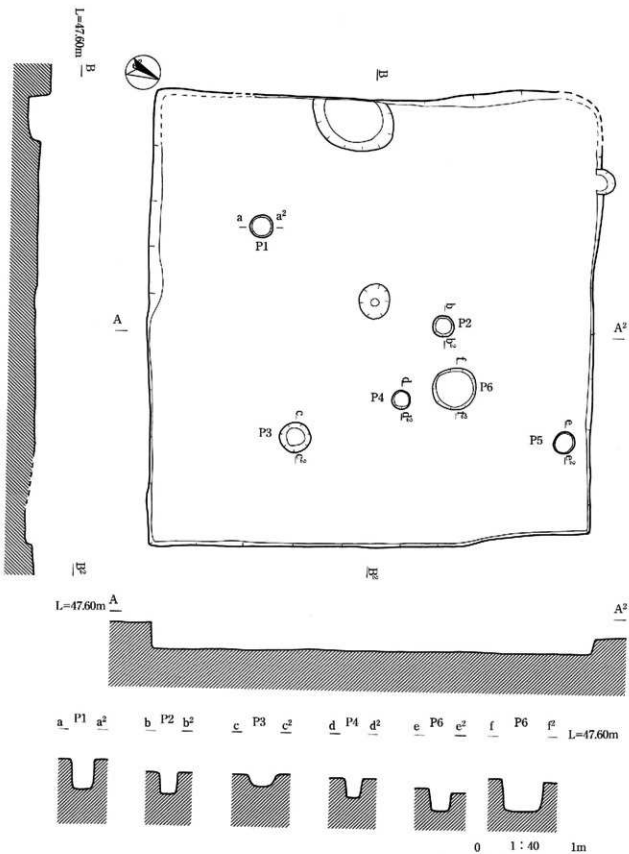
第79図　竪穴住居跡９号遺物分布図



第80図　竪穴住居跡９号出土遺物１



第81図　竪穴住居跡9号出土遺物2



第82図　竪穴住居跡９号完掘状況

⑧竪穴住居跡８号（第73図～第77図）

８号は，Ｒ－10区のⅦ層面で検出したもので，平面形は約4.7m×5.3mの方形を呈する。竪穴の検出面からの深さは約62cmである。竪穴中央は桜の樹根によって攪乱されており，その北側に小さく弧状を呈する焼土域を検出した。竪穴内から主柱穴になると思われる柱穴が４基検出され，径はいずれも30cm前後である。竪穴の壁面に沿う柱穴も３基検出されている。

遺物は竪穴の東と南側から出土している。そのうち８点を図化した。295は壺形土器の口縁部である。くの字状に緩やかに外反する。内外面ともナデ調整と思われるがわずかに光沢がある。296は鉢形土器でやや粗い作りである。明瞭な接合痕を観察できる。297は黒色を呈する坏形土器で須恵器を模したものと思われる。口縁部はやや内湾する。内外面ともヘラミガキであるが，口縁部内面はナデ状となる。298～300は甕形土器の脚部で，298・300は外面に指頭痕がみられる。301は頁岩製でスクレイパー状の石器である。302は磨敲石，303は敲石でいずれも砂岩製である。304はＬ字状呈する鉄製品である。断面は略方形を呈する。

⑨竪穴住居跡９号（第78図～第82図）

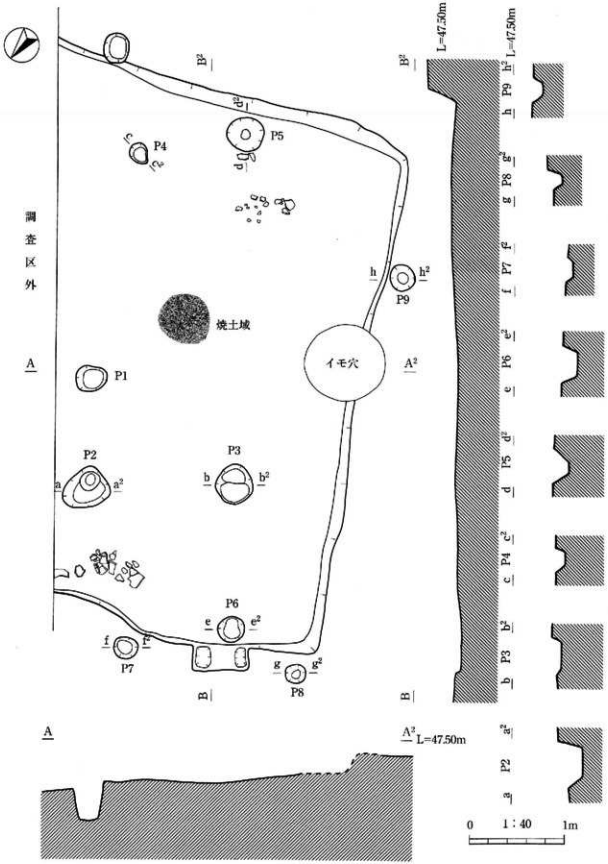
９号は，Ｒ－９区で検出したもので平面形は4.85m×4.7mの方形を呈する。竪穴部の検出面からの深さは30cmである。竪穴中央に36cm×32cmの掘り込みを伴う円形の小さい焼土域が形成されている。柱穴は竪穴内に６基，竪穴北壁に１基検出し，竪穴西壁には径82cmの楕円形の土坑を伴う。床面には貼床と思われる硬化面が形成されている。竪穴の西側の一部は11号住居と切り合っており，新旧関係では９号が古く，11号が新しい。

遺物は11点を図化した。305は無頸壺と思われる。竪穴の土坑内から出土したもので，外面にはヘラミガキが施され黒色を呈する。内面は口縁部にナデ状の痕跡が認められるが全体的に剥落が激しい。306は甕形土器の底部である。「つつぬけタイプ」で底部立ち上がり付近に指頭痕がみられる。307はコップ形の手づくね土器である。308は黒色を呈する鉢形土器の完形品である。口縁部は内湾し大きめの脚台がつく。脚台内面の天井部はやや下方へふくらむ形状である。口径16.5cm，器高17.6cmである。器面調整は口縁部付近と脚部との境，脚部立ち上がり付近がナデのほか，ヘラミガキである。309・310は須恵器甕の破片である。外面は平行のタタキ痕，内面は同心円状の当て具痕がみられる。312・313は砥石である。312は擦痕が個面にまで明瞭にみられ，平面部分には敲打による凹みがある。312は各面とも使用面となっており，溝状の擦痕も認められる。鋭利なものを研いだものと考えられる。314・315は台石とした。いずれも砂岩製である。

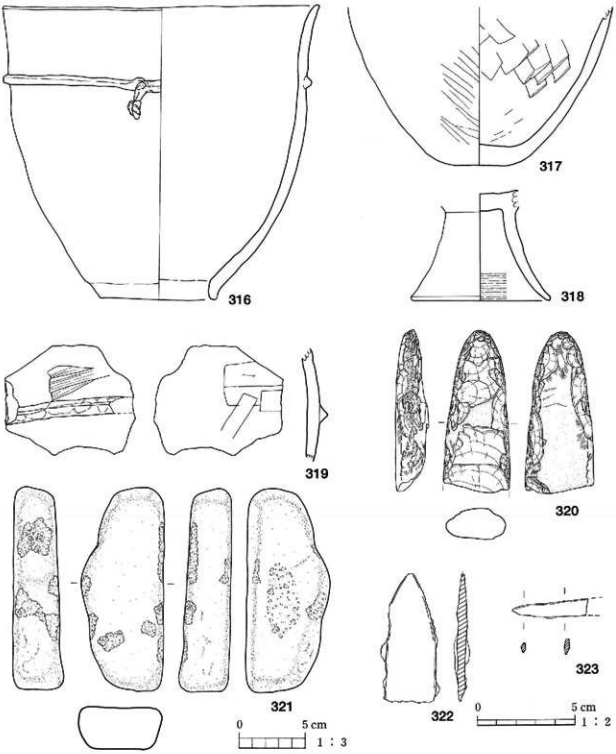
⑩竪穴住居跡10号（第83図・第84図）

10号は，Ｒ～Ｓ－８～９区にかけて検出したもので，平面形は１辺が約5.8mの方形を呈するものと思われる。竪穴部の検出面からの深さは31cmである。竪穴内の中央部に径54cmの略円形の焼土域，柱穴状のピットを５基検出した。ピットの径は大きいもので50cm，小さいもので25cmあり，深さは全体的に浅めである。また，竪穴北壁には長径60cm×短径20cmの小さい張り出しがある。この張り出しの東西に１基ずつピットが検出されており，出入口であった可能性が高い。

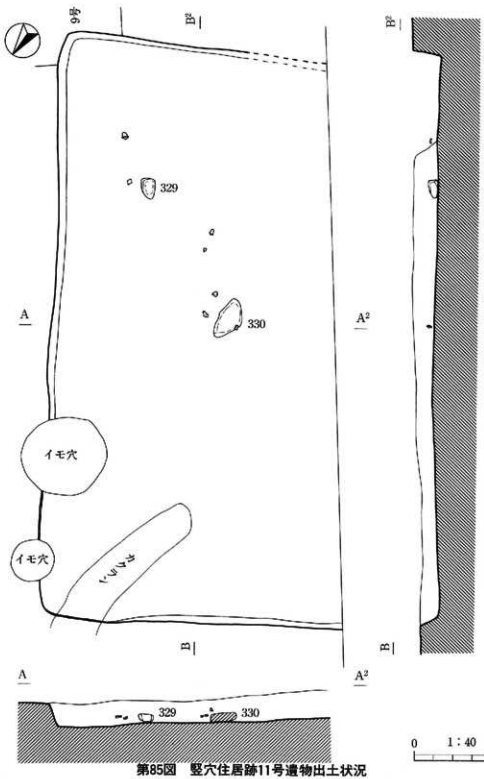
遺物は床付近から出土したもののうち，8点を図化した。316は甕形土器の完形品である。「つつ



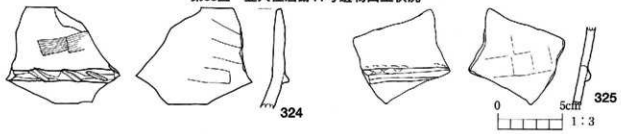
第83図　竪穴住居跡10号遺物出土状況



第84図　竪穴住居跡10号出土遺物



第85図　竪穴住居跡11号遺物出土状況



第86図　竪穴住居跡11号出土遺物1

ぬけタイプ」である。口縁部はわずかに外反し，底部の立ち上がり付近がわずかにくびれている。胴部には断面三角形で刻み目のない突帯が1条めぐる。口径24.9cm，器高23.5である。317は壺形土器の底部である。外面にヘラケズリ，内面にはハケ目がみられる。318は鉢形土器の脚部と思われる。外面にはミガキ，内面にナデがみられる。脚部内面の天井部は平坦である。320は頁岩製の打製石斧である。両側縁部方向からの整形剥離痕がみられ，一部に礫面を残す。基部は欠損している。321は砂岩を利用した凹石である。平面および側面の一部に敲打痕がみられる。322は鉄剣の先端部である。残存長10.4cmを測る。323は鉄製刀子で，基部を欠損している。

⑪竪穴住居跡11号（第85図～第87図）

11号は，S－8～9区で検出したもので，検出した部分から推定してと平面形は1辺が約6mの方形を呈するものと思われる。今回検出した住居跡群の中では最も規模が大きい。竪穴の検出面からの深さは31cmである。竪穴の東端の一部は11号住居と切り合っており，住居の新旧関係としては9号が古く，11号が新しい。竪穴内には柱穴は検出されていない。

遺物は床付近から出土したものから7点を図化した。324・325は甕形土器の口縁部である。324は棒状工具によるキザミのある突帯，325は指頭によるつまみ痕のある突帯がめぐり，突帯の上位には爪痕が残る。326は須恵器の平瓶である。胴部の長径は15.4cmを測る。内面には口縁部と胴部の接合線が明瞭に観察できる。口縁部の先端は欠損している。327・328は坩形土器である。327は平底の底部で内外面ともにヘラミガキがみられる，328は外面がミガキ，内面はヘラナデで口縁部は内外面ともナデである。329は砂岩製の台石で使用面に擦痕や敲打痕による凹みがある。330は花崗岩製の石皿である。

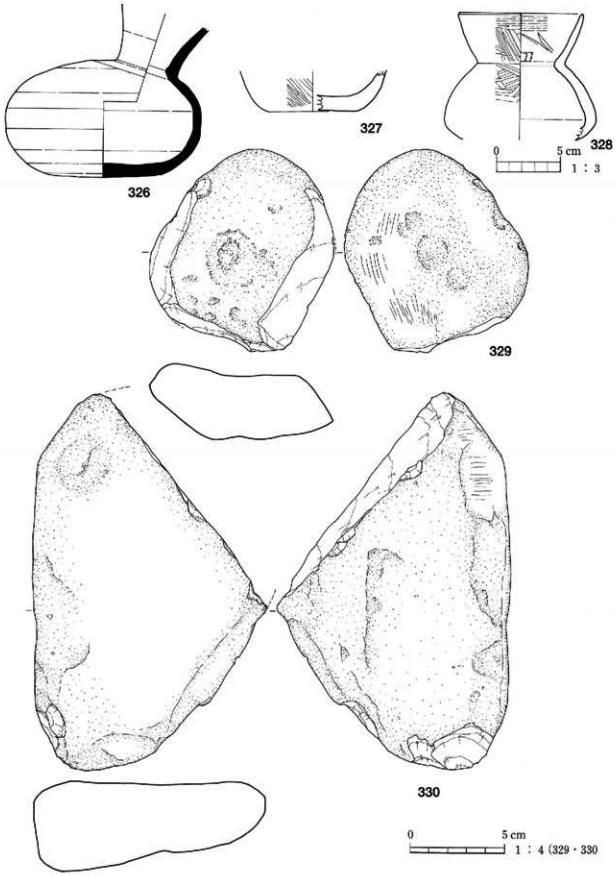
⑫竪穴住居跡12号

12号は，S－8区で検出したものである。検出規模が小さく後世の攪乱によって削平が著しいために掲載していない。平面形はおそらく方形を呈するものと思われる。検出面からの竪穴の深さは約26cmある。竪穴の東壁は11号と切り合っており，新旧関係では12号が古く，11号が新しい。

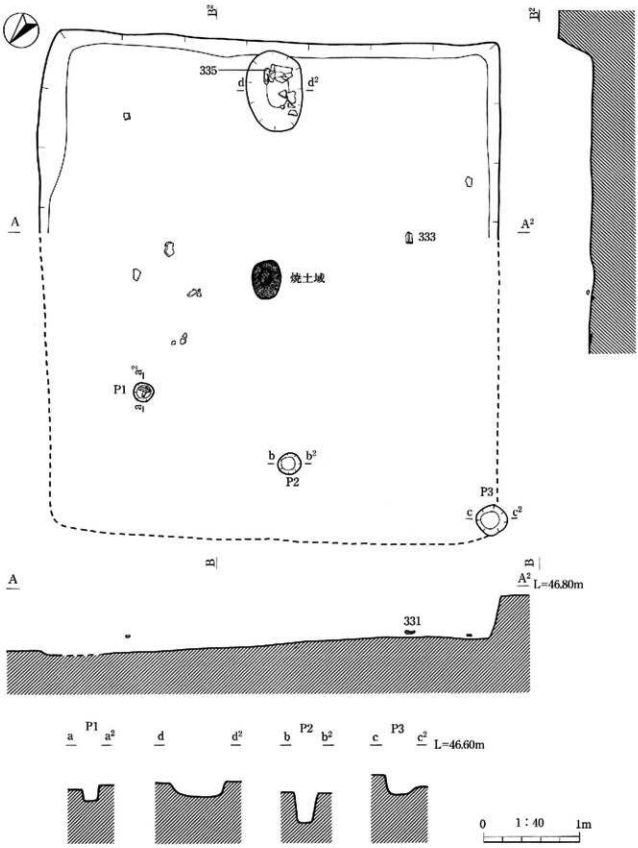
⑬竪穴住居跡13号（第88図・第89図）

13号は，S～T－7～8区のⅣa層面で検出したもので，平面形は方形を呈する。竪穴の検出面からの深さは46cmある。検出面のⅣ層面での地形は北側に向かって傾斜しており，竪穴の左半分については明確なプランが検出されていない。第38図で示した竪穴平面の波線部分は，13号住居跡に伴うと思われる柱穴（P3）から推定したラインである。竪穴内に径20cmのP1，径24cmのP2が検出されたほか，中央には42cm×23cmの楕円形を呈し，掘り込みを伴う小さな焼土域が検出されている。竪穴の東壁には85cm×56cmの土坑を伴う。

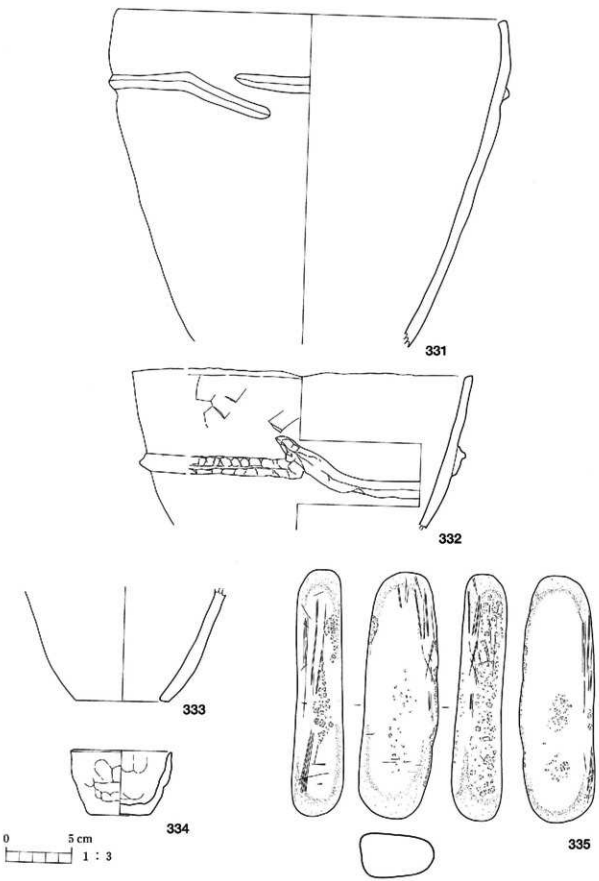
遺物は5点を図化した。331は甕形土器である。口縁部は内湾し，胴部は直線的な形状である。突帯は取束せずに段違いとなる。333は甑形土器の底部である。332は口縁部から胴部にかけての破片である。333と同様な器面調整，胎土・色調であり同一個体の可能性がある。334は手づくね土器である。コップ形を呈し，内外面に明瞭な指頭痕が残る。復元口径7.8cm，器高4.9cmである。335



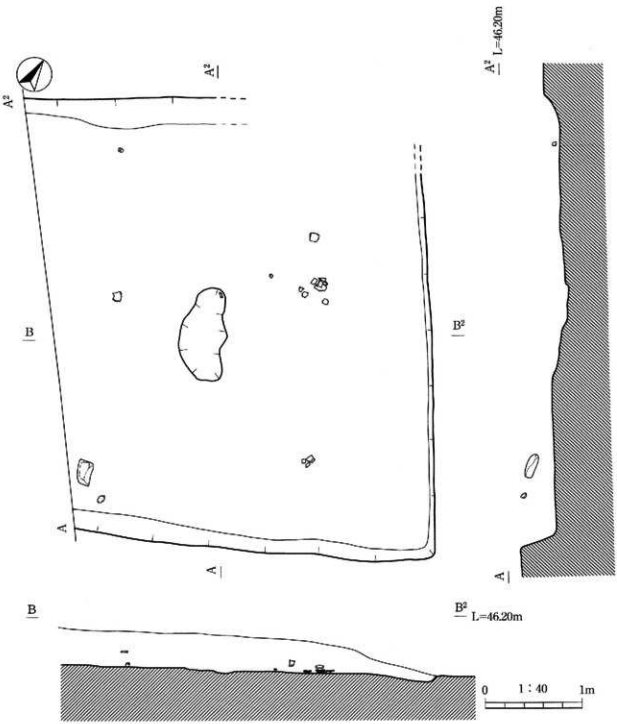
第87図　竪穴住居跡11号出土遺物２



第88図　竪穴住居跡13号遺物出土状況



第89図　竪穴住居跡14号遺物出土状況

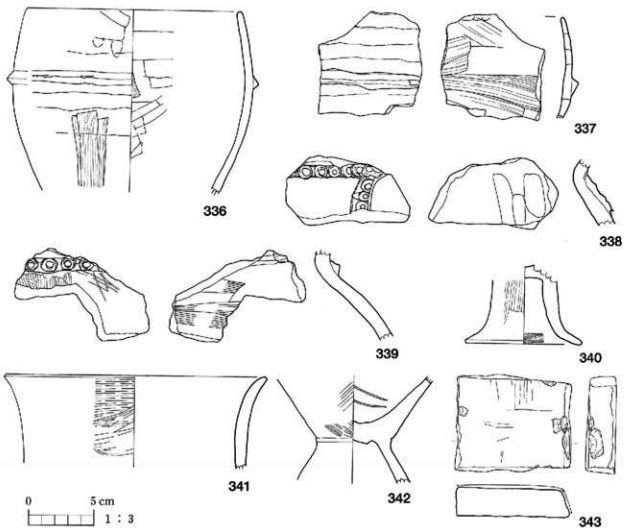


第90図　竪穴住居跡14号遺物出土状況

は扁蔵石として分類したもので，礫面に擦痕や微細な敲打痕がみられる。

⑭竪穴住居跡14号（第90図・第91図）

14号は，T－6～7区のⅣa層面で検出したもので，平面形は方形を呈する。検出した範囲から1辺が4.7m程度の規模と思われる。竪穴部の検出面からの深さは34cmである。竪穴部中央には炉跡と思われる不整形な凹みが検出され，埋土に炭化物を含む。竪穴から柱穴は確認されていない。

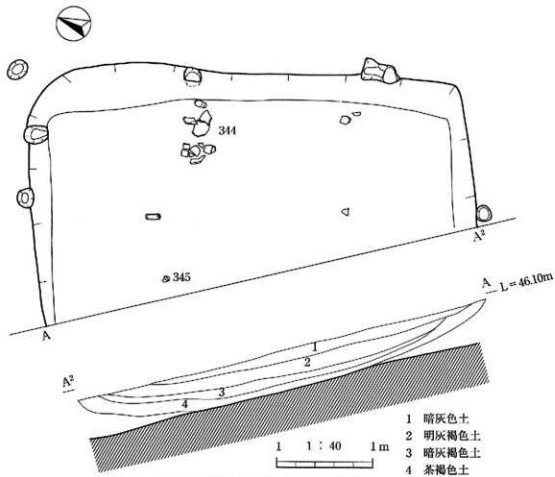


第91図　竪穴住居跡14号出土遺物

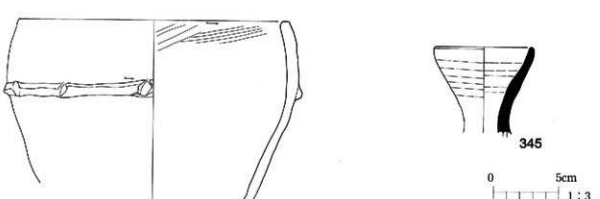
遺物は埋土から出土したものを８点を図化した。336・337は内湾する口縁部をもつ甕形土器である。336は内外面とも接合痕が顕著で胴部下半にススが付着する。338・339は壺形土器の頸部付近の破片である。竹管状の刺突が施された突帯がめぐるもので，338は突帯が胴部へ垂下している。器面調整は338の外面がナデ，内面には指頭によるナデである。339は外面がミガキ，内面はハケ状のナデである。341・342は鉢形土器と思われる。342は内外面ともケズリに近いヘラミガキである。外面に赤褐色の丹塗り，内面にはヘラ状工具による沈線がある。343は砂岩製の砥石である。表面と側面に使用面があり一部に擦痕が残る。

⑮竪穴住居跡16号（第92図・第93図）

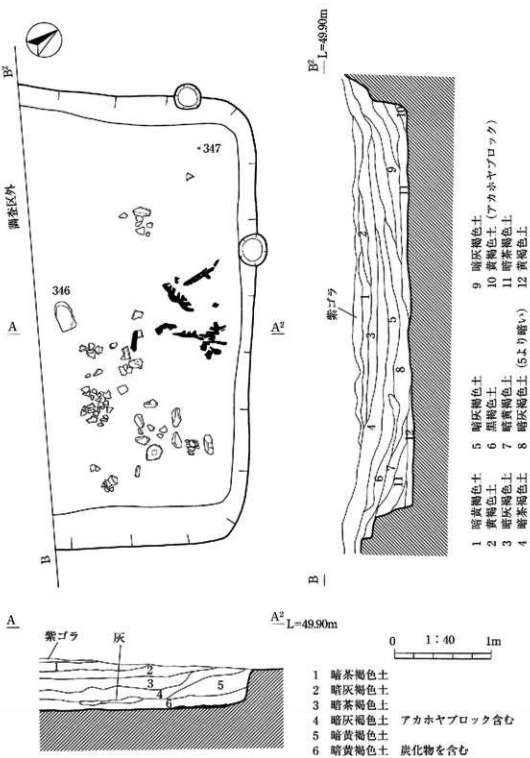
16号は，U－５区のⅣａ層上面で検出したもので，平面形は隅丸方形を呈し，竪穴の一辺は4.6mを測る。竪穴の検出面からの深さは42cmである。竪穴内から柱穴は検出されていないが，壁面に沿って楕円形，不整形を呈する柱穴を５基検出した。竪穴には灰褐色～茶褐色を基調とする埋土がレンズ状に堆積している。



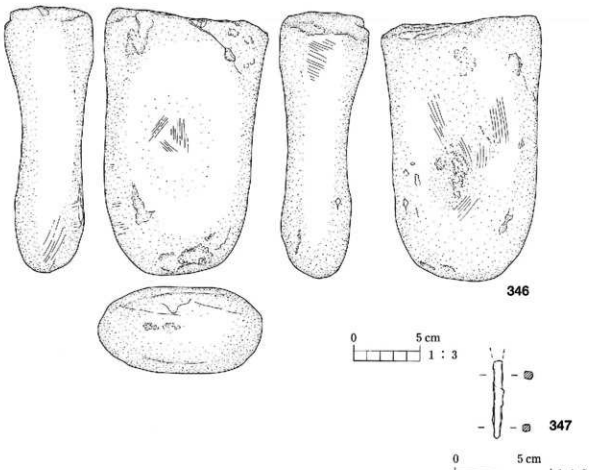
第92図　竪穴住居跡16号遺物出土状況



第93図　竪穴住居跡14号出土遺物



第94図　竪穴住居跡17号遺物出土状況



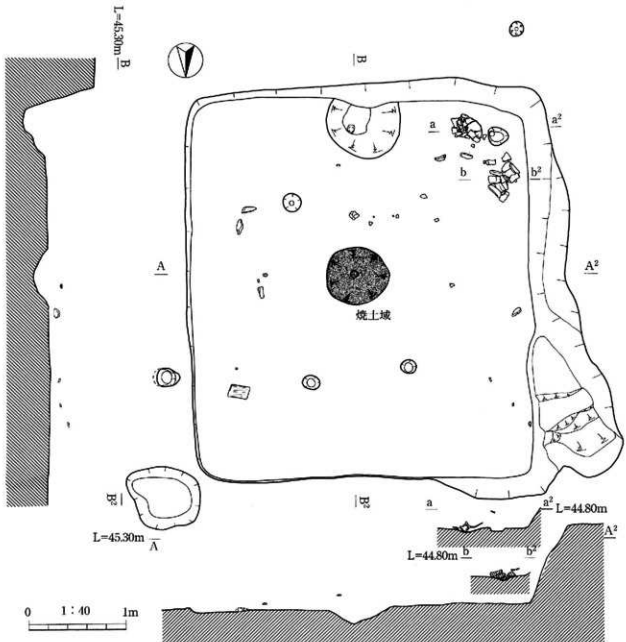
第95図　竪穴住居跡17号出土遺物

遺物は床付近から出土したものから２点を図化した。344は甕形土器である。口縁部は内湾し，断面形がカマボコ状の突帯がめぐる。突帯上には間隔をおいて指頭状の刻み目が施される。345は須恵器である。提瓶の口縁部分と思われる。内外面ともロクロによる整形痕が明瞭である。

⑯竪穴住居跡17号（第94図・第95図）

17号は，U～V－４区のⅣａ層上面で検出したもので，平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。竪穴の一辺は4.8mを測る。竪穴の検出面からの深さは約75cmあり，残存状態は良好である。竪穴内には柱穴がなく，北・東壁に沿って１基ずつ検出されている。竪穴の検出面には紫ゴラの堆積がみられるほか，灰褐色や茶褐色を基調とする埋土がレンズ状に堆積している。

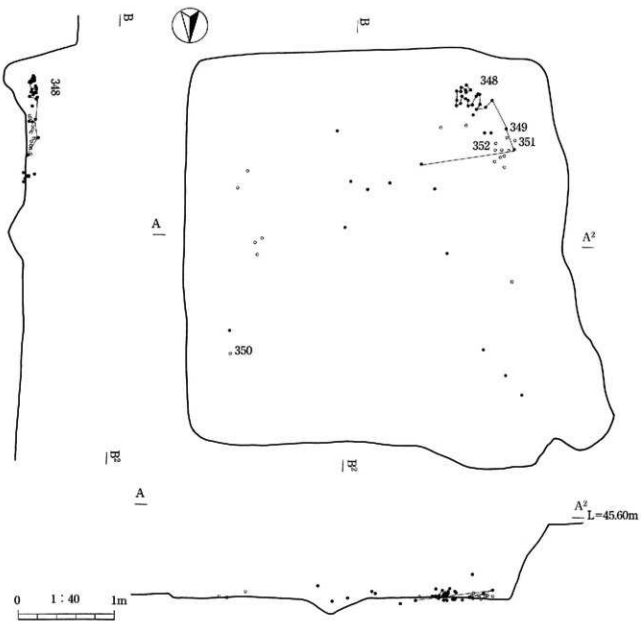
遺物は，竪穴の北側中央でエブリと思われる炭化材が出土している。古墳時代の生業を裏付けるものとして貴重な発見である。ただし現場での取り上げ時から脆弱であったことに加え，報告書作成まで時間が経過したため損傷が著しく，図化し掲載することができなかった。346は台石として分類した。表裏面や側面の一部に擦痕や敲打痕がみられる。347は鉄鏃の茎部である。



第96図　竪穴住居跡18号遺物出土状況

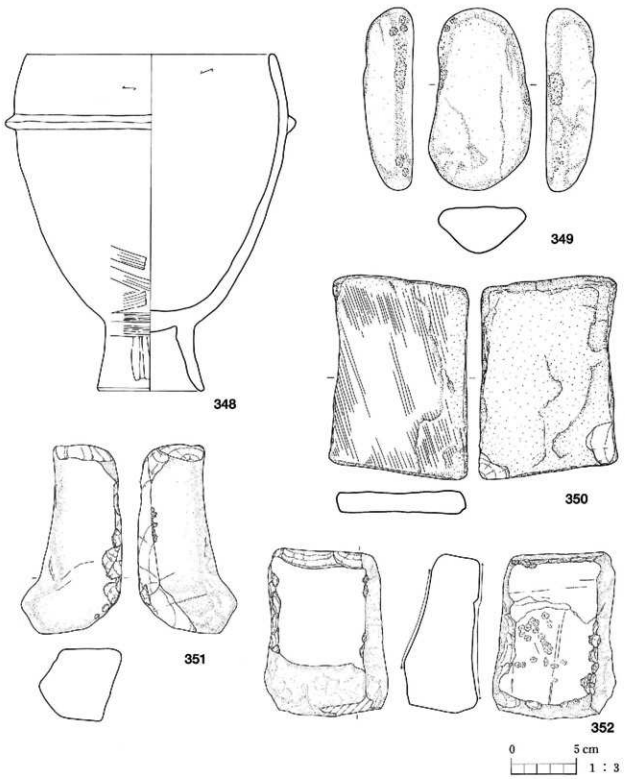
⑰竪穴住居跡18号（第96図～第99図）

18号は，T～U－4～5区のⅣa層上面で検出したもので，平面形が3.95m×4.4mの方形を呈する。今回報告する住居群のなかでは最も残存状態が良好である。竪穴の検出面からの深さは最も深いところで84cm，浅い部分で約6cmである。竪穴内には中央に64cm×61cmの円形の掘り込みのある焼土域と柱穴4基，南壁に土坑1基を検出した。P1～P3は径が16cm～20cm前後で他の住居と比べると規模が小さい。竪穴内の土坑は半円形を呈し径77cmを測る。このほか竪穴の東と北に2基のピットが確認されたほか，竪穴の北東端にやや不整形な土坑がある。また，竪穴の東壁には張り出しがあり，断面の形状が階段状の段差を形成することから出入口と考えられる。

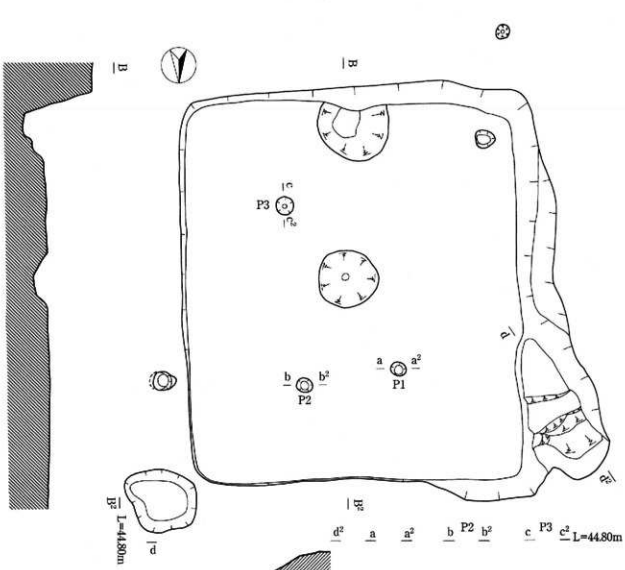


第97図　竪穴住居跡18号遺物分布図

遺物は，竪穴の南西端，Ｐ４周辺の床付近から甕形土器や石器が集中して出土している。そのうち５点を図化した。348は甕形土器の完形品である。口縁部は内湾し，胴部に断面がカマボコ状の突帯が１条めぐる。直線的な脚部がつき，脚部内面の天井部はやや下方へとふくらむタイプである。外面は脚部から突帯の上位にかけてススが付着している。口径19.0cm，器高24.7cmある。349は敲石である。両側面に敲打痕がみられる。350は石皿で明瞭な擦痕がみられる。351は長靴形を呈する砥石でわずかに磨面が観察できる。352は砥石である。両面に使用面があり一部に敲打痕も残る。



第98図　竪穴住居跡18号出土遺物

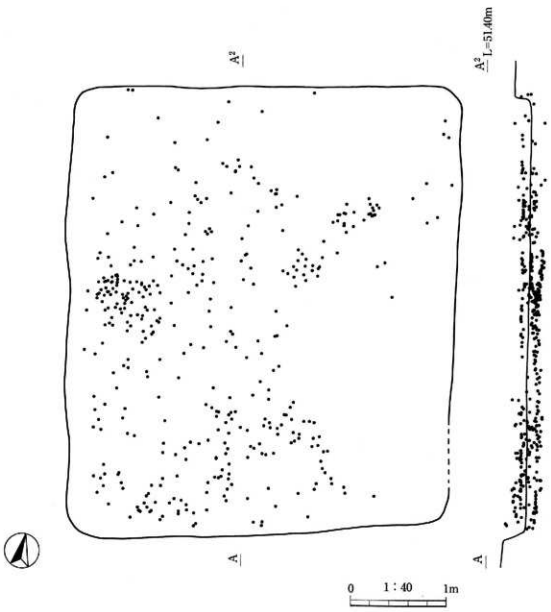


第99図　竪穴住居跡18号完掘状況

⑱竪穴住居跡19号（第100図～第102図）

19号は，M～N－36区で検出したもので，平面形は4.8m×4.1mの隅丸方形を呈する。竪穴の検出面からの深さは約24cmである。竪穴内は中央に焼土域を伴うが焼土域に伴う掘り込みや柱穴は検出されていない。竪穴の床面は西側に向かって傾斜している。

遺物は出土したものから8点を図化した。353は甕形土器である。口縁部はやや内湾し肩部に刻み目のある突帯がめぐる。調整はナデである。354は甕形土器の脚部で，内面の天井部に突起がある。355～358は高坏形土器である。355は坏部で直線的に外へひらくものである。356は途中で屈折

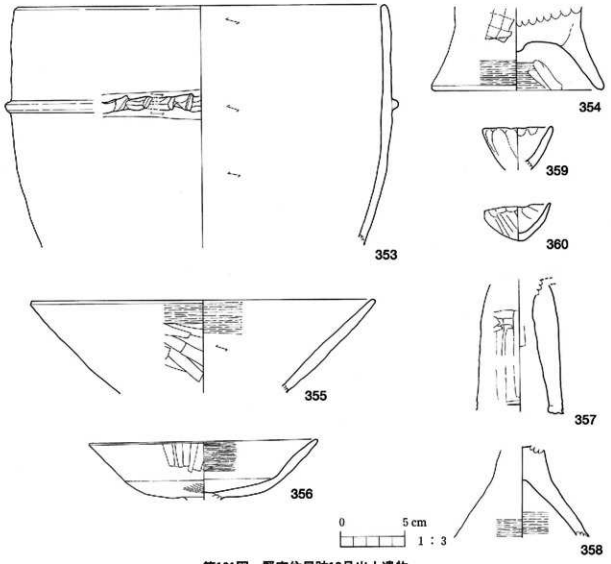


第100図　竪穴住居跡19号遺物分布図

し直線的に立ち上がる坏部である。外面ヘラナデ，内面ヘラミガキである。357はエンタシス状の脚部でヘラナデ痕が顕著である。358は脚部が外へひろがるものでナデがみられる。359・360は手づくね土器である。いずれも尖底のもので指頭による整形痕が明瞭である。

⑲竪穴住居跡20号

20号は，N－36区の西壁の土層断面で確認されたもので，掘り込み面はⅢｂ層上面である。竪穴の検出面からの深さは約32cmを測る。竪穴部のほとんどが西側の調査区外へのびるものと思われ，検出規模が小さく平面プランも不明瞭なため図化しなかった。



第101図　竪穴住居跡19号出土遺物

⑳竪穴住居跡21号（第103図・第104図）

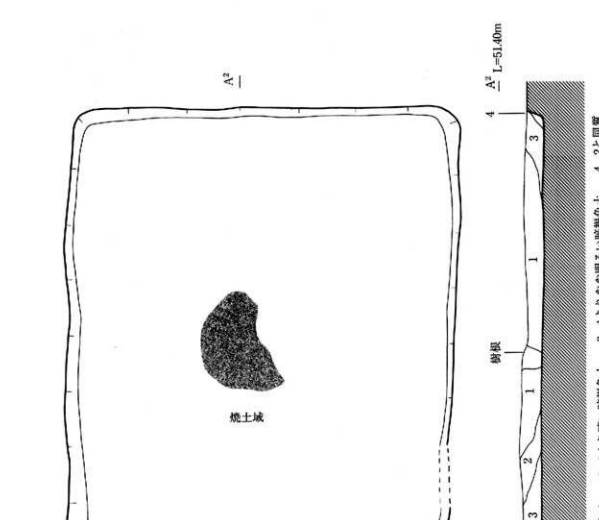
21号はM－39区で検出したものである。検出した部分から推定すると平面形は1辺が2.9m程度の方形を呈するものと思われる。竪穴の検出面からの深さは29cmである。検出規模も小さく，竪穴内からは焼土域や柱穴は検出されていない。

遺物は2点を図化した。361は高坏形土器である。坏部は脚部から直線的に立ち上がり，途中で屈折し外反するものである。362は坏形土器である。内外面にヘラミガキが施され黒色を呈する。

㉑　竪穴住居跡22号（第105図～第108図）

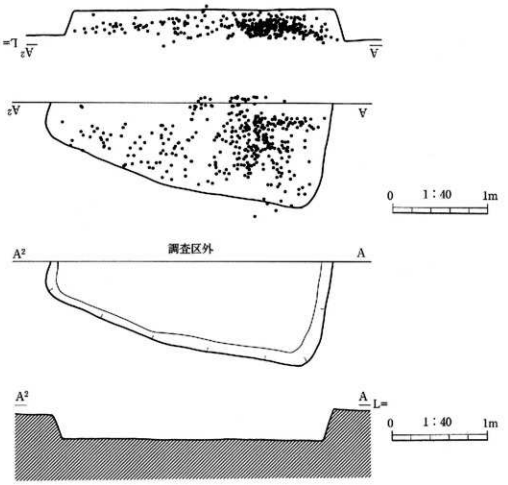
22号はM－40区検出したもので，検出した部分から推定すると，1辺が3.6mの方形を呈するものと思われる。竪穴の検出面からの深さは46cmである。竪穴内には中央部にハート形を呈する焼土域がある。竪穴内には掘り込みや焼土域，柱穴は確認されていない。

遺物は，13点を図化した。363は内湾する口縁部をもつ甕形土器である。胴部には菱形の刻み目

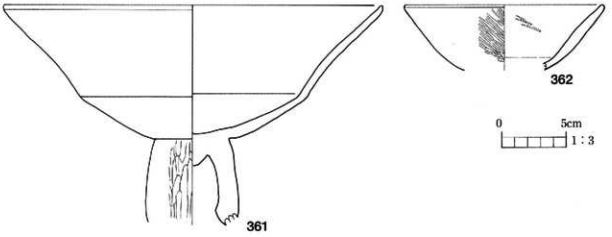


第102図　竪穴住居跡19号完掘状況

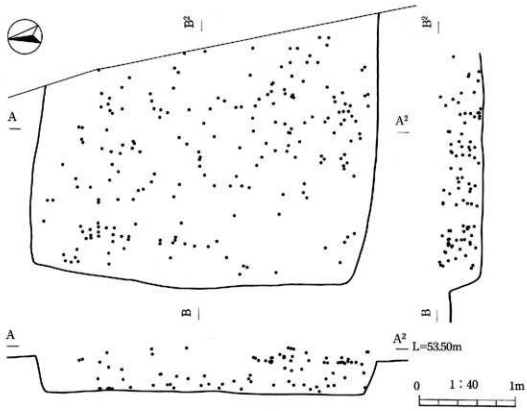
の施された突帯が1条めぐる。364～367も甕形土器の口縁部である。364は突帯上に棒状工具による斜位の刻み目が施される。365は突帯の上下に指頭圧痕が明瞭に残る。いずれも外面にススが付着している。374は甕形土器の底部である。外面にヘラおよび指頭痕，内面にヘラナデ痕が残る。368は壺形土器の頸部付近の破片である。刻み目のある断面三角形の突帯をもつ。369・372は壺形土器の口縁部として分類したものである。369・372は屈曲部にヘラ状工具による刻み面が施される。二重口縁を呈する可能性がある。370は甕形土器の脚部である。直線的な脚部で内面天井部はやや下方へふくらむ。371は壺形土器の口縁部である。内外面にヨコナデがみられる。373は直立する器形で鉢形土器と思われる。内外面ともナデがみられる。375は高坏形土器の脚部である。やや短く幅広のものである。外面ヘラミガキ，内面ヘラケズリがみられる。376は手つくね土器である。



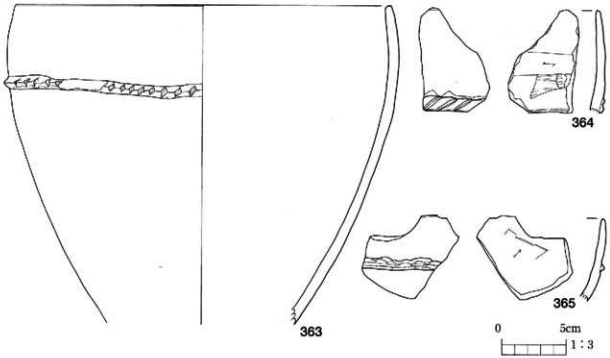
第103図　竪穴住居跡21号遺物分布図・完掘状況



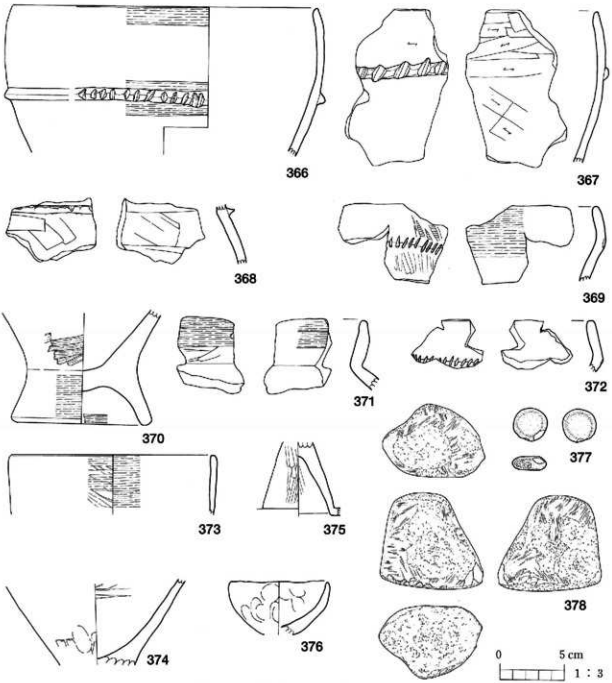
第104図　竪穴住居跡21号出土遺物



第105図　竪穴住居跡22号遺物分布図



第106図　竪穴住居跡22号出土遺物1

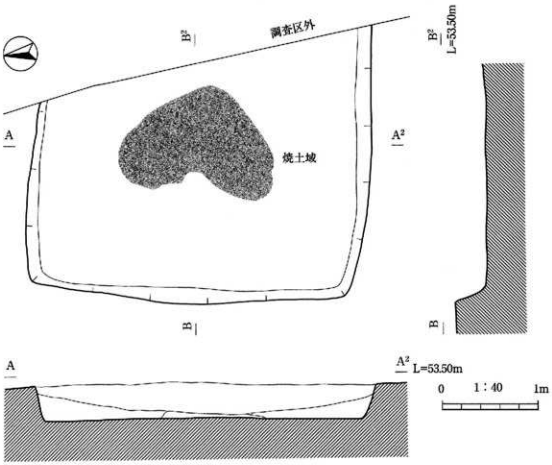


第107図　竪穴住居跡22号出土遺物２

内外とも指頭による整形痕が明瞭に残る。377・378は敲石とした。377は砂岩製で側面の一部に敲打痕がみられる。378は磨敲石として分類したものでスタンプ状を呈する。器面全体に擦痕や敲打痕が顕著である。

㉒　竪穴住居跡23号（第109図・第110図）

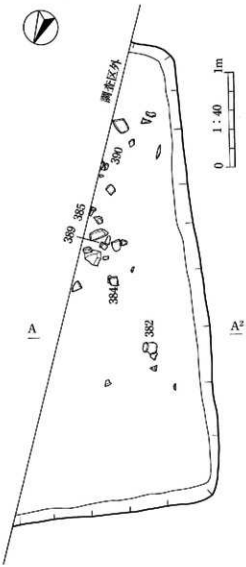
23号はM－41区で確認したもので，検出規模が小さいが，平面形は方形で一辺が約4.8m前後になるものと思われる。竪穴部の検出面からの深さは54cmである。竪穴内から掘り込みや焼土域，

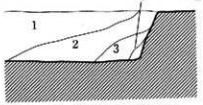


第108図　竪穴住居跡22号完掘状況

柱穴などは検出されていない。

遺物は13点を図化した。379～385・390は甕形土器である。379は口縁部が内湾し，胴部に布目のついた斜位の刻み目突帯が１条めぐる。胴部の形状は直線的である。口縁部内外面はヨコナデ，突帯より下位は丁寧なナデがみられる。380は突帯がやや下位に貼り付けられたものである。突帯の上下にススが付着する。382～384の脚部は内面天井部がやや丸みを帯び，390はやや下方へふくらむ形状である。382・384・385・390は器面の胴部と脚部境や底部立ち上がり付近に指頭痕が残る。全体として脚部高は低いものである。391は打製石斧である。幅広の素材を利用し側縁部方向から整形されている。刃部には使用痕がみられる。





1 暗褐色土　2 1より明るい暗褐色土
3 2より明るい暗褐色土　4 1より暗い暗褐色土

第109図　竪穴住居跡23号遺物出土状況

（2）溝状遺構

①溝状遺構1号（第111図）

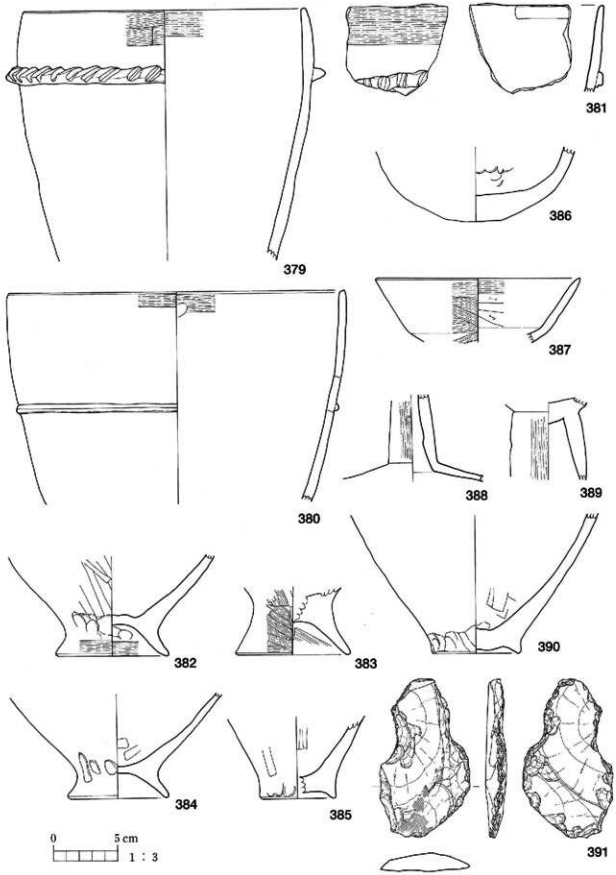
1号は，Q～R－10～11区のV層上面，住居跡7号，8号間で南北方向に検出されたもので，検出規模は長さ約15m，幅2.4～3.6m，深さは最深部で約2mを測る。断面形状はV字形を呈し，底面は南側に向かって緩やかに傾斜している。溝に沿ってピット1基が検出されている。

出土遺物は5点を図化した。392は甕形土器である。口径16.9cm，器高20.5cmを測る。胴部に突帯がみられないものである。胴部中央にはヘラ痕，口縁部～胴部上半にナデ，脚部にナデがみられる。口縁部から胴部下半までと胴部内面にススが付着している。393は須恵器甕である。外面に平行のタタキ痕，内面に同心円状の当て具痕がある。394・395・397は鉄鏃である。394は圭頭鏃で先端と茎部を欠損している。395は矢柄部である。木質が残存している。397は茎部である。

②溝状遺構2号（第112図）

2号は，T～U－5～6区のVI層上面，住居跡16・17・18号の南側で東西方向に検出したたもので，検出規模は長さ約16m，幅2.4～3.2m，深さは最深部で約80cmを測る。断面形状は浅いU字形を呈し，底面は北側に向かって傾斜している。溝に沿ってピットが4基確認されている。

遺物は3点を図化した。398は甕形土器で胴部に断面三角形の突帯がめぐる。399は椀型土器である。内外面とも入念なヘラミガキがみられ，黒色を呈する。396は鉄鏃の頸部～茎部である。



第110図　竪穴住居跡23号出土遺物

③溝状遺構３号（第112図）

３号は，Ｖ－３～４区のＶ層上面，調査区の北端において南北方向に検出したもので，検出規模は長さ約11.2m，幅約3.6m，深さは最深部で約2.9mを測る。茶褐色土を基調とする埋土がレンズ状に堆積し，上位には紫ゴラが認められた。断面形状はＶ字形を呈し，底面は東に向かって傾斜している。溝に沿ってピットが３基検出されている。

出土遺物は，6点を図化した。401は甕形土器の内湾する口縁部，402も口縁部で突帯部は胴部方向へ垂れ下がっている。突帯下面に指頭痕，突帯の上位に爪痕がみられる。甑形土器の口縁部の可能性もある。403・404は椀形土器である。ヘラミガキが施され，黒色を呈する。405は坏形を呈し，外面には焼成後に橙（オレンジ）色の顔料が塗布されている。脚部がつく可能性もある。

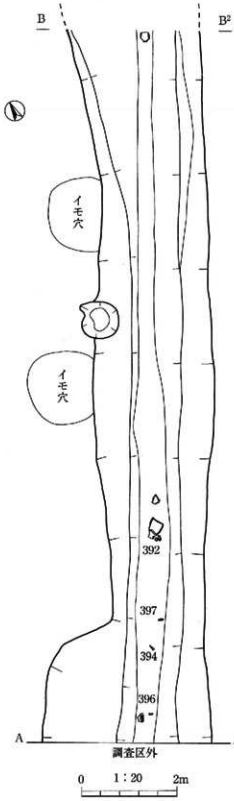
④溝状遺構４号（第114図～第123図）

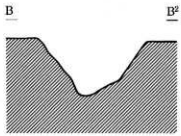
４号は，各年度の調査区において継続して調査したものが接続して１条となったため，溝状遺構４号としてまとめたものである。Ｔ－５区～Ｑ－12区にかけて南北方向に検出されている。検出規模は未検出部分（Ｑ－11～12区）を除き，長さ約75m，最大幅1.25m，深さは最深部で93cmを測る。断面形状は「Ｖ」字形を呈し，底面は平坦となる。埋土は黒褐色土や茶褐色土を基調とし池田火山灰のパミスを含む。

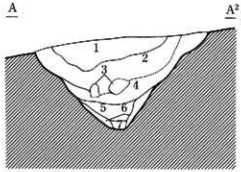
遺物は溝の全体から出土したが，なかでもＱ－12区，Ｑ－10区，Ｓ－６区，Ｔ－５区など数か所に遺物の集中が認められた。出土した遺物は甕形土器・甑形土器・壷形土器・高坏形土器・坏形土器・椀形土器・須恵器・鉄製品などで，うち58点を図化した。

406～427は甕形土器である。406～417は基本的に口縁部が内湾するタイプであるが，408は外反気味，406・409・410・417は口縁部端がやや直立する。いずれも胴部に断面三角形の突帯が１条めぐるものである。突帯上にみられる刻み目は，406～411が一定の間隔をおいて棒状工具で３か所ずつ連続して施すタイプである。411は刻み目が突帯から口縁部まで及んでいる。413は突帯上に連続した刻み目が施され，412は一定の間隔をおいて指頭状の刻み目がみられる。414・416・417は連続した刻み目はみられず，突帯の一部を指頭によって上方へとはね上げアクセントをつけている。406・407・414は完形品で，406は口径24.9cm，器高32.2cm，407は口径21.1cm，器高22.6cm，414は口径19.4cm，器高25.6cmを測る。406の胴部は直線的に長くのび，突帯下から胴部上半，底部内面にススが付着する。411・414・417は接合痕が明瞭に残る。414は口縁部の内湾がやや強く，直線的に立ち上がる脚部がつく。脚の端部は屈曲して外反する。器面調整は基本的にナデであるが口縁部内面に指頭痕がみられる。415は指頭状の刻み目のある突帯がめぐるもので胴部は長胴となる。418～427は甕形土器の脚部とした。418・423・424は外反しながらひらくタイプ，419～422は直線的に立ち上がるタイプである。脚部内面の天井部分は425が丸味，420・422が平坦，418・421・423・424が下方へふくらむタイプである。

428～431は甑形土器である。428は完形品で，口径24.9cm，器高20.6cm，底径7.7cmを測る。口縁部は緩やかに外反し，胴部には指頭による刻み目のついた突帯が１条めぐる。底部立ち上がり付近には棒状工具による刺突が少なくとも16か所あり，うち４つが貫通し小円孔となっている。焼成前に施されたものである。429は底部片である。多孔式で23か所の円孔を確認できる。器壁は

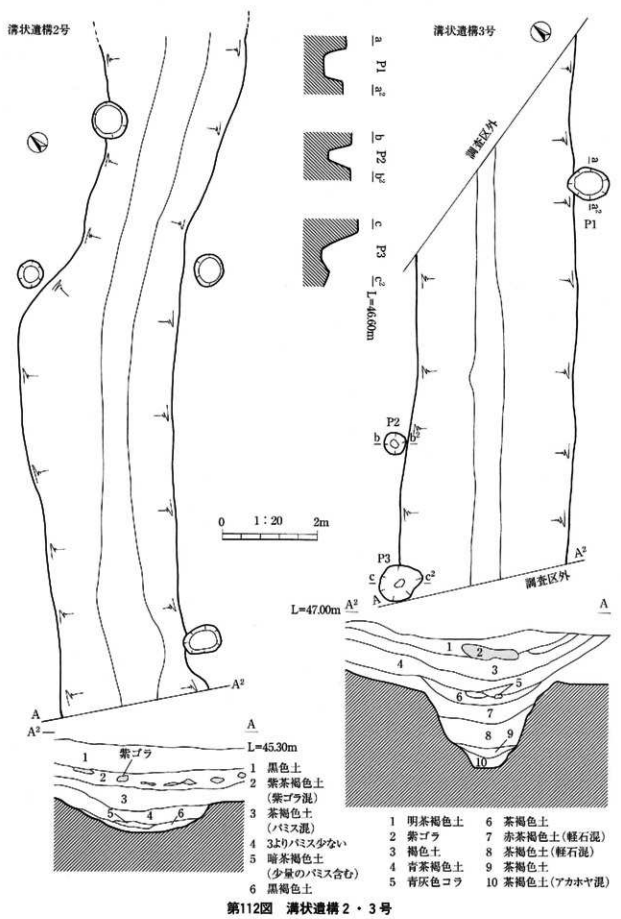




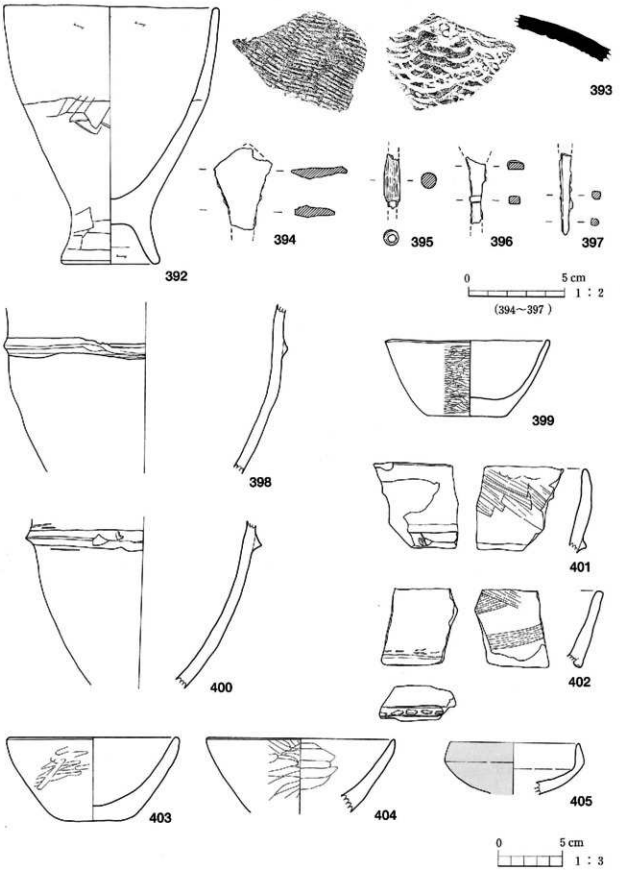


1　茶褐色土（軽石混）
2　黒褐色土 1より軽石少ない
3　アカホヤ火山灰（二次）
4　黒褐色土 3よりやや暗い褐色土
5　茶褐色土（軽石混・粒子大）
6　アカホヤ火山灰（二次）
7　明茶褐色土（軽石混）

第111図　溝状遺構 1 号



第112図　溝状遺構2・3号



第113図　溝状遺構１～３号出土遺物

2.3cm程で厚手である。430は単孔式の底部片で復元径8.2cmを測る。立ち上がり付近の両面に指頭痕が観察できる。431は単孔式の胴部下半から底部にかけての破片で，復元径11.5cmである。431・432ともヘラ状のナデ痕とヨコナデがみられる。

432～437は壺形土器である。432は口縁端部を一部欠損するがほぼ完全品である。口径19.5cm，器高47.7cmを測る。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり，頸部の屈曲も明瞭ではない。胴部は卵倒形を呈し底部は安定感があってやや丸みを帯びる。433は頸部付近の破片である。突帯上に竹管状の刺突文が施される。外面ヘラミガキ，内面ナデである。434は頸部から胴部片で接合痕が明瞭である。外面にはヘラミガキが施されるが剥落が激しい。内面はヘラ痕，ナデがみられる。435・436は底部片である。435は平丸底で内外面ともヘラナデである。436は丸底で外面はナデ，内面がヘラナデである。437は黒色を呈する壺形土器である。口径18.8cm，胴部径25.0cmを測る。口縁部は頸部から直線的に外へひらき，口唇端は丸くおさまる。頸部には一端面を形成し屈曲して胴部へ向かう。器面調整は外面全体にヘラミガキ，口縁部内面に入念なヘラミガキが施される。内面の頸部付近から胴部上半はヘラ痕が残る。接合痕が明瞭である。

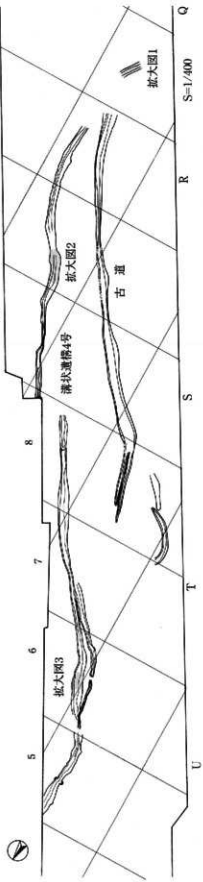
438は脚台が付く鉢形土器である。口径15.5cm，器高14.8cmである。直線的に立ち上がる脚部に丸味のある胴部がつく。器面にヘラミガキが施されるが一部にヘラケズリ痕が残る。439は平底の鉢形土器で，口径18.2cm，器高17cmを測る。底部立ち上がり付近でややくびれた後，緩やかに立ち上がる器形で口縁端部はわずかに外傾する。口縁部内外面はヨコナデ，外面にはやや粗いヘラケズリがみられる。

440～442は鉢形土器とした。440は頸部で屈曲する器形である。頸部から胴部の外面と口縁部内面にヘラミガキ，口縁部外面と頸部以下の内面にヨコナデがみられる。441は口径18.5cm，器高11.9cm，442は口径17.2，器高8.1cmを測る。調整は441が内外面ともヘラミガキ，442が外面ヘラケズリ後ナデ，内面ナデである。443～446は椀形土器とした。443は口径11.1cm，器高5.4cmでヘラケズリ後ミガキが施されていると思われるが不明瞭である。444は口径12.cm，器高6.4cmを測る。外面はヘラミガキが施されるが胴部下半は不明瞭である。内面はナデである。445は口縁部外面にナデ，胴部にヘラミガキ，内面はヨコナデがみられる。446は口径13.3cm，器高5.9cmを測る。外面にヘラミガキ，内面はナデである。448は須恵器で提瓶の可能性がある。

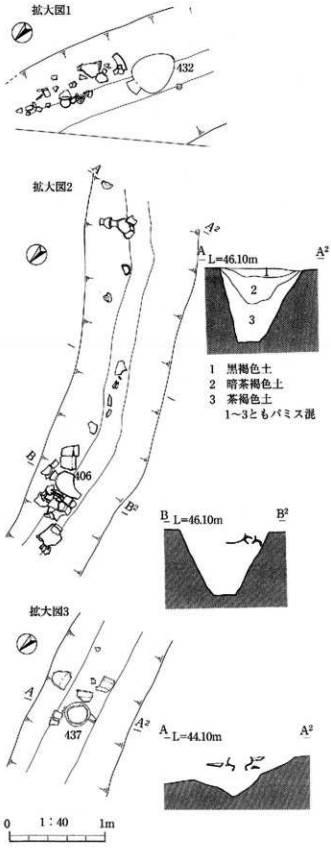
449は須恵器の坏蓋で，径11.6cm，器高3.6cmを測る。450は須恵器坏で立ち上がりは大きく内傾し端部は丸くおさまる。受け部も内傾する。径13.0cm，器高3.3cmを測る。451は須恵器坏で口縁部は途中で屈曲し内傾しながら立ち上がる。内面にヘラ状工具による「×」が刻まれている。口径14.6cm，器高5.9cmある。452は須恵器の平瓶で口径は11.8cmある。胴部には把手がつき，内外面ともロクロ痕が明瞭である。453～456は須恵器甕である。453は口縁部で，櫛描きの波状文がみられる。454・455は外面に平行のタタキ痕，内面に同心円状の当て具痕が残る。456は外面にナデ調整が行われ，外面には同心円状の当て具痕がみられる。

457は敲石とした。長軸の一端と側縁部に剥離痕が認められる石器である。458は楔形石器としたもので両側縁部に剥離痕が残る。砂岩製である。

459～463は鉄製品である。459・460は鉄鏃である。459はいわゆる圭頭鏃である。460は頸部～茎部である。461は刀子である。先端部と基部を欠損する。462は鉇である。463は鉄製鈴である。鈴



第114図　溝状遺構4号・古道位置図



第115図　溝状遺構4号

体は球形を呈し，腹部に鍔状の突帯がつく。頂部には方形の鈕がつき円形の鈕孔が穿たれている。丸はチャート製の小礫が利用されているようである。正面幅4.3cm，側面幅4.2cm，高さ5.5cm，鈴体高4.0cmを測る。

2　出土遺物（第124図～第130図）

464～484は甕形土器である。464は口縁部が外へひらき胴部から直線的に立ち上がる器形で，胴部には指頭痕が残る突帯がめぐる。突帯は収束せず段違いとなる。内面には接合痕が明瞭に残る。口縁部から胴部下半にかけてススが付着している。465は内湾する口縁部を有するもので胴部に連続した刻み目をもつ突帯がめぐる。脚台は小さめのものがつくものと思われる。466～467は外反する口縁部，468～469は直立する口縁部，470～472はやや内湾する口縁部片である。466・470・472は棒状工具による斜位の刻み目をもつ突帯がつき，467・469は菱形の刻み目，471には突帯の上下に指頭による整形痕がみられる。468も指頭痕がみられるが一部を口縁部方向にはね上げてアクセントをつけている。473～476は外反する口縁部である。473～475は口縁部と胴部の境に段を形成する。473は復元口径30.6mを測り，口縁部外面にナデ，内面にヘラ状のナデがみられる。器外面全体にススが付着している。474・475は口縁部外面にハケ状のかき上げがみられ，その後口縁部内外面にヨコナデが行われている。476は外面にヘラ状のナデ，内面にナデがみられる。477～483は甕形土器の脚部とした。484は胴部に突帯をもたない甕形土器で，内外面ともヘラ状のナデがみられる。

485は甕形土器の底部である。復元径7.4cmを測る。内外面とも指頭状のナデ痕がみられる。286は口縁部は内湾しながら立ち上がり端部がやや外反する。胴部外面はヘラナデ突帯の上下にヨコナデがみられ，甕形土器の可能性がある。487は内湾する口縁部で内外面ともヘラナデが施される。488・489は甕形土器ある。488は多孔式の底部片で少なくとも6か所の小円孔が確認できる。焼成前に棒状工具の刺突によって穿孔されている。489は単孔式のもので，接合痕やハケ状の調整痕が明瞭である。

490・491は蓋形土器である。490は径28.0cm，器高9.7cmを測る。胴部下端で屈曲し，外反して底面に至る。端部は平坦に仕上がる。外面はヘラナデとナデ，内面はハケとナデがみられる。491は小型の蓋形土器で，頂部に摘みがつくものと思われる。外面は指頭によるナデ，内面はナデである。492～517は壺形土器である。492～497は口縁部片である。492は外反しながら立ち上がるもので接合線が明瞭である。調整はヨコナデである。493はくの字状の口縁部で口唇端部は平坦となる。器面調整は外面がヘラナデ，内面がナデである。496・497は直線的に外反するもので，外面にハケ，内面にナデがみられる。495は小型丸底壺の口縁部，498は口縁部～胴部である。調整は内外面とも丁寧なナデが施されている。498は胴部下半にススが付着している。499・500は胴部の最大径付近に刻み目のある突帯がめぐるもので突帯の上下はナデがみられる。499は内外面にハケ，内面の一部に指頭痕がある。500は外面をナデ，内面にハケ痕が残る。501は頸部付近の破片で外面に波状の沈線が4条施されている。503～507は胴部に貼り付けられる突帯部分である。503は断面台形状の突帯に棒状工具による刻みが施される。器面調整は外面がハケ，内面がハケ後ナデである。504は断面三角形の突帯上に棒状の工具を縦位に押圧したもので，内外面ともナデ調整である。505～507はいわゆる幅広の突帯部分である。505・506はヘラ状工具によるハの字状の沈線文間に斜位の沈線

文と半裁竹管文が施されるものである。507は半裁竹管文のみである。508～517は壺形土器の底部と思われる。形態は，508～513がほぼ平底，515～517が丸底，514は尖底である。509・511・512は底部立ち上がり付近がわずかにくびれている。

518～524は鉢形土器として分類した。518～521は口縁部である。522～524は底部である。524は平底となる。522・523は甕形土器の底部の可能性もある。

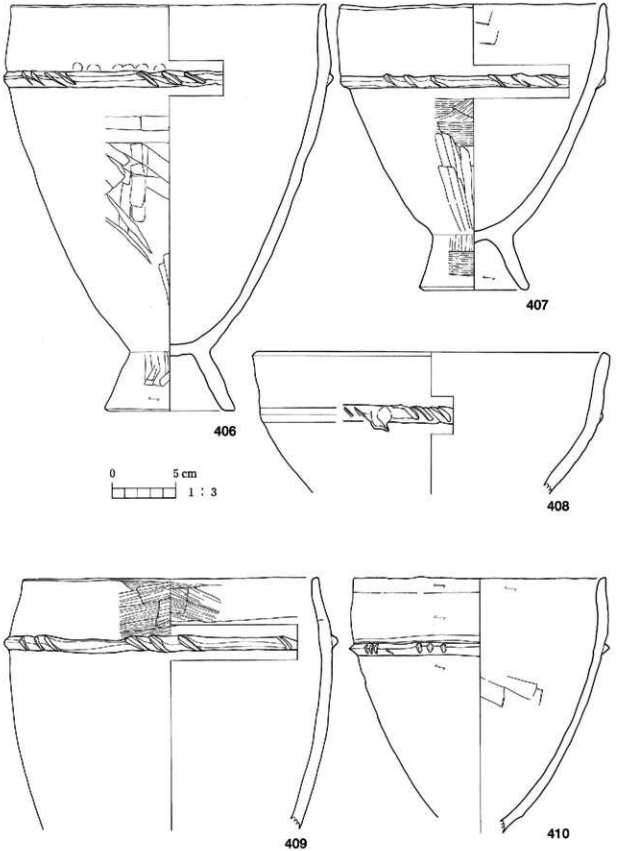
525～529は高坏形土器である。525は坏部を欠損する。にぶい黄褐色を呈し硬質である。本遺跡から出土した他の高坏形土器とは明らかに特徴が異なる。脚部は途中から緩やかに外反し端部は丸くおさまる。526は坏部で途中で屈折し外反するものである。527～529は脚部である。527は裾部が外へひろがるタイプで外面は丁寧なナデがみられる。528・529は円筒状の脚部で裾部が外へ折れ曲がるものと思われる。

530～535は坩形土器である。530・532・535が丸底，533は平底を呈する。530は胴部外面がヘラミガキ，口縁部と内面にナデがみられる。536は手つくね土器である。

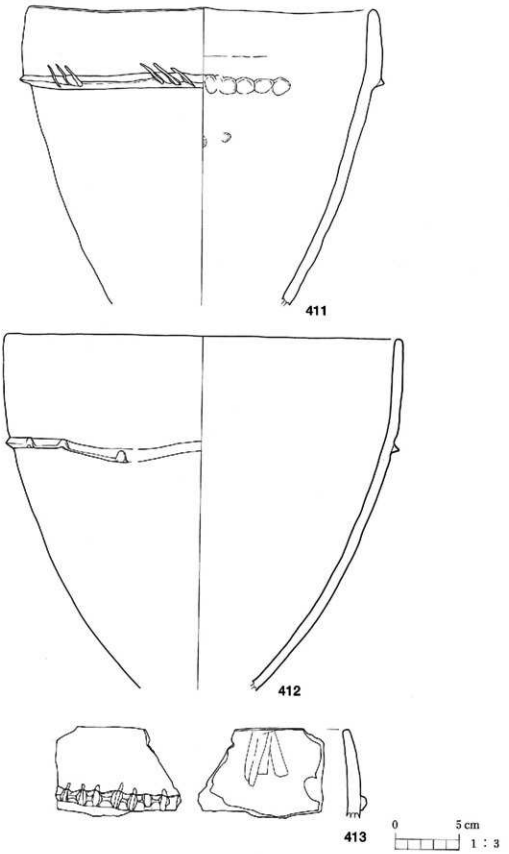
537～546は鉢形土器とした。537・541・542・544～546の外面にはヘラミガキが施される。538・539・543の外面はヘラナデである。543の内面にはヘラ状工具によって「×」が刻まれる。

547は須恵器坏で内傾しながら立ち上がり端部も内傾する。受け部は平坦となる。548・549は提瓶，550・551は須恵器甕の口縁部である。552は平瓶の口縁部である。

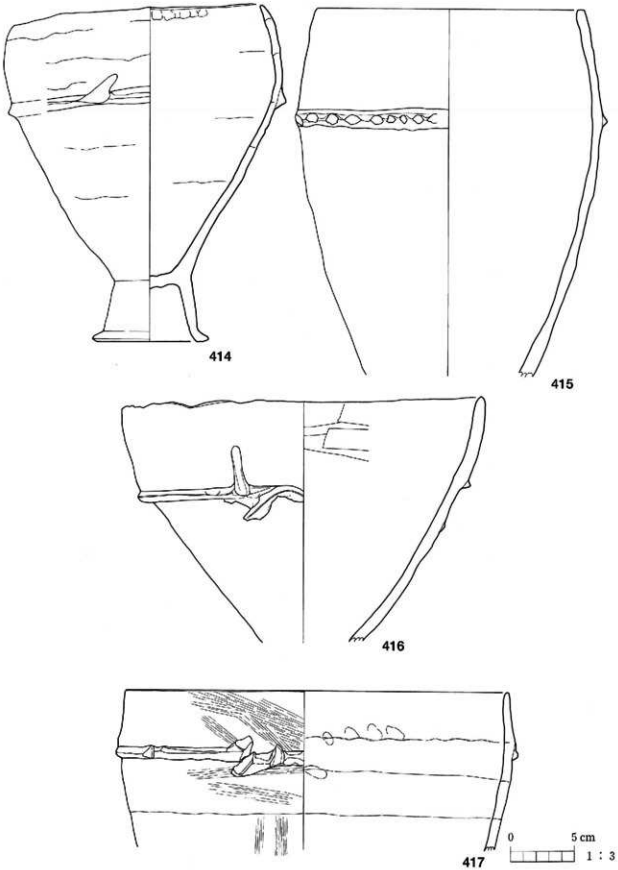
554～556は鉄鏃である。554は圭頭鏃である。555は刃部を，556は刃部と茎部を欠損している。557は鉄製の束である，558は用途不明の土製品，559・560は弥生時代の土器である。断面三角形の突帯が3条あり，突帯上にヘラ状工具による刻み目が施される。



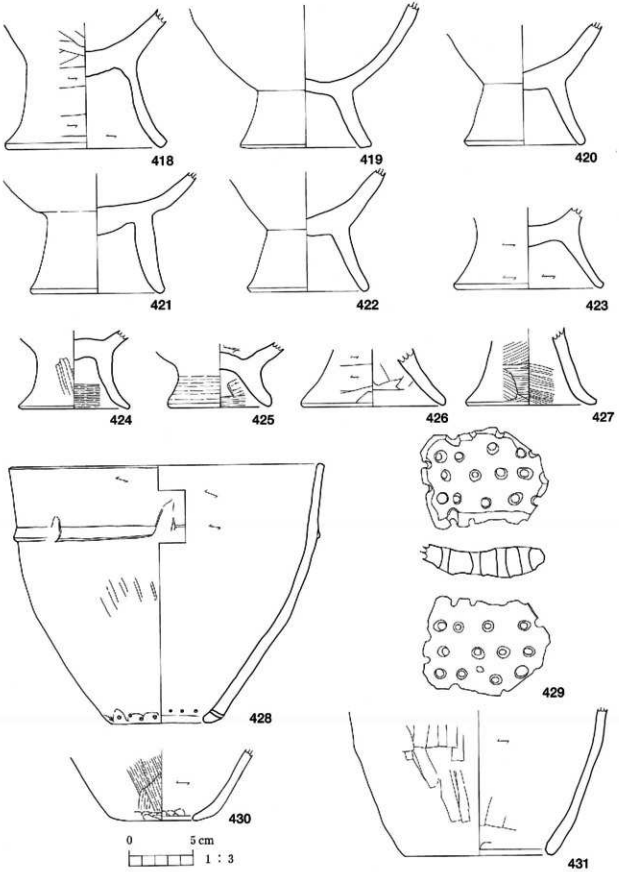
第116図　溝状遺構４号出土遺物１



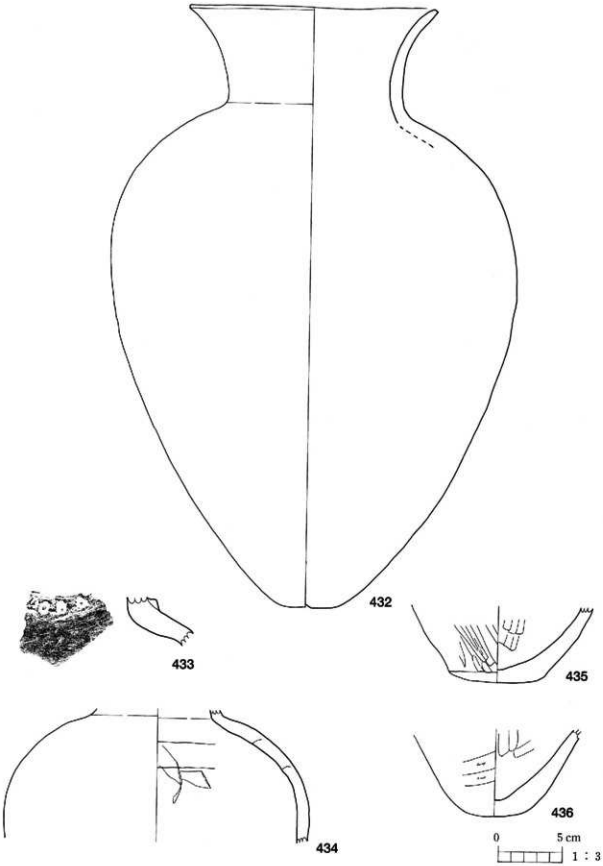
第117図　溝状遺構４号出土遺物２



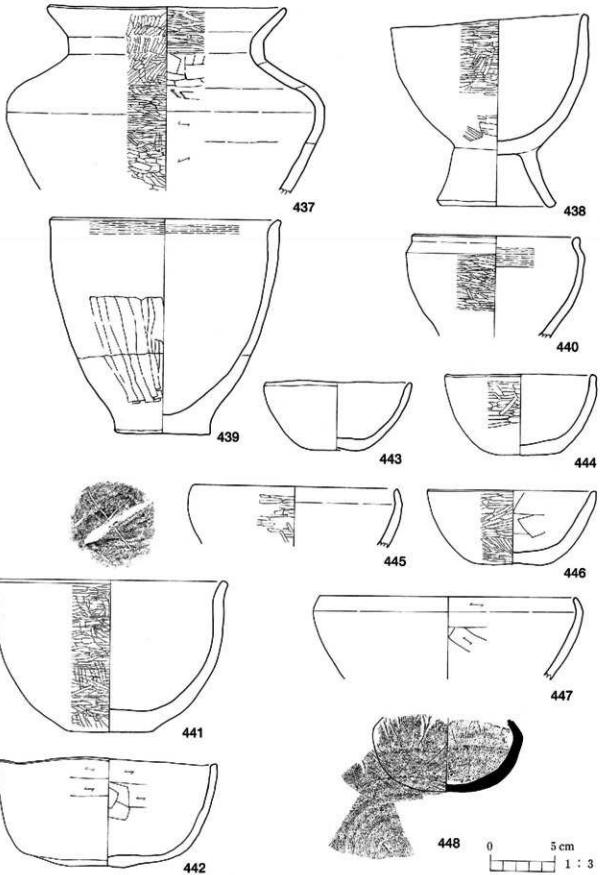
第118図　溝状遺構４号出土遺物３



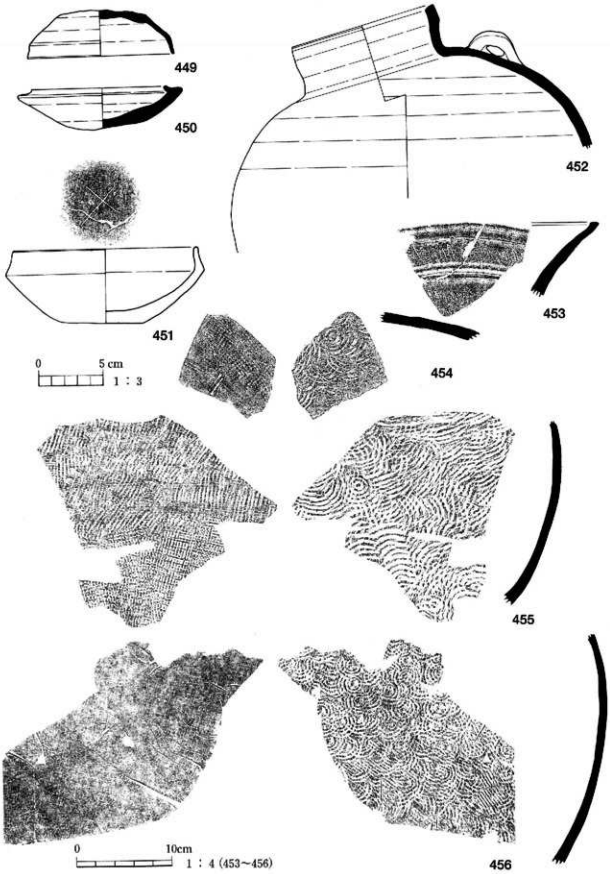
第119図　溝状遺構 4 号出土遺物 4



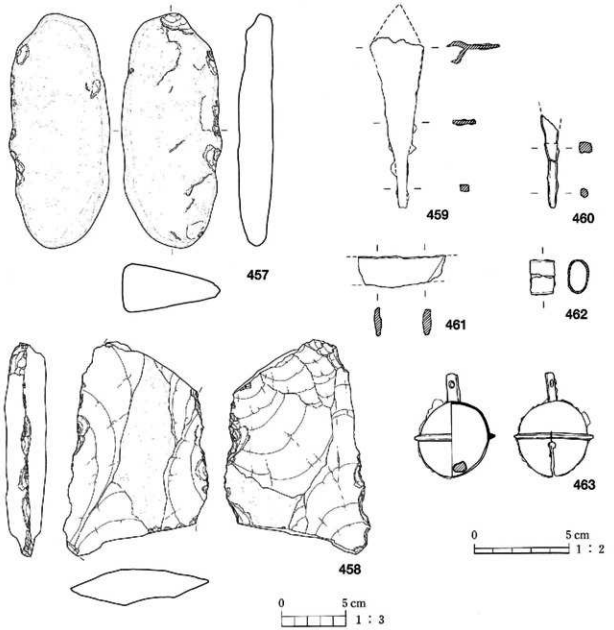
第120図　溝状遺構4号出土遺物5



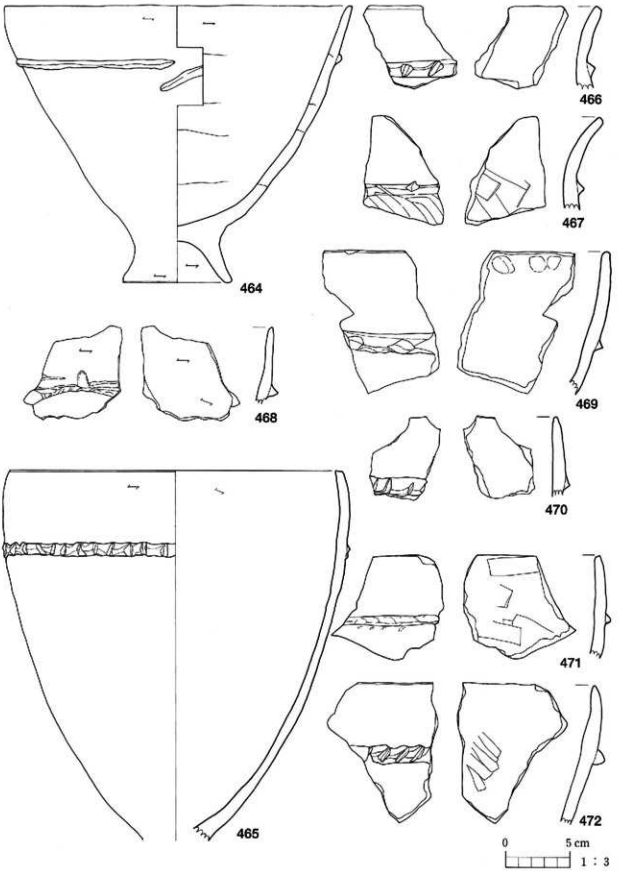
第121図　溝状遺構４号出土遺物６



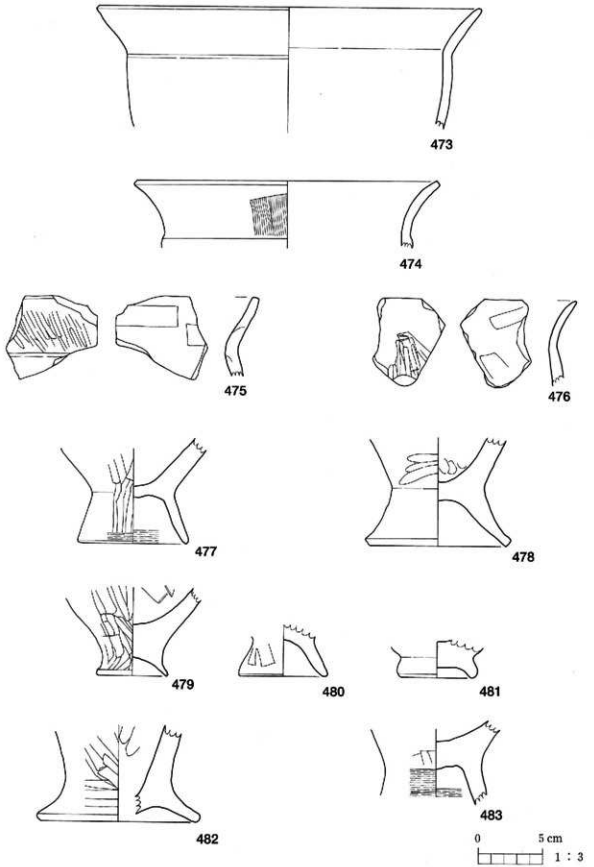
第122図　溝状遺構4号出土遺物7



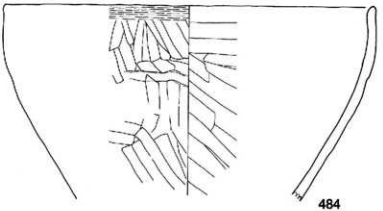
第123図　溝状遺構４号出土遺物８

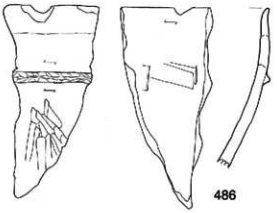


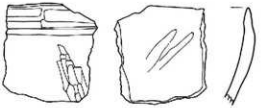
第124図　Ⅳ層出土遺物1

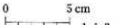


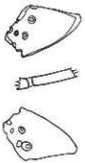
第125図　Ⅳ層出土遺物２

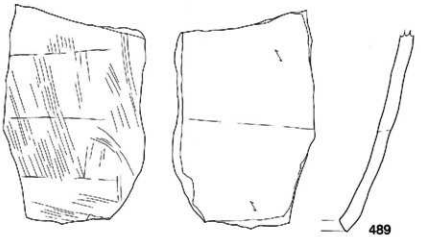




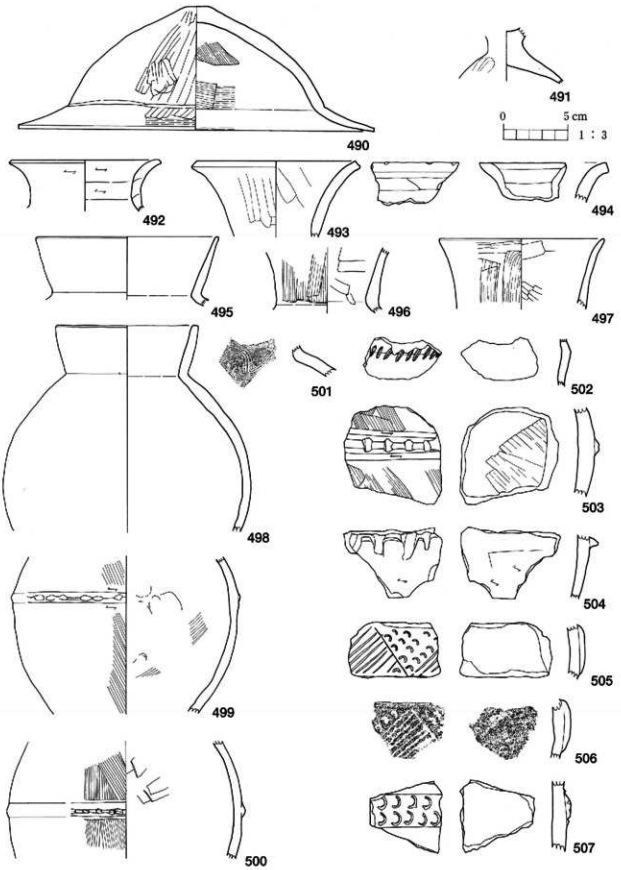




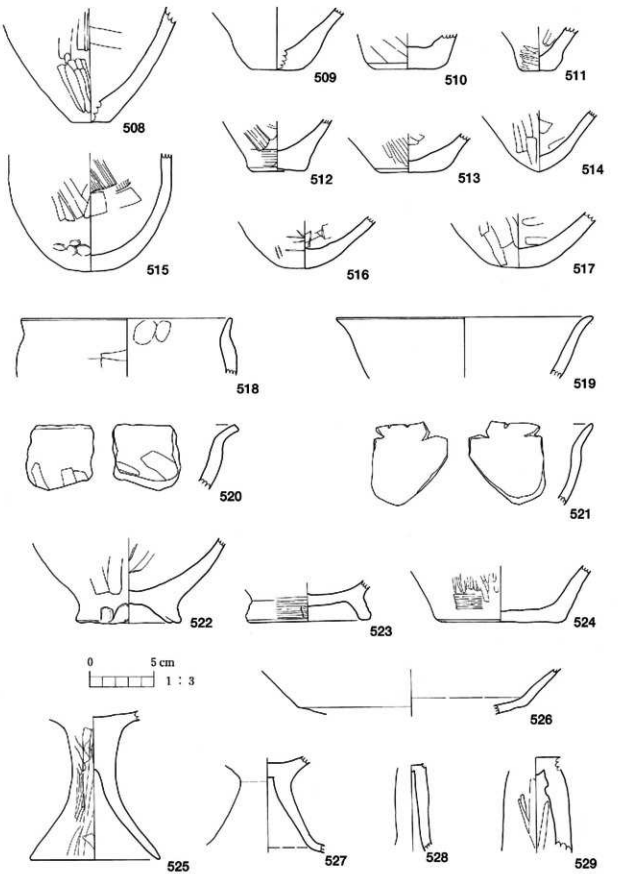




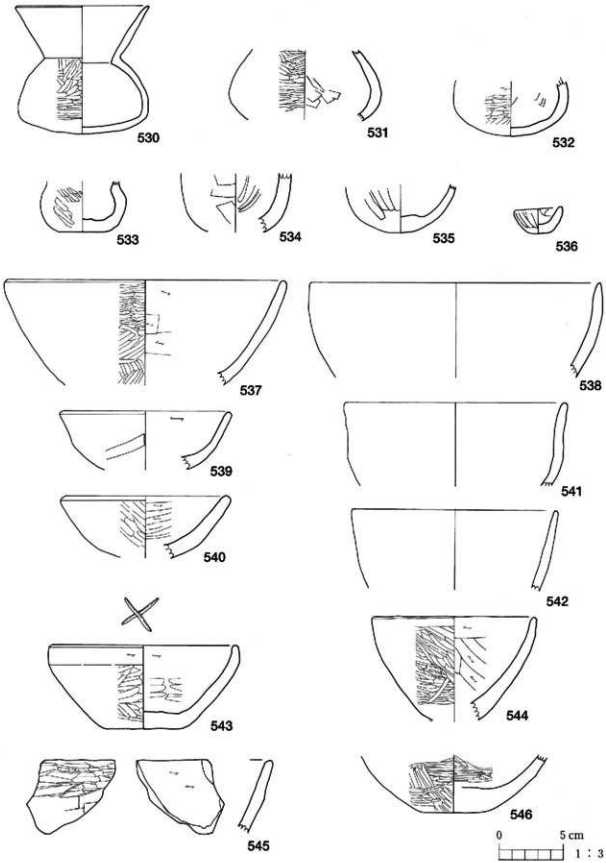
第126図　Ⅳ層出土遺物3



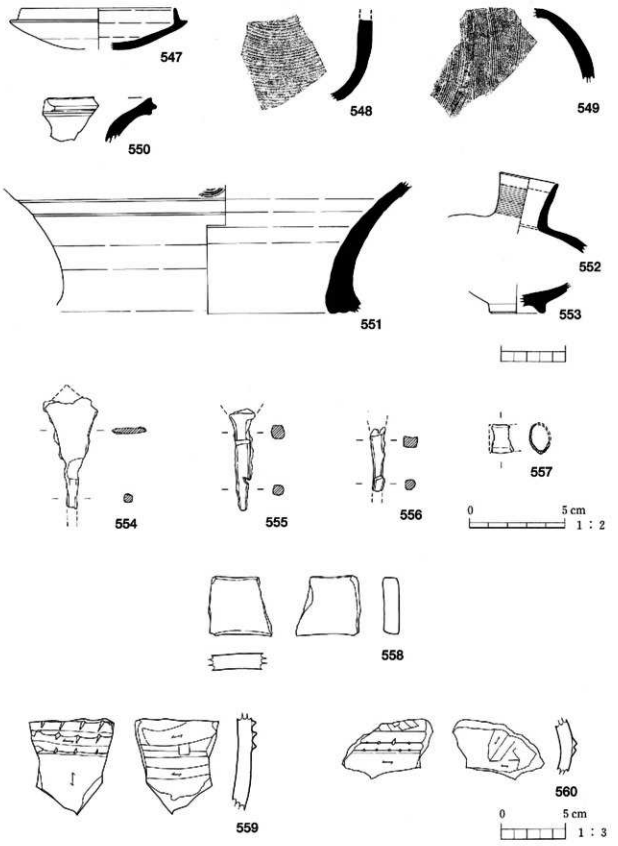
第127図　Ⅳ層出土遺物4



第128図　Ⅳ層出土遺物5



第129図　Ⅳ層出土遺物6



第130図　Ⅳ層出土遺物７ほか

第16表　遺構内出土遺物観察表１

図No.	図面番号	器種	部位	遺構	色調		胎土	焼成	文様・器面調整等
					外面	内面			
52	266	甕形土器	口縁～胴部	1号住居	にぶい黄橙	明赤褐	長石・石英	良好	ヘラケズリ・ハケ・ナデ
	267	甕形土器	胴部		にぶい橙	にぶい褐	長石・金色雲母・砂粒	良好	突帯・ヘラケズリ・ナデ
53	268	壺形土器	胴部～底部		にぶい褐	にぶい橙	石英・黒粒多・白色粒	良好	ヘラナデ・ナデ
	269	高坏形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい赤褐	長石・石英・黒粒	良好	ヘラミガキ
	270	壺形土器？	底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英・赤粒	良好	ナデ
	271	手づくね土器	胴部～底部		灰黄褐	灰褐	石英・黄白砂・茶粒	普通	指頭痕
56	272	壺形土器	口縁～胴部	2号住居	橙	にぶい黄橙	雲母・石英・黄白砂	普通	ナデ
	273	甕形土器	胴部～脚部		橙	橙	長石・石英	良好	ハケ・ナデ
57	274	壺形土器	完形		にぶい褐	明黄褐	長石・石英	良好	ナデ
	275	甕形土器	完形		にぶい赤褐	にぶい橙	長石・石英	良好	ヘラナデ・ナデ
	276	高坏形土器	坏部～脚部		にぶい褐	にぶい橙	長石・石英	良好	ヘラミガキ・ナデ
	277	高坏形土器	脚部		にぶい橙	にぶい橙	長石・石英・茶粒	良好	ナデ・ヘラケズリ
	278	高坏形土器	坏部		明赤褐	橙	長石	良好	ヘラケズリ・ナデ
60	280	甕形土器	口縁～胴部	3号住居	にぶい橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	良好	ヘラケズリ・ナデ
64	283	甕形土器	口縁～胴部	4号住居	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石・白砂	普通	ナデ
	284	甕形土器	胴部～脚部		にぶい黄橙	にぶい橙	長石・石英・茶粒	良好	ナデ
65	286	高坏形土器	脚部		浅黄橙	にぶい黄橙	石英・白砂・黄橙砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
69	288	壺形土器	口縁部～頸部	5号住居	橙	にぶい黄橙	雲母・長石	普通	ナデ・ヘラミガキ
	289	坩形土器	完形		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・白砂	普通	ヘラミガキ・ナデ
	290	壺形土器	完形		にぶい橙	明赤褐	石英・白砂	良好	ナデ
	291	高坏形土器	坏部		橙	にぶい橙	雲母・長石・石英・茶粒	良好	ヘラミガキ・ナデ
	292	高坏形土器	脚部		にぶい赤褐	にぶい赤褐	長石・石英・茶粒	良好	ヘラミガキ
71	293	壺形土器	底部	6号住居	にぶい褐	暗灰	石英・白砂	普通	ヘラケズリ・ナデ
	294	高坏形土器	脚部		にぶい赤褐	にぶい赤褐	石英・白砂・黄橙砂	良好	ヘラミガキ・ハケ
75	295	壺形土器	口縁部～頸部	8号住居	にぶい橙	にぶい橙	長石・石英	普通	ナデ
	296	鉢形土器	口縁～胴部		にぶい黄橙	橙	長石・石英・茶粒	良好	ハケ・ヘラケズリ
76	297	坩形土器	口縁～胴部		オリーブ黒	オリーブ黄	黒粒	良好	ヘラミガキ・ナデ
	298	甕形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい橙	長石・石英・茶粒	普通	ハケ・ナデ・指頭痕
	299	甕形土器	脚部		にぶい黄橙	橙	雲母・長石	普通	ナデ
	300	甕形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石	普通	ナデ
80	305	壺形土器	口縁～胴部	9号住居	黒褐	黒	白砂・黒粒	不良	ヘラミガキ・ナデ
	306	甑形土器	底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金雲・黒砂	良好	ヘラナデ・ナデ
	307	手づくね土器	完形		浅黄	浅黄	雲母・白砂	良好	指頭痕
	308	鉢形土器	完形		黒褐	オリーブ黒	白砂・黒粒	普通	ヘラミガキ・ナデ
81	309	須恵器甕	胴部		灰	灰白	長石	良好	平行タタキ・同心円状当て具痕
	310	須恵器甕	胴部		灰	灰	長石	良好	平行タタキ・同心円状当て具痕
84	316	甑形土器	完形	10号住居	にぶい橙	にぶい橙	雲母・長石・石英	良好	ナデ
	317	壺形土器	胴部～底部		にぶい黄橙	にぶい黄	石英	普通	ヘラケズリ・ハケ
	318	鉢形土器	脚部		にぶい赤褐	にぶい黄橙	雲母・長石	良好	ヘラミガキ・ナデ
	319	壺形土器	胴部		にぶい黄橙	にぶい橙	雲母・白砂・褐砂	良好	ハケ・ナデ
86	324	甕形土器	口縁部	11号住居	にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・白砂	良好	ナデ
	325	甕形土器	胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石・白砂	良好	ナデ
87	326	須恵器平瓶	完形		灰	灰	石英・長石・白砂	良好	ナデ
	327	坩形土器	底部		暗灰	にぶい黄	石英・白砂	良好	ヘラミガキ
	328	坩形土器	口縁～胴部		にぶい黄橙	にぶい橙	石英・白砂・黒粒	良好	ヘラミガキ・ナデ
89	331	甕形土器	口縁～胴部	13号住居	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石	良好	ナデ
	332	甑形土器？	口縁～胴部		にぶい褐	にぶい褐	長石・石英・黒粒	良好	ナデ
	333	甑形土器	胴部～底部		にぶい褐	にぶい褐	石英・白砂	普通	ナデ
	334	手づくね土器	完形		にぶい橙	にぶい褐	白砂	普通	指頭痕
91	336	甕形土器	口縁～胴部	14号住居	にぶい黄褐	にぶい橙	雲母・白砂	普通	ハケ
	337	甕形土器	口縁～胴部		黄褐	暗灰黄	雲母・長石	普通	ナデ・ハケ
	338	甑形土器	頸部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・白砂	普通	ナデ
	339	壺形土器	頸部		黒	灰オリーブ	雲母・長石	良好	ヘラミガキ・ハケ
	340	甕形土器	脚部		にぶい赤褐	にぶい黄	石英・白砂	普通	
	341	鉢形土器	口縁部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石・白砂	普通	ハケ・ナデ・スス付着
	342	鉢形土器	胴部～脚部		暗赤褐	褐色	石英・カクセン石・白砂	良好	ヘラミガキ

第17表　遺構内出土遺物観察表２

図No.	図面番号	器種	部位	遺構	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	文様・器面調整等
93	344	壺形土器	口縁～胴部	16号住居	にぶい橙	橙	長石・石英・黄白砂	良好	ナデ
	345	模恵器提瓶	口縁部		灰黄	灰白	長石・石英	良好	ナデ
98	348	壺形土器	完形	18号住居	黄橙	にぶい黄橙	石英・白砂	普通	ハケ・ナデ・スス付着
101	353	壺形土器	口縁～胴部	19号住居	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英・白砂	良好	ナデ
	354	壺形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英・白砂	良好	ヘラケズリ・ナデ
	355	高坏形土器	坏部		にぶい赤褐	浅黄	雲母・長石	良好	ヘラナデ・ナデ
	356	高坏形土器	坏部		にぶい赤褐	にぶい褐	石英・黄白砂	良好	ヘラミガキ・ヘラナデ
	357	高坏形土器	脚部		明赤褐	にぶい橙	石英・白砂	良好	ヘラナデ・ナデ
	358	高坏形土器	脚部		明赤褐	にぶい橙	金色雲母・白砂	良好	ナデ
	359	手づくね土器	口縁～胴部		灰白	灰白	白砂・石英	良好	指頭痕
	360	手づくね土器	完形		浅黄	浅黄	白砂	良好	指頭痕
104	361	高坏形土器	坏部～脚部	21号住居	にぶい赤褐	にぶい褐	石英・白砂・黄橙砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
	362	高坏形土器	坏部		にぶい赤褐	にぶい赤褐	長石	良好	ヘラミガキ
106	363	壺形土器	口縁～胴部	22号住居	にぶい赤褐	橙	長石・石英・白砂	良好	ナデ
	364	甕形土器	口縁部		にぶい赤褐	にぶい赤褐	長石・石英	良好	ナデ
	365	壺形土器	口縁～胴部		にぶい黄橙	にぶい黄	雲母・長石・石英・白砂	良好	ナデ
107	366	壺形土器	口縁～胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・白砂・橙砂	良好	ナデ
	367	壺形土器	口縁～胴部		にぶい橙	にぶい褐	雲母・長石・茶粒	良好	ナデ
	368	壺形土器	頸部		にぶい黄橙	にぶい橙	石英・長石・白砂	良好	ナデ
	369	壺形土器	口縁部		にぶい赤褐	にぶい橙	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ
	370	壺形土器	脚部		橙	橙	長石・石英・茶粒	良好	ハケ・ナデ
	371	壺形土器	口縁～頸部		黒	にぶい黄橙	長石・白砂・橙砂	普通	ヘラナデ・ナデ
	372	壺形土器	口縁部		にぶい褐	にぶい褐	雲母・長石・石英	良好	ナデ
	373	鉢形土器	口縁部		にぶい橙	黒褐	雲母・石英	良好	ナデ
	374	鉢形土器	底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英・茶粒	良好	ヘラナデ・ナデ・指頭痕
	375	高坏形土器	脚部		明赤褐	にぶい赤褐	石英・白砂	普通	ヘラミガキ
	376	手づくね土器	口縁～底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石・白砂	良好	指頭痕
110	379	甕形土器	口縁～胴部	23号住居	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・長石・白砂	普通	ナデ
	380	甕形土器	口縁～胴部		灰黄褐	にぶい黄橙	長石・石英・黄橙砂	普通	ナデ
	381	甕形土器	口縁部		にぶい橙	にぶい橙	石英・長石・白砂	良好	ナデ
	382	壺形土器	胴部		にぶい褐	にぶい赤褐	長石・石英・黄白砂	良好	ヘラナデ・ナデ・指頭痕
	383	甕形土器	脚部		にぶい赤褐	にぶい褐	雲母・長石・石英	良好	ヘラナデ
	384	壺形土器	脚部		にぶい褐	にぶい黄橙	雲母・長石・茶粒	良好	ナデ・ヘラナデ・指頭痕
	385	甕形土器	底部		にぶい赤褐	橙	石英・茶粒	普通	ヘラナデ・指頭痕
	386	壺形土器	底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・金雲・黄白砂・黒粒	普通	ナデ・指頭痕
	387	高坏形土器	坏部		にぶい赤褐	にぶい橙	長石・石英・白砂	良好	ナデ
	388	高坏形土器	脚部		にぶい褐	にぶい黄橙	長石・石英・白砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
	389	高坏形土器	脚部		にぶい赤褐	褐	金色雲母・長石・黒粒	良好	ヘラミガキ・ヘラケズリ
	390	甕形土器	脚部～底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	普通	ナデ・指頭痕
113	392	甕形土器	完形	1号溝	明黄褐	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	良好	ナデ・スス付着
	393	須恵器甕	胴部		灰	灰	長石	良好	平行タタキ・同心円状当て具痕
	398	甕形土器	胴部	2号溝	にぶい橙	にぶい赤褐	金色雲母・石英・白砂	良好	ナデ
	399	鉢形土器	完形		にぶい赤褐	にぶい褐	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ
	400	甕形土器	口縁部	3号溝	褐	にぶい赤褐	金色雲母・長石・茶粒	良好	ヘラミガキ・ナデ
	401	甕形土器	口縁部		橙	黄灰	長石	普通	ナデ・ハケ
	402	甕形土器	口縁部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英・茶粒	普通	ナデ・爪痕・突帯状指頭痕
	403	鉢形土器	完形		にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英・白砂	普通	ヘラミガキ
	404	鉢形土器	口縁～胴部		灰褐	にぶい黄橙	長石・カクセン石・白砂	良好	ヘラケズリ
	405	环形土器	口縁～胴部		橙	にぶい黄橙	長石・石英・黄白砂	良好	外面橙色顔料塗布
116	406	甕形土器	完形	4号溝	にぶい橙	橙	金色雲母・長石・石英	良好	ヘラナデ・指頭痕・ナデ
	407	壺形土器	完形		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ハケ・ナデ
	408	甕形土器	口縁～胴部		灰白	灰白	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	409	壺形土器	口縁～胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	良好	ハケ・ナデ
	410	甕形土器	口縁～胴部		灰黄褐	にぶい黄褐	長石・石英・白砂	普通	ナデ

第18表　遺構内出土遺物観察表３

図No.	図版番号	器種	部位	遺構	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	文様・器面調整等
117	411	甕形土器	口縁～胴部	4号溝	にぶい赤橙	にぶい赤橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ・指頭痕
	412	壺形土器	口縁～胴部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	413	甕形土器	口縁部		にぶい橙	にぶい橙	石英・赤橙砂・茶粒	良好	ナデ・ヘラナデ
118	414	壺形土器	完形		にぶい橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	良好	ナデ・指頭痕
	415	甕形土器	口縁～胴部		にぶい赤褐	にぶい赤褐	金色雲母・長石・石英	良好	ナデ
	416	壺形土器	口縁～胴部		にぶい橙	にぶい褐	金色雲母・長石・石英	良好	ナデ・ススけ若
	417	甕形土器	口縁～胴部		浅黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・石英・茶粒	普通	ナデ
119	418	壺形土器	脚部		にぶい橙	にぶい黄橙	石英・白砂	良好	ナデ
	419	甕形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	420	壺形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	421	甕形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	422	壺形土器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ
	423	甕形土器	脚部		にぶい黄褐	にぶい褐	金色雲母・長石・石英	良好	ナデ
	424	壺形土器	脚部		浅黄	黒	長石・石英・雲母	普通	ナデ・ヘラナデ・ヘラミガキ
	425	壺形上器	脚部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・石英・茶粒	普通	ナデ・ヘラケズリ
	426	甕形土器	脚部		にぶい黄	にぶい黄橙	長石・石英	普通	ナデ
	427	壺形上器	脚部		にぶい黄	にぶい黄橙	金色雲母・白砂・茶粒	良好	ナデ
	428	甑形土器	完形		橙	明赤褐	長石・石英・カクセン石・黒砂	良好	ナデ
	429	甑形土器	底部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・白砂	良好	ナデ
	430	甑形土器	底部		にぶい黄橙	浅黄	雲母・白砂・黒砂	良好	ナデ・指頭痕
	431	甑形土器	胴部～底部		橙	橙	雲母・黄白砂・黒砂	普通	ヘラナデ・指頭痕・ナデ
120	432	壺形土器	完形		橙	にぶい橙	石英・白砂	良好	ナデ
	433	壺形土器	頸部		にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英・白砂・黒曜石？	良好	ヘラミガキ・ナデ
	434	壺形土器	頸部～胴部		黄褐	にぶい黄	石英・黄白砂	良好	ヘラミガキ・ヘラナデ
	435	壺形土器	底部		橙	にぶい橙	長石・石英・黄橙砂	良好	ヘラケズリ・ナデ
	436	壺形土器	底部		にぶい黄	橙	雲母・長石・茶粒	良好	ナデ・ヘラケズリ
121	437	壺形土器	口縁～胴部		黒褐	灰オリーブ	雲母・白砂・黒粒	良好	ハケ・ヘラミガキ
	438	鉢形土器	完形		橙	明褐	長石・石英・茶粒	普通	ヘラミガキ・ナデ
	439	鉢形土器	完形		浅黄橙	浅黄橙	長石・石英・白砂	普通	ヘラケズリ・ナデ
	440	鉢形土器	口縁～胴部		明赤褐	にぶい赤褐	長石・石英・黒粒	良好	ヘラミガキ・ナデ
	441	鉢形土器	完形		にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英・黄白砂	良好	ヘラミガキ
	442	鉢形土器	完形		にぶい褐	黒	長石・石英・黄白砂	良好	ヘラケズリ・ナデ
	443	椀形土器	完形		にぶい黄橙	にぶい黄橙	金雲母・長石・黄白砂	良好	ヘラケズリ・ヘラミガキ
	444	椀形上器	完形		にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英・白砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
	445	椀形土器	口縁～胴部		にぶい橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	良好	ナデ・ヘラミガキ
	446	椀形上器	完形		黒褐	灰オリーブ	雲母・長石・黄白砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
	447	椀形土器	口縁～胴部		暗灰黄	黄灰	長石・石英・白砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
122	448	須恵器長頸？	胴部～底部		灰褐	褐灰	白砂	普通	
	449	須恵器坏蓋	完形		灰	灰	白砂	良好	
	450	須恵器坏	完形		灰	灰	白砂	良好	
	451	須恵器坏	完形		暗灰	暗灰黄	白砂	良好	ヘラミガキ
	452	須恵器甲瓶	口縁～胴部		灰	灰	白砂	良好	
	453	須恵器壺	口縁部		オリーブ灰	オリーブ灰	長石・白砂・茶粒	良好	櫛描き波状文
	454	須恵器甕	胴部		灰	灰	白砂	良好	平行タタキ痕・同心円状当て具痕
	455	須恵器甕	胴部		オリーブ灰	オリーブ灰	白砂	良好	平行タタキ痕・同心円状当て具痕
	456	須恵器甕	胴部		灰黄	灰オリーブ	白砂	普通	ナデ・同心円状当て具痕

第19表　Ⅳ層出土遺物観察表1

図版No.	図面番号	器種	部位	出土区	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	文様・器面調整等
124	464	変形土器	完形	－	にぶい橙	にぶい橙	金色雲母・長石・石英	普通	ナデ・ス又付考
	465	変形土器	口縁～胴部	1 T	にぶい黄橙	にぶい黄橙	金色雲母・長石・石英	良好	ナデ・ヘラナデ
	466	変形土器	口縁部	N－39	にぶい黄褐	にぶい橙	金色雲母・長石・赤粒	良好	ハケ・ナデ
	467	変形土器	口縁部	M－30	褐灰灰	灰黄褐	石英・黄橙砂・茶粒	良好	ナデ
	468	変形土器	口縁部	－	にぶい黄橙	浅黄	長石・石英	普通	ナデ
	469	変形土器	口縁部	Q－8	灰褐	にぶい褐	長石・石英	良好	ナデ・指頭痕
	470	変形土器	口縁部	6 T	にぶい黄褐	にぶい黄	長石・石英	普通	ナデ
	471	変形土器	口縁部	M－41	にぶい褐	褐	雲母・長石・石英	良好	ハケ・ナデ
	472	変形土器	口縁部	N－23	にぶい黄橙	明黄褐	長石・石英	普通	ナデ・ヘラナデ
125	473	変形土器	口縁～胴部	M－41	暗灰黄	にぶい黄褐	金色雲母・長石	普通	ナデ・ヘラナデ
	474	変形土器	口縁部	M－28	灰黄褐	にぶい黄褐	金色雲母・長石	普通	ハケ・ナデ
	475	変形土器	口縁部	6 T	にぶい赤褐	にぶい赤褐	黄橙砂・茶粒	良好	ハケ・ナデ
	476	変形土器	口縁部	M－40	にぶい褐	にぶい赤褐	雲母・茶粒	良好	ヘラナデ・ナデ
	477	変形土器	脚部	M－31	にぶい褐	黄灰	金色雲母・長石	普通	ハケ・ナデ
	478	変形土器	脚部	－	にぶい橙	にぶい褐	長石・石英・白砂	普通	ヘラナデ・ナデ
	479	変形土器	脚部	6 T	にぶい黄橙	にぶい褐	金色雲母・長石・茶粒	普通	ヘラケズリ・ナデ
	480	変形土器	脚部	M－39	橙	橙	雲母・長石・茶粒	良好	ヘラナデ・ナデ
	481	変形土器	脚部	M－39	にぶい橙	にぶい橙	雲母・長石・石英	普通	ナデ
	482	変形土器	脚部	N－35	にぶい橙	にぶい赤褐	長石・石英・茶粒・黄橙砂	良好	ヘラナデ・ナデ
	483	変形土器	脚部	－	にぶい赤褐	にぶい黄橙	雲母・長石・茶粒	普通	ナデ
126	484	甕形土器	口縁～胴部	－	暗褐	にぶい褐	雲母・長石・石英・黄橙砂	普通	ヘラナデ
	485	鉢形土器	底部	－	黒褐	にぶい褐	雲母・黄白砂・黒砂	良好	ナデ
	486	鉢形土器	口縁～胴部	－	黒褐	にぶい褐	金色雲母・長石・黄橙砂	良好	ナデ・ヘラナデ
	487	鉢形土器	口縁部	N－39	にぶい褐	にぶい赤褐	長石・石英・白砂	良好	ヘラナデ・ナデ
	488	鉢形土器	底部	－	にぶい黄橙	褐灰	長石・石英・黒砂	良好	ナデ
	489	鉢形土器	胴部～底部	－	にぶい赤橙	にぶい橙	長石・石英・白砂	普通	ナデ
127	490	壺形土器	完形	M－39	にぶい褐	にぶい赤褐	長石・石英・黄橙砂	良好	ハケ・ヘラナデ・ナデ
	491	壺形土器	頸み部～胴部	－	にぶい赤橙	にぶい黄橙	石英・白砂	良好	指ナデ・ナデ
	492	壺形土器	口縁部	M－27	明黄褐	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	良好	ナデ
	493	壺形土器	口縁部	N－38	にぶい赤橙	にぶい黄橙	雲母・長石・茶粒	良好	ヘラナデ・ナデ
	494	壺形土器	口縁部	M－39	灰褐	にぶい橙	金色雲母・長石・黄橙砂	良好	ナデ
	495	壺形土器	口縁部	G－9	黒褐	にぶい褐	金色雲母・長石	良好	ナデ
	496	壺形土器	口縁部	M－39	にぶい赤褐	にぶい赤褐	金色雲母・長石・茶粒	良好	ハケ・ナデ
	497	壺形土器	口縁部	M－39	にぶい褐	褐	金色雲母多・長石	普通	ハケ・ナデ
	498	壺形土器	口縁～胴部	1 T	にぶい褐	にぶい黄橙	石英・白砂	普通	ナデ
	499	壺形土器	胴部	M－39	灰褐	にぶい赤褐	長石・石英・白砂	良好	ナデ
	500	壺形土器	胴部	1 T	にぶい褐	にぶい赤褐	金色雲母・長石・黄白砂	良好	ハケ・ナデ
	501	壺形土器	頸部	0－14・15	黄灰	にぶい褐	雲母・長石・石英・黄橙砂	良好	櫛描き波状文・ナデ
	502	壺形土器	頸部	M－31	にぶい橙	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ・ナデ
	503	壺形土器	胴部	M－28	にぶい褐	褐	雲母・長石・石英・黄白砂	普通	ハケ・ナデ
	504	壺形土器	胴部	T－7	にぶい黄橙	にぶい橙	長石・石英	普通	ナデ
	505	壺形土器	胴部	0－14・15	にぶい黄橙	にぶい黄	雲母・石英	良好	ナデ
	506	壺形土器	胴部	V－3	にぶい黄	灰黄	長石・石英・茶粒	良好	ナデ
	507	壺形土器	胴部	T－7	褐灰	にぶい橙	金色雲母・長石・石英	良好	ナデ
128	508	壺形土器	底部	M－39	にぶい黄褐	褐	金色雲母・長石・石英	良好	ヘラナデ・ナデ
	509	壺形土器	底部	－	にぶい赤褐	黒褐	金色雲母・長石・石英	良好	ナデ
	510	壺形土器	底部	－	にぶい赤褐	明赤褐	雲母・長石・茶粒	良好	ヘラナデ
	511	壺形土器	底部	－	にぶい褐	にぶい黄橙	金色雲母・長石	良好	ヘラ状押圧？・ヘラナデ
	512	壺形土器	底部	M－25～26	にぶい橙	灰黄	長石・茶粒・黄橙砂	良好	ハケ・ナデ
	513	壺形土器	底部	N－38	にぶい褐	黒褐	長石・石英	良好	ヘラミガキ・ナデ
	514	壺形土器	底部	M－39	にぶい黄	金色雲母・長石・赤粒	良好	ヘラナデ
	515	壺形土器	底部	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	長石・石英・黄白砂	良好	ヘラナデ・指頭痕・ハケ・ナデ
	516	壺形土器	底部	N－38	にぶい黄橙	にぶい褐	長石・茶粒・黄橙砂	普通	ヘラケズリ・ナデ
	517	壺形土器	底部	－	明赤褐	にぶい橙	長石・石英・黄橙砂・茶粒	良好	ヘラナデ・ナデ
	518	鉢形土器	口縁部	M－38	灰褐	にぶい褐	雲母・長石・黄橙砂	普通	ヘラケズリ・ナデ・指頭痕
	519	鉢形土器	口縁部	M－41	褐	褐	雲母・長石	良好	ナデ
	520	鉢形土器	口縁部	－	にぶい黄橙	にぶい褐	雲母・黄白砂・茶粒	普通	ハケ
	521	鉢形土器	口縁部	N－41	にぶい橙	橙	雲母・長石	普通	ヘラナデ
	522	鉢形土器	胴部	N－14	暗灰黄	灰黄	雲母・長石	普通	ヘラケズリ・ナデ・指頭痕
	523	鉢形土器	胴部	N－34～35	にぶい黄	にぶい黄橙	雲母・長石・石英	普通	ハケ・ヘラミガキ

第20表　Ⅳ層出土遺物観察表２

図No	図面番号	器　種	部　位	出土区	色　調		胎　土	焼成	文様・器面調整等
					外面	内面			
128	524	鉢形土器	底部	O－14・15	橙	にぶい黄橙	長石・石英・茶粒	良好	ヘラナデ
	525	高坏形土器	坏部～脚部	－	にぶい黄褐	灰褐	長石・黒粒	良好	ヘラナデ
	526	高坏形土器	坏部	M－38	にぶい黄橙	明黄褐	長石・茶粒	普通	ナデ
	527	高坏形土器	脚部	M－38	にぶい黄橙	にぶい黄橙	雲母・長石・茶粒	普通	ナデ・ヘラケズリ
	528	高坏形土器	脚部	M－34～35	灰褐	にぶい橙	長石・石英・白砂	良好	ナデ
	529	高坏形土器	脚部	N－41	にぶい褐	黄褐	雲母・長石・茶粒	良好	ヘラナデ・ヘラケズリ
129	530	壺形土器	完形	1T	にぶい橙	にぶい褐	長石・石英・黄白砂	良好	ヘラミガキ・ナデ
	531	壺形土器	胴部	S－5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	茶粒	良好	ヘラミガキ・ナデ
	532	壺形土器	胴部～底部	S－5	にぶい黄橙	浅黄橙	長石・石英・黄褐砂	良好	ヘラミガキ・ヘラナデ
	533	壺形土器	胴部～底部	M－23～24	にぶい褐	にぶい褐	長石・石英・白砂	普通	ヘラミガキ・ヘラナデ
	534	壺形土器	胴部	M－40	にぶい黄橙	にぶい褐	石英・黄白砂・茶粒	良好	ヘラケズリ
	535	壺形土器	底部	O－14・15	橙	にぶい橙	長石・石英	普通	ヘラナデ
	536	手づくね土器	完形	－	にぶい褐	にぶい褐	黒粒	良好	指ナデ
	537	鉢形土器	口縁～胴部	－	灰黄褐	にぶい黄褐	金色雲母・長石	良好	ヘラミガキ・ナデ
	538	鉢形土器	口縁～胴部	N－39	にぶい褐	にぶい赤褐	雲母・長石・石英	良好	ナデ・ヘラナデ
	539	鉢形土器	口縁～胴部	－	にぶい赤褐	橙	雲母・長石・石英	良好	ナデ
	540	鉢形土器	口縁～胴部	－	黄褐	黄灰	金色雲母・長石	普通	ヘラミガキ・ナデ
	541	鉢形土器	口縁～胴部	－	黒褐	黒	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ
	542	鉢形土器	口縁～胴部	－	黒褐	褐	金色雲母・長石・茶粒	良好	ヘラミガキ
	543	鉢形土器	完形	－	にぶい黄褐	にぶい赤褐	雲母・長石・石英	普通	ヘラナデ・「×」沈線
	544	鉢形土器	口縁～底部	－	黒褐	黒褐	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ・ナデ
	545	鉢形土器	口縁部	N－40	褐	にぶい褐	雲母・長石・石英	良好	ヘラミガキ・ヘラケズリ
	546	鉢形土器	底部	－	灰オリーブ	灰	金色雲母・長石・茶粒	普通	ヘラミガキ
130	547	須恵器坏	口縁～底部	－	灰	灰	白砂	良好	
	548	須恵器提瓶	胴部	2T	灰	灰	白砂	良好	
	549	須恵器提瓶	胴部	－	灰	灰	白砂	良好	
	550	須恵器甕	口縁部	－	灰	灰オリーブ	白砂	良好	
	551	須恵器甕	口縁部	－	黄灰	黄灰	長石・茶粒	普通	
	552	須恵器平瓶	口縁～胴部	O－13	オリーブ黒	オリーブ黒	白砂	良好	
	553	須恵器	底部	－	暗灰黄	にぶい褐	黒粒	良好	
	558	土製品	?	M－40	赤褐	赤褐	金色雲母・白砂	良好	ナデ
	559	壺形土器	胴部	N－40	にぶい橙	にぶい褐	長石・石英・茶粒	良好	ナデ
	560	壺形土器	胴部	－	にぶい黄褐	にぶい黄褐	長石・石英・白砂	良好	ナデ

第Ⅳ章　発掘調査のまとめ

第１節　縄文時代

１　縄文時代早期

ここでは，土器を中心にふれる。Ⅱ類からⅦ類として分類した土器群は，従来の土器型式でいう吉田式土器の範疇に含まれるものと思われる。Ⅱ類とした一群は，これまで小牧遺跡Ⅲ類もしくは椿ノ原６類とされているものに類似する。Ⅲ類からⅦ類については，根占町大中原遺跡から良好な資料が出土しており，器形，施文方法ともに共通点が認められる。Ⅸ類は下剥峯式土器に該当すると思われるが，口縁部には桑ノ丸式に類似した文様，胴部には下剥峯式にみられる貝殻刺突文が施されているのが特徴である。本遺跡から出土した土器群は大隅半島における早期土器の研究に貴重な資料を追加したものと考えられる。

２　縄文時代晩期

小片が多く，全形を知りうる資料が少ないが，形状及び施文法において滋賀里式系土器など他地域との関連を窺わせる資料が出土している。

組織痕土器は全国的には出土例が少なく，鹿児島県や宮崎県など南九州地域で出土する遺跡数が多いことは全国の研究者の知るところである。これまで組織痕土器の器形を把握しうる良好な資料が出土した遺跡として鹿屋市榎木原遺跡，国分市上野原遺跡，末吉町桐木遺跡などがある。本遺跡では小片も含めて100点以上を確認したが，出土量としては県内でも有数のものなっている。胴部下半から底部にかけてみられるいわゆる組織痕には，編目痕・席目痕・編布痕などのバリエーションがあり，なかでも土坑１号の周辺から出土した143は，胴部下半から底部にかけて席目痕が施された完形品である。器面にススや炭化物の付着がみられない点が特徴である。

第２節　古墳時代

１　検出遺構

平成３年度から７年度の調査で計22軒の竪穴住居跡と溝状遺構４条などを確認した。本遺跡で検出した竪穴住居跡群は，出土遺物から判断すると古墳時代後期，成川式土器の笹貫期のものと考えられる。成川式土器とよばれ南九州において極めて在地性の強い一連の土器群のなかで，笹貫式期の住居の検出例は，これまで川内市成岡遺跡，同麦之浦遺跡，吹上町辻堂原遺跡，国分市城山山頂遺跡，同妻山元遺跡，高山町花牟礼遺跡，同永野原遺跡，同東田遺跡などに例がある。

本遺跡で検出した住居跡群は，住居の切り合いなどが認められることから若干の時間差が考えられるものの，主軸方向や出土した土器から判断するとほぼ同時期の住居跡群である可能性が高い。

竪穴住居跡の形状は基本的に方形で，これまで知られている遺跡と比較すると相対的に規模が大きい。全体的な規模が把握できる住居跡のうち，最も大きいものでは竪穴の一辺が約６ｍ（竪穴住居跡11号），小さいものは3.0ｍある（竪穴住居跡６号）。なお，特徴として方形の竪穴の中央部に焼土域を伴い，円形の掘り込みをもつ住居跡があることや竪穴の壁面に沿って周辺に柱穴が検出される点が挙げられる。

また，住居跡や溝状遺構から県内では数例しか出土が知られていない甑形土器（竪穴住居跡10

号・溝状遺構４号）や，器面にヘラミガキが施され，入念に研磨された黒色土器が出土している（竪穴住居跡８・９号・溝状遺構２・３・４号）。また，成川式土器と須恵器の共伴が認められる住居跡がある（竪穴住居跡９・16号・溝状遺構４号）。南九州の古墳時代の土器編年を考える上で貴重な資料を得ることができたものと考えられる。

溝状遺構は，断面形状がV字（１・３・４号）とU字（２号）を呈するがあり，一部のみの検出にとどまっているものもあるが，調査区外にもひろがる集落を取り巻いているものと予想される。溝状遺構１号からは鉄鏃が出土していることなどから溝状遺構のもつ機能が注目されるところである。

２　出土遺物

遺物については，遺構群の中でも溝状遺構４号から甕形土器，壺形土器，甑形土器，鉢形土器，平瓶，須恵器模倣坏，鉄製品など良好な一括資料が出土した。以下，各器種ごとの特徴についてふれることとする。

甕形土器は，口縁部が内湾し，脚台をもつタイプが主体である。従来から成川式土器の笹貫タイプとよばれているものである。甕形土器の胴部に施される突帯上の施文には，棒状工具や指頭によって突帯上に連続して刻みを施すもの，一定の間隔をおいて棒状工具で４～６か所に刻みを施すもの，突帯の上下から指頭で連続してつまむもの，一定の間隔をおき指頭によって突帯の数か所を口縁部方向にはね上げてアクセントをつけるものなどのバリエーションがある。このほか，甕形土器に口縁部が外反するものがある。全形を把握できる資料を提示できていないが，底部が丸底を呈するものが含まれている可能性も残る。

壺形土器については，竪穴住居跡２号から出土した二重口縁を呈する274や溝状遺構４号から出土した472のほか，同４号から出土した437は，内外面にミガキが施され黒色を呈するものであり希少な発見となった。

古墳時代の甑形土器については，これまで南九州地域の宮崎県域に集中して出土することが指摘されており，県内においてはほとんど出土が認められていなかったが，近年の発掘調査によって徐々に類例が増加しつつある。以下，類例を列挙する。なお，ここで用いる甑形土器の呼称については，杉井健氏の蒸気孔による形態分類に準ずることとする。

薩摩半島では，日置郡金峰町人来遺跡の６号竪穴住居跡から「つつぬけタイプ把手無大型甑」が出土しているほか，鹿児島市鹿児島大学構内遺跡からの出土例がある。また，薩摩川内市井上遺跡の竪穴住居跡から「つつぬけタイプ把手無大型甑」の完形品が出土している。胴部に刻み目のある突帯が１条めぐるタイプである。同大島遺跡では，古墳時代から古代にかけての甑形土器の良好な資料が出土しており，形態的には，「つつぬけタイプ」，「多孔式」の両タイプが認められる。このほか，指宿市橋牟礼川遺跡では，甑形土器の把手部分と思われる資料が出土し，薩摩郡宮之城町では，鉢形を呈する「円形多孔式タイプ」の甑形土器が採集されている。

本遺跡では，破片を含め甑形土器を12点確認し，うち10点を図化している。なお，このほか第89図の332，第126図の486なども甑形土器の一部としての可能性が残る。

蒸気孔の形態には単孔式と多孔式の両タイプが認められる。単孔式は，いわゆる「つつぬけタイプ把手無大型甑」（以下，つつぬけタイプ），多孔式は，「桟渡し用小円孔タイプ把手無甑」（以下，

桟後付けタイプ），底部に刺突によって蜂の巣状に穿孔する「多孔タイプ把手付甑」（以下，多孔タイプ）にあたる。428は「桟後付タイプ」と考えられるものである。底部立ち上がり付近に少なくとも16か所の円形の刺突痕があり，うち４か所が貫通している。従来の「桟後付けタイプ」のように小円孔が一対あるいは二対で対角をなさない点が特異である。使用方法の検討，復元が必要となるが小円孔が使用のために施されたものでない場合は，「つつぬけタイプ」の範疇に含まれる可能性がある。「多孔タイプ」の429・488は全体の器形が不明であるが把手付きではないことも考えられる。「多孔タイプ」の底部や「桟後付タイプ」の底部立ち上がり付近にみられる小円孔は，どちらも焼成前に何らかの工具による刺突によって穿孔されている。

甑形土器のうち器形が把握できる資料についてはいずれのタイプも大型で，口縁部端がわずかに外反する共通点がある。加えて胴部に粘土積み上げ時の接合痕，底部（蒸気孔）端には指頭痕が観察されるものが多いことも特徴である。

316・428のように胴部に１条の突帯がめぐる資料は，県内でも初見の可能性がある。前述した井上遺跡出土の甑形土器もこのタイプである。在地色が強いといわれる成川式土器の特徴が反映されたものと思われる。県内においては，これまで古墳時代の住居跡が基本的に竈を伴わないと捉えられていることから，住居跡中央部の地床炉（焼土域あるいは掘り込みをもつ焼土域）で使用された可能性がある。今後，住居の内部構造や甑形土器の使用法についての検討が課題となるであろう。

須恵器は県内では出土例の少ない平瓶や提瓶の出土が注目される。平瓶は11号住居跡出土の326，溝状遺構４号の452，一括遺物の552の３点を確認した。溝状遺構４号出土の452は比較的大型のもので把手のつくタイプである。

黒色土器の存在も本遺跡の特徴のひとつである。器面がヘラミガキによって研磨され，黒色を呈する一群である。器種としては，壺形土器・鉢形土器・脚台のある鉢形土器・椀形土器がある。

543は須恵器模倣坏と思われる。模倣坏の分布の南限は６Ｃ代までにおいて鹿児島県志布志湾沿地域岸から熊本県球磨地域あたりと考えられ，前方後円墳の南限と一致することが指摘されている。

463の鉄製鈴は，溝状遺構４号から出土したもので鍛造技術によって製作されたと思われる。形状は球形で腹部に鍔状突帯がつくタイプである。頂部には方形の鈕がつく。丸はチャートの小礫が利用されているようである。鍛造技術によって小型の製品を製作していることから高度な技術が存在したことを示すものと考えられる。同様の形態で鍛造によって製作された鉄製鈴は，滋賀県大津市の横尾山古墳７号墳に出土例がある。２点が出土しており，古墳の築造年代は７Ｃ代中葉と報告されている。中尾遺跡では，463のほか，4号地下式横穴墓から銅製の鈴が副葬品として出土している。 このような鍔状突帯をもつ鈴が鍛造によって多く作られるようになるのは６Ｃ後半以降と考えられており，遺跡の年代を考える上での一つの傍証となろう。

本遺跡は，甑形土器・須恵器模倣坏・黒色土器などがまとまって出土しており，古墳時代中期から後期に新しく出現するものとして指摘されている要素をほぼ満たしているものと思われる。

報告するにあたって遺跡，遺構，遺物について全くといっていいほど咀嚼しきれていない状況であることをお詫びして結びとしたい。今後の南九州における古墳時代の研究に少しでも役立つことができれば幸いである。

〈参考・引用文献〉

河口貞徳 「入来遺跡発掘調査概報」『鹿児島考古』第11号 1976 鹿児島県考古学会

杉井 健 「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集 1999 大阪大学考古学研究室

杉井 健 「国家形成期の考古学」大阪大学考古学研究室10周年記念論集 1999 大阪大学考古学研究室

杉井 健 「朝鮮半島渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究」 2003 熊本大学文学部

中村直子 「古墳時代における南部九州在地土器と土師器との関係性」『新しい可能性を求めて「コミュニケーションのかたち－ことば・もの・メディアー」』鹿児島大学全学プロジェクト報告書 2004 鹿児島大学

『古墳時代中・後期の土師器－その編年と地域性－』 第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料2002 九州前方後円墳研究会

『二見谷古墳群』 1975 兵庫県城崎郡城崎町教育委員会

『横尾山古墳発掘調査報告書』 1988 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会

『内宮田遺跡・柳迫遺跡・中別府遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第30集 2001 宮崎県埋蔵文化財センター

『山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第79集 2003 宮崎県埋蔵文化財センター

『水の谷遺跡』 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書（5） 1986 鹿屋市教育委員会

『妻山元遺跡』 国分市埋蔵文化財発掘調査報告書（1） 1978 国分市教育委員会

『城山山頂遺跡』 国分市埋蔵文化財発掘調査報告書（2） 1985 国分市教育委員会

『赤木・下洞峯・大四郎・内和遺跡』 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書 1978 西之表市教育委員会

『後ヶ迫A遺跡』 垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書（3） 1999 垂水市教育委員会

『大中原遺跡』 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（9） 2000 根占町教育委員会

『上中段遺跡（第4地点）』 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（4） 1986 末吉町教育委員会

『長田遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（2） 2003 有明町教育委員会

『西免遺跡・杉場遺跡・山神遺跡・曲迫遺跡・桑ノ丸遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財報告書（7） 1977 鹿児島県教育委員会

『成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28） 1983 鹿児島県教育委員会

『榎木原遺跡Ⅲ』 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（53） 1990 鹿児島県教育委員会

『保養院遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（11） 1994 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『東田遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（16） 1996 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『上野原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（52） 2003 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『桐木遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（71） 2004 鹿児島県立埋蔵文化財センター

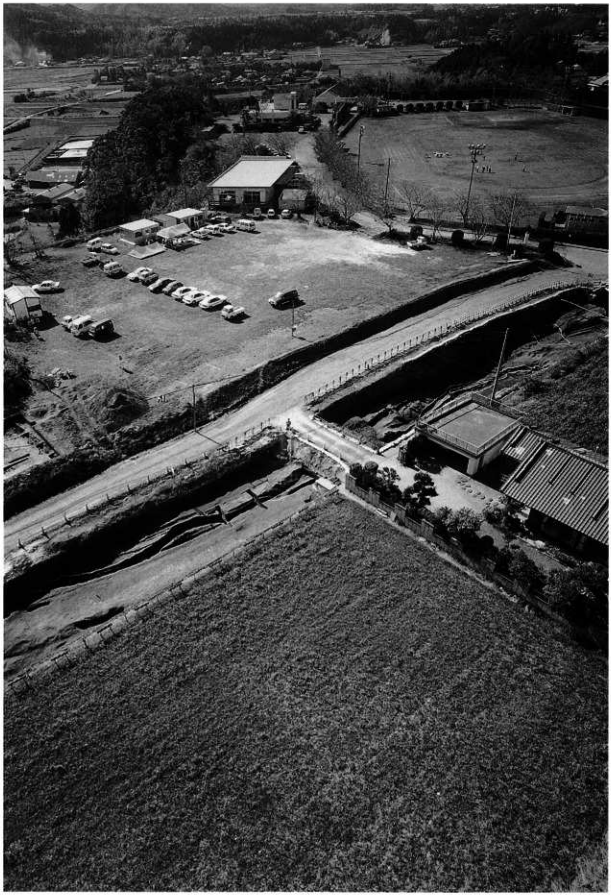
『縄文の森から』 鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要第2号 2004 鹿児島県立埋蔵文化財センター

『宮之城町史』 2000 宮之城町

『吾平町誌』 上巻 1991 吾平町

写 真 図 版

遺跡全景（平成３年度）



遺跡全景（平成５年度）

遺跡全景（平成７年度）

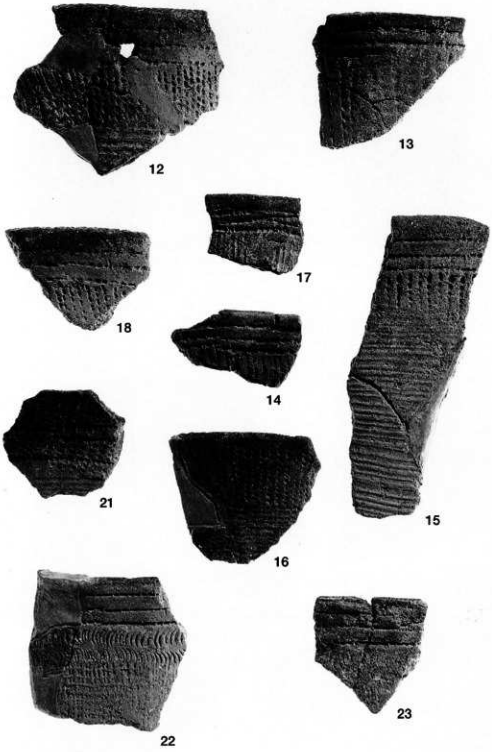
図版4

①②Ⅶ層（縄文早期）遺物出土状況　③集石１号　④集石１号（本体部）　⑤集石１号（かき出し部）

①集石7号
②集石3号断面
③集石2号

図版6

Ⅶ層出土土器1（Ⅰ・Ⅱ類）



Ⅶ層出土土器2（Ⅲ・Ⅳ類）

24

34

27

28

30

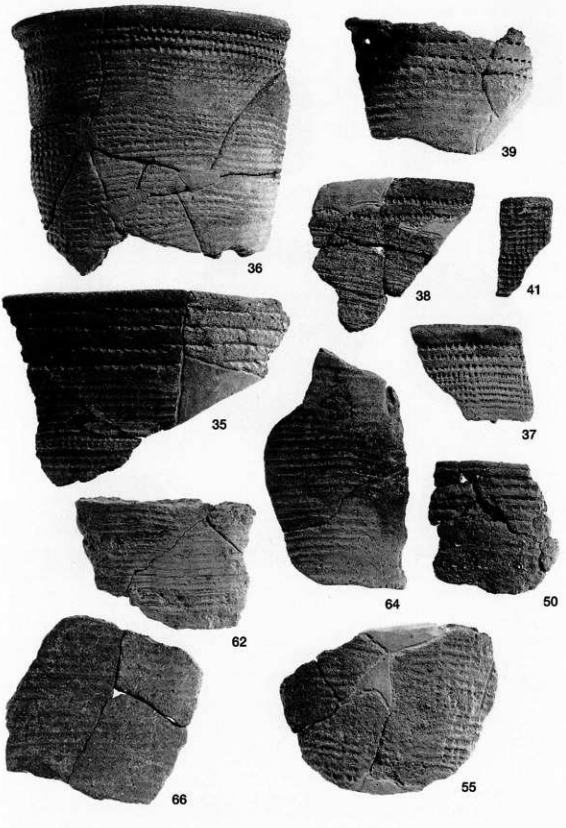
29

32

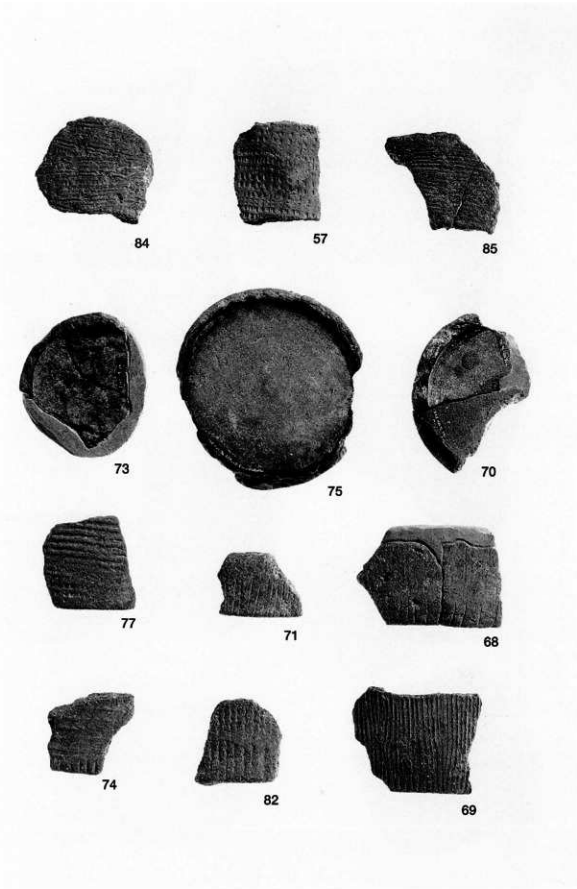
33

26

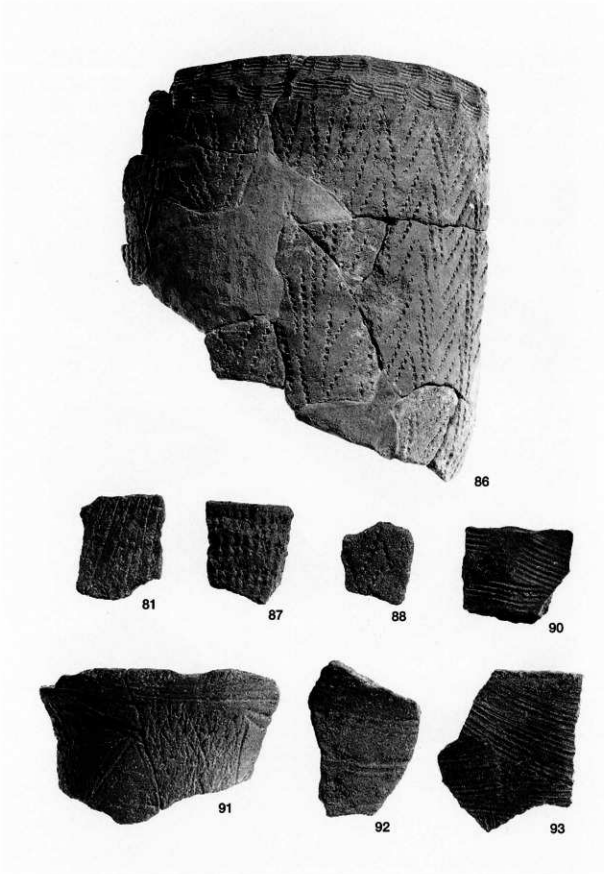
Ⅷ層出土土器3（Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類）



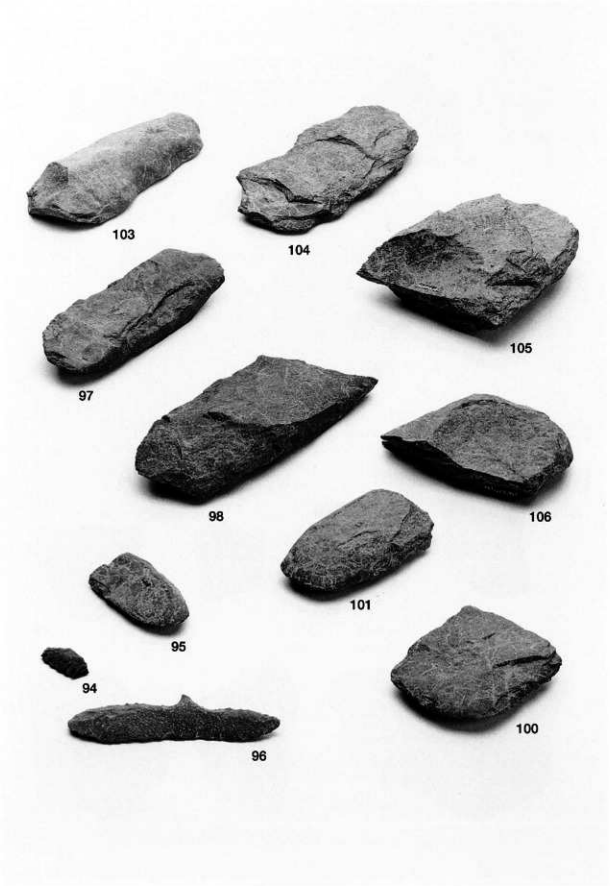
Ⅶ層出土土器4（Ⅶ類）



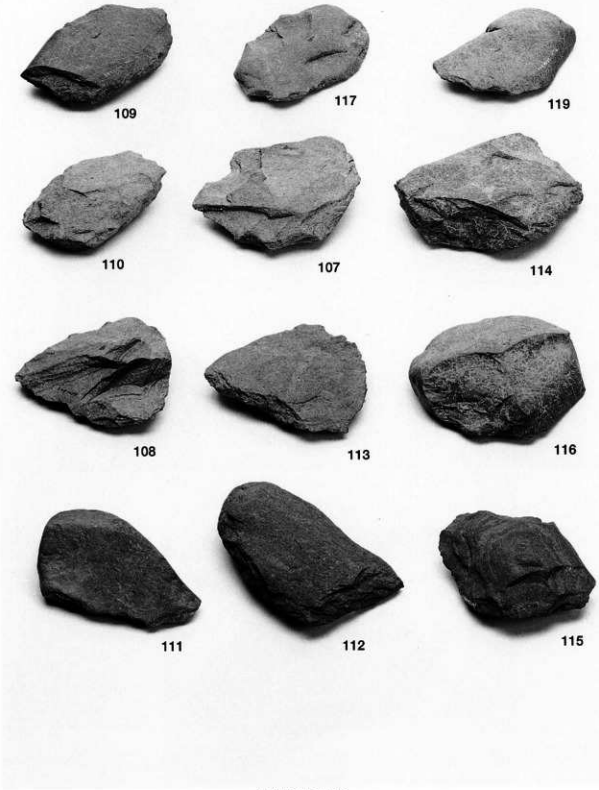
Ⅶ層出土土器５（底部）



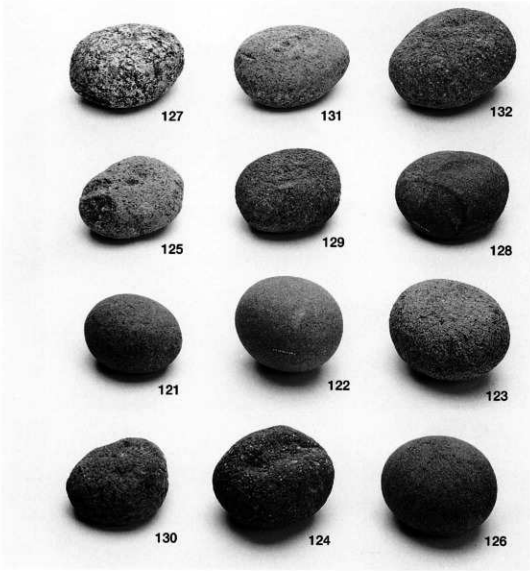
Ⅶ層出土土器6（Ⅸ・Ⅹ類ほか）

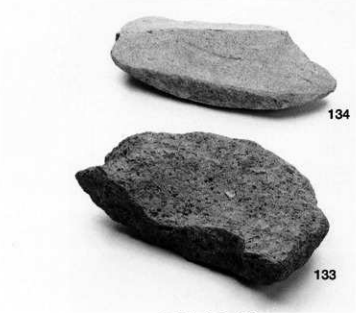


Ⅶ層出土石器 1

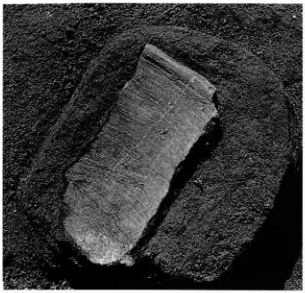


Ⅶ層出土石器 2





Ⅶ層出土土石器 3

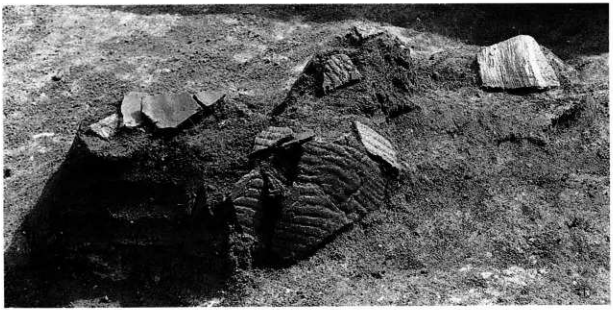


254

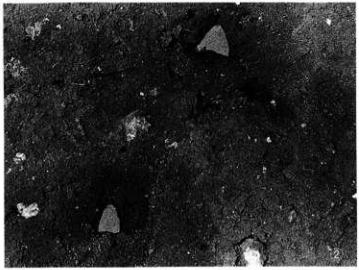
228

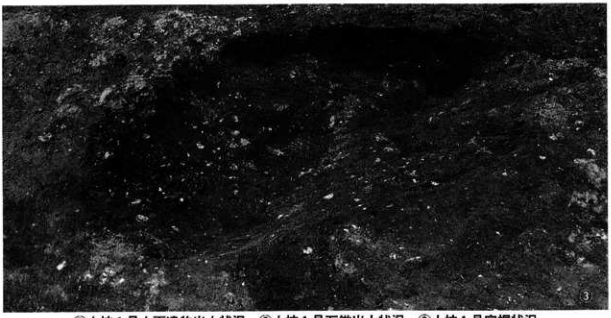
Ⅳ層（縄文時代晩期）遺物出土状況　236

図版16



143





①土坑1号上面遺物出土状況　②土坑1号石鏃出土状況　③土坑1号完掘状況

149

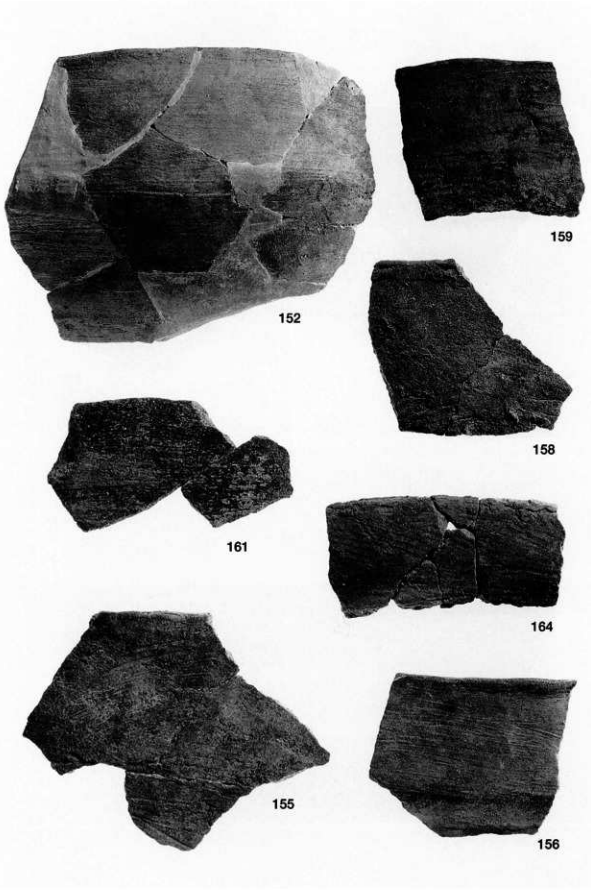
236

230

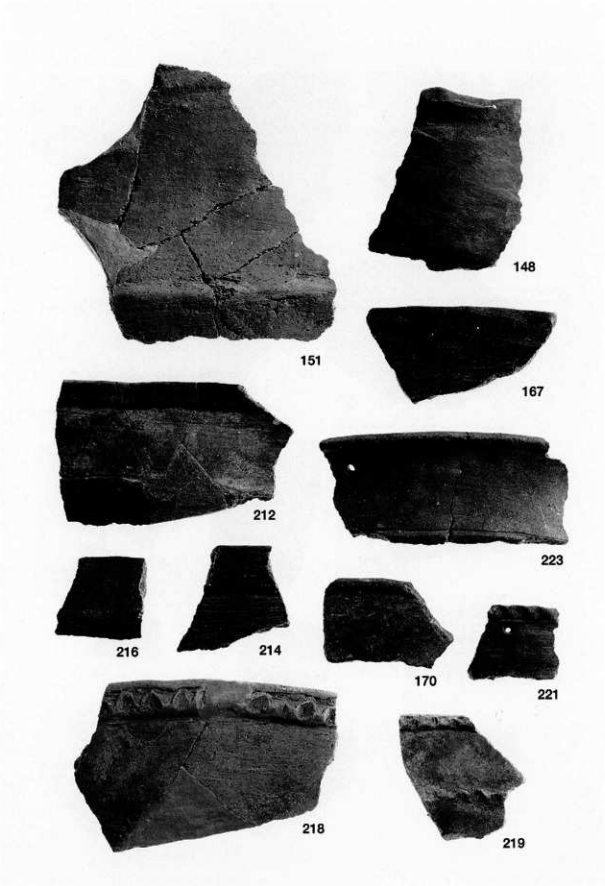
143

Ⅳ層出土土器1

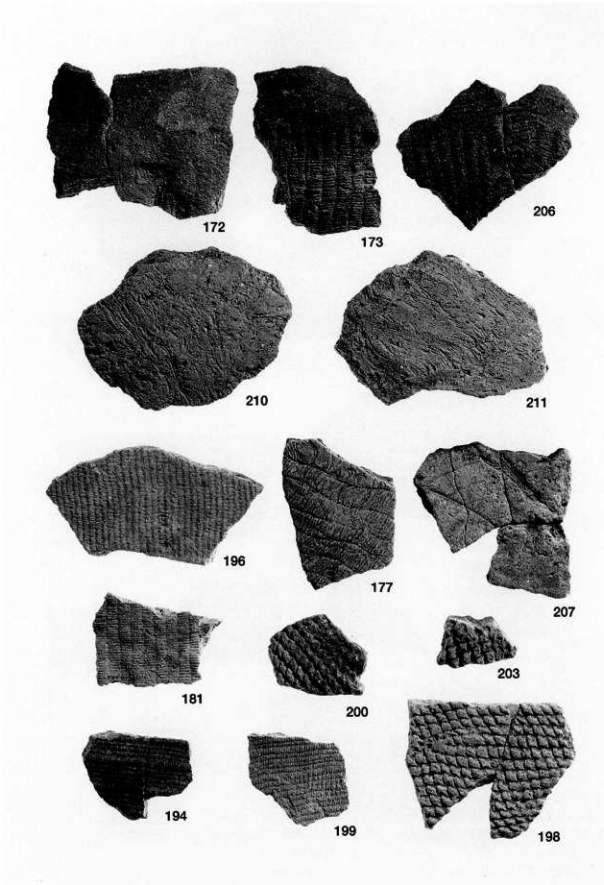
図版18



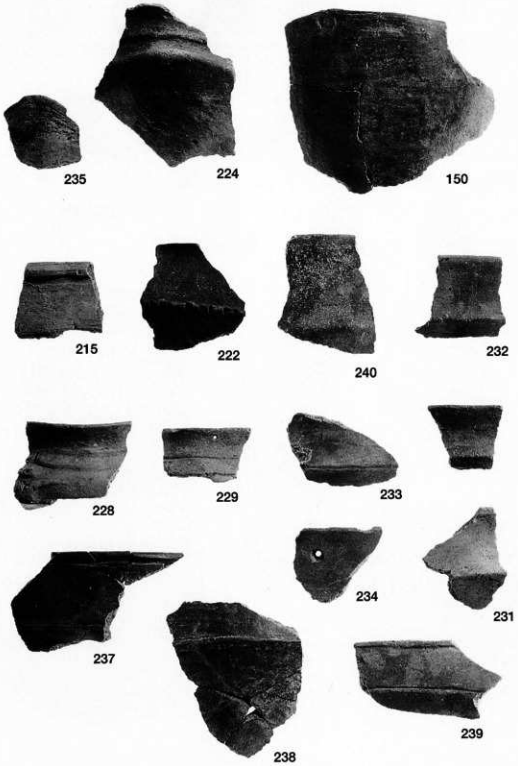
Ⅳ層出土土器2



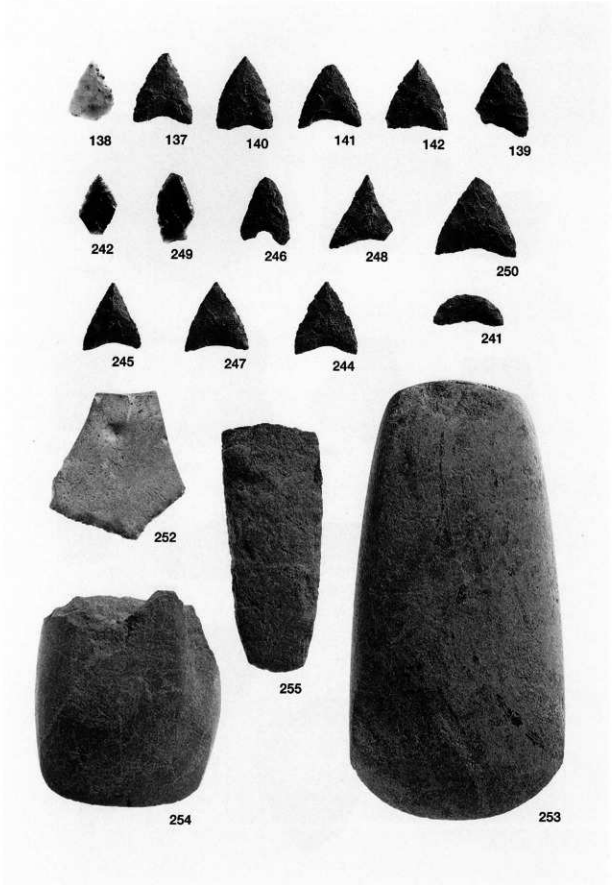
Ⅳ層出土土器3



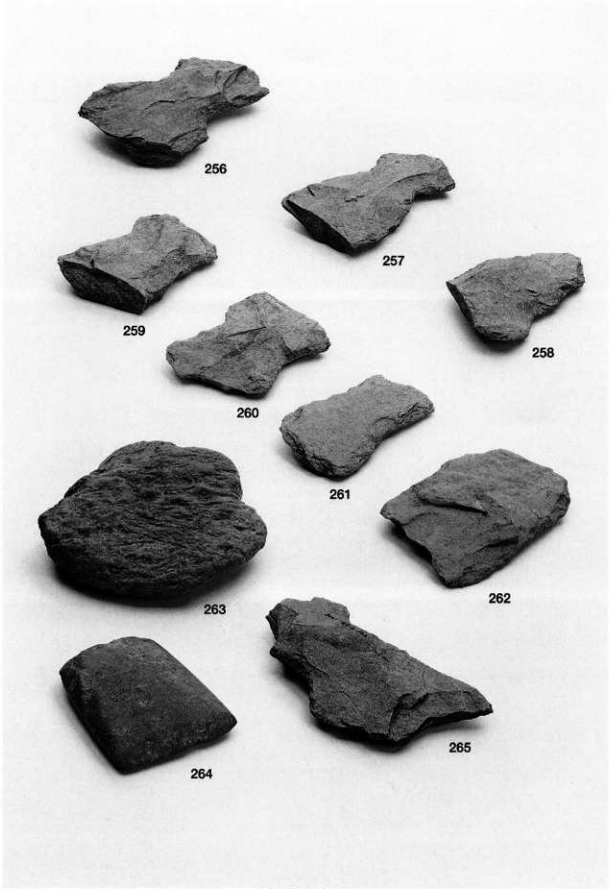
Ⅳ層出土土器4



Ⅳ層出土土器5

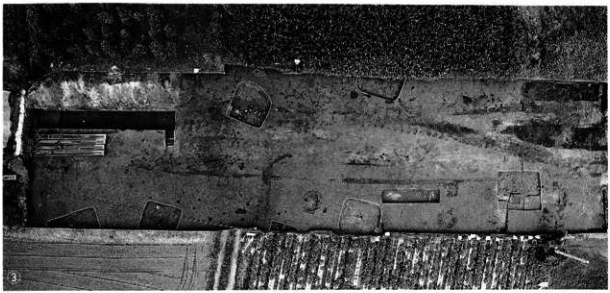

138
137
140
141
142
139
242
249
246
248
250
245
247
244
241
252
255
254
253

Ⅳ層出土石器1



Ⅳ層出土石器2ほか

図版24



竪穴住居跡群　①平成３年度　②平成５年度　③平成７年度

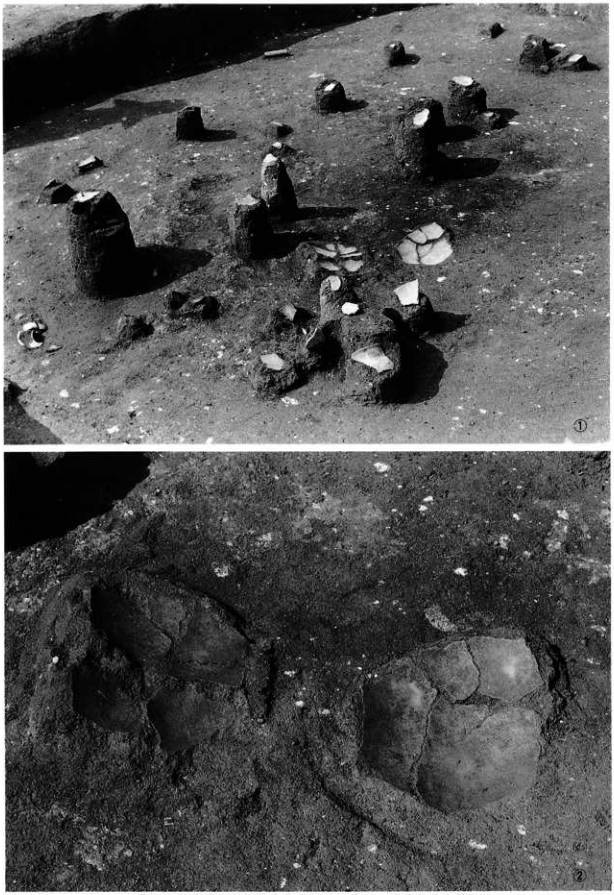
①遺跡近景（北から）　②遺跡近景（南から）

図版26

①

②

①竪穴住居跡1号（南から）　②同1号（北から）



①竪穴住居跡1号遺物出土状況　②同1号遺物出土状況